



ヘルメスの翼に

—小樽商科大学 FD 活動報告書—

第 4 集

目 次

はじめに

— 学 部 編 —

第 1 章 FD 活動報告

第 2 章 FD 研究報告「GPA 制度の実施及び「秀」評価について」

第 3 章 平成 17 年度「授業改善のためのアンケート」の集計結果と分析

— ビジネススクール 編 —

第 4 章 FD 活動報告

第 5 章 平成 17 年度「教育評価」の結果と分析

小樽商科大学教育開発センター

(2006 年度)

まえがき

本報告書「ヘルメスの翼に―小樽商科大学 FD 活動報告書―第 4 集」は、平成 17 年度における教育開発センターの FD 活動をまとめたものです。

本学における FD 活動は、平成 12 年度より教育課程改善委員会のもとに設置された FD 専門部会を実施主体として活動が続けてきました。その後、本学における FD 活動を組織的に展開するために、教育課程改善委員会を発展的に解消しその機能を継承する教育開発センターが平成 16 年 4 月に設置されました。

教育開発センターの FD 活動は、学部と大学院現代商学専攻における FD 活動を「学部・大学院現代商学専攻教育開発部門」の下部組織である「FD 専門部会」が実施主体となり、また、ビジネススクール（専門職大学院）である大学院アントレプレナーシップ専攻における FD 活動は、「アントレプレナーシップ専攻教育開発部門」が実施主体となり展開されています。

FD 活動を通じてより質の高い教育を実現するために、本学教職員、学生、関係者の忌憚のないご意見を教育開発センターにいただければ幸いです。

本報告書の表題「ヘルメスの翼に」は、本学の学章（シンボルマーク）「ヘルメスの翼に一星」から取ったものです。本学ホームページによると、学章について次のように説明されています。

この学章「ヘルメスの翼に一星」は、商業神ヘルメスの翼の上にある一星が、北の大地から英知の光を放つ様子をあらわしたものです。下のリボンには、1910 年の創立と Otaru University of Commerce の頭文字が示されています。

ヘルメス (Hermes) は、ギリシャ神話の神の一人で伝令の神、また商業、学術などの神とされています。ローマではマーキュリー (Mercury) と呼ばれています。ヘルメスは 2 匹の蛇がからみついた翼の杖をもち、伝令の神として世界を飛翔しています。一星は、本学の前身である小樽高等商業学校以来、本学のシンボルとして用いられてきました。「北に一星あり。小なれどその輝光強し。」と謳われた本学の伝統を象徴しています。

FD 活動を通じてより質の高い教育が実現でき、それによってヘルメスの翼に輝く一星がより強く光り輝くことを願って、本報告書の表題を「ヘルメスの翼に」としました。

本報告書は FD 専門部会及びアントレプレナーシップ専攻教育開発部門が中心となって作成したもので、作成するにあたってご協力をいただいた本学学務課をはじめとする関係教職員 みなさんに謝意を表します。

平成 19 年 3 月

FD 専門部会（平成 17 年度）

- 部会長 大矢 繁夫（大学院現代商学専攻長）
- 委員 和田 健夫（教育開発センター長、教育担当副学長）
- 委員 船津 秀樹（経済学科）
- 委員 中村 竜哉（商学科）
- 委員 大沼 宏（商学科）
- 委員 大津 晶（社会情報学科）
- 委員 杉山 成（一般教育等）
- 委員 岡部 善平（一般教育等）
- 委員 尾形 弘人（言語センター）

大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門（平成 17 年度）

- 部門長 奥田 和重（アントレプレナーシップ専攻）
- 委員 山本眞樹夫（教育開発センター副センター長、総務担当副学長）
- 委員 玉井 健一（アントレプレナーシップ専攻）
- 委員 簗本 智之（アントレプレナーシップ専攻）
- 委員 ヨン・ステファンソン（アントレプレナーシップ専攻）

はじめに

教育開発センター長 和田健夫（教育担当副学長）

小樽商科大学の平成 17 年度における FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」第 4 集をお届けします。報告書の作成を担当するメンバーが多忙なため、公表が相当に遅れましたことをお詫びいたします。

本学の教学分野における重要な課題の一つに、学部の成績評価の問題があります。学生に対する種々のアンケートの自由記述欄や副学長への投書（「学生の声」）では、しばしば、教員の成績評価の基準がわからない、学科によって成績評価に差がある（特定の学科が厳しすぎる）などの不満・批判が寄せられていました。そのため、本学は、成績評価の改善をすべく、中期計画のなかに、

- ① 成績評価基準の過度のばらつきを是正するため、成績評価基準を明示し、厳格に運用する
- ② より客観的で厳密な評価を与えるため、現在の 4 段階評価の細分化と GPA 制度の導入をはかる

ことを盛り込みました。学部大学院教育開発部門 FD 専門部会は平成 16、17 年度にかけて、この課題に取り組みました。その結果は FD 研究に報告されているとおりです。これらの課題はすべて実現に至りました。

ビジネス・スクールでは、アントレプレナーシップ教育開発部門が、平成 17 年度も、厳密で広範な教育評価を行いました。これにより、教育の改善が一層進むことを期待しています。

目 次

まえがき

はじめに教育開発センター長 和田健夫（教育担当副学長）

—学 部 編—

第 1 章 FD 活動報告

1.1	FD 専門部会の活動状況	1
1.1.1	FD 専門部会の活動	1
1.1.2	研修会等の実施	1
(1)	新任教員研修会の実施	1
(2)	FD 講演会の実施	2
(3)	FD ワークショップの実施	3
1.1.3	平成 16 年度「授業改善のためのアンケート」の分析	3
1.1.4	平成 17 年度「授業改善のためのアンケート」の実施	4
1.1.5	FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」第 3 集の発行	4
1.1.6	教員相互の授業参観の実施	4
1.1.7	FD コラム（第 18 回「大教室講義におけるシャトルカードの利用」）	5

一般教育・心理学 助教授 杉山 成

第 2 章 FD 研究報告「GPA 制度の実施及び「秀」評価について」

2.1	検討経緯	7
2.1.1	GPA 制度の導入等についての検討依頼	7
2.1.2	本学における成績基準のありかたについて	7
2.2	検討結果	9
2.2.1	GPA 制度の実施及び「秀」評価について	9
2.2.2	GPA（Grade Point Average）制度について	12

第 3 章 平成 17 年度「授業改善のためのアンケート」の集計結果と分析

小樽商科大学教育開発センター 助手 辻 義人

3.1	「授業改善のためのアンケート」の概要	19
3.1.1	アンケートの概要	19
3.1.2	基礎データの集計	21
3.2	アンケート分析	23

3.2.1 授業満足度と他質問項目との相関分析	23
3.2.2 平均評定値上位・下位 20 位間の数量的比較	31
3.2.3 平均評定値上位・下位 20 位間の自由記述の比較	42
3.2.4 授業の満足度と推薦度との関連	51
3.2.5 授業の満足度とクラスサイズとの関連	53
3.2.6 自由記述欄の分析	56
3.3 授業改善アンケートのまとめ ―授業改善の指針―	67
3.3.1 定量的分析を通して	67
3.3.2 定性的分析を通して	68
3.3.3 授業改善の指針	68

―ビジネススクール編―

第 4 章 FD 活動報告

4.1 アントレプレナーシップ専攻教育開発部門の活動状況	71
4.1.1 アントレプレナーシップ専攻教育開発部門の活動	71
4.1.2 研修会の開催状況	71
4.1.3 授業評価等の実施状況	71
(1) 平成 17 年度「授業評価アンケート」の実施	71
(2) 教員相互の授業参観の実施	72
(3) 教員による自己評価の実施	72
4.1.4 FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」第 3 集への掲載	72

第 5 章 平成 17 年度「教育評価」の結果と分析

大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門長 教授 奥田 和重

5.1 本学ビジネススクールにおける教育評価	73
5.2 学生による授業評価	74
5.2.1 アンケート集計結果と分析	74
(1) アンケートの概要	74
(2) アンケートの集計結果	75
(3) アンケートの分析	76
5.2.2 成績評価	109
(1) 履修者数と単位取得者数	109
(2) 取得単位数と GPA	110
5.3 自己評価	112

5.4 同僚評価	126
付録1. アントレプレナーシップ専攻教育評価ガイドライン	127
付録2. 平成16年度の相関関数	136
付録3. 「自由記述」	138
小樽商科大学教育開発センター	151

— 学 部 編 —

第 1 章

F D 活 動 報 告

(FD 専門部会)

第 1 章 FD 活動報告

1.1 FD 専門部会の活動状況

1.1.1 FD 専門部会の活動

平成 17 年度の FD 専門部会は 8 回開催された。主な審議内容は以下のようなものである。

- (1) FD に関する研究「平成 13 年度教育課程全体の検証」
- (2) FD 講演会の実施「授業改善について」
- (3) FD 活動報告書「ヘルメスの翼に（第 3 集）」の発行
- (4) 平成 16 年度「授業改善のためのアンケート」の分析
- (5) 平成 17 年度「授業改善のためのアンケート」の実施
- (6) 教員相互の授業参観の実施
- (7) FD コラムの学報への掲載
- (8) FD ワークショップの実施（本学における授業改善の取り組みの効果について）
- (9) GPA 制度の導入について
- (10) 成績評価基準について
- (11) 平成 18 年度以降の授業改善アンケートのありかたについて
- (12) 本学のゼミ運営のありかたについて
- (13) セミナー等派遣（第 11 回 FD フォーラム：コンソーシアム京都ほか）

1.1.2 研修会等の実施

(1) 新任教員研修会の実施

平成 17 年度に実施した新任教員研修会の内容は次のとおりである。

日 時 平成 17 年 4 月 1 日（金） 13 時 30 分～15 時 45 分

場 所 事務棟第 2 会議室

参加者 新任教員 9 名

研修内容

- ・ 秋山学長講演「小樽商科大学の現状と課題」
- ・ 小樽商科大学の教育課程について（説明者 和田 教育担当副学長）
- ・ 本学の FD 活動について（説明者 大矢 FD 専門部会長）
- ・ 講義室機器説明会
（説明者 奥田 大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門長）

(2) FD 講演会の実施

FD 専門部会は、平成 17 年 12 月 14 日(水)に和歌山大学で FD 活動の中心的な役割を担っている経済学部助教授の吉田雅章氏を招き、FD 講演会を開催した。

(以下、ホームページに掲載した記事)

『FD 講演会は、テーマを、「学生による授業評価と公開授業&検討会との比較」とし、和歌山大学における 7 年余の FD 活動、とくに公開授業と検討会を中心とした授業改善の取組について具体的事例に基づき説明が行われました。

また、学生による授業評価を授業改善に用いる場合の問題点の検証や、和歌山大学での FD 活動を当初から支えてこられた講師の体験談は、今後の小樽商科大学の FD 活動にとっておおいに参考となるものでした。

講演は、パワーポイントと配付資料に基づき効果的に進行し、吉田先生のわかりやすい説明と巧みな話術も相まって、終始、楽しくなごやかな雰囲気のもとに行われ、参加した教職員は熱心に耳を傾けていました。約 1 時間の講演後の質疑では、出席した教員から活発な意見交換が行われました。』



(3) FD ワークショップの実施

平成 17 年度「FD ワークショップ」は、テーマを「本学における授業改善のありかたについて」として、FD 専門部会の主催により平成 17 年 11 月 17 日(木)に 251 講義室(4 号館)で開催され、学科委員、教務委員をはじめ多数の教員や事務職員が参加した。

(以下、ホームページに掲載した記事)

『ワークショップは、大矢 FD 専門部会長の司会で進められ、はじめに和田教育担当副学長の開会挨拶が行われ、ワークショップ開催に至った経緯及び趣旨について説明がありました。

第 1 部では、FD 専門部会委員による報告が行われ、中村(竜)教授から、他大学における教育内容等の改革状況について、最近の 3 年間の文部科学省報告のまとめをもとに報告がなされました。また、大沼助教授、岡部助教授、杉山助教授により、平成 16 年度授業改善アンケートの分析結果をもとに授業改善効果の検証について報告が行われました。

第 2 部では、これらの報告及び検証結果に基づいて全体討論が行われました。討論では、これまでの授業改善アンケートの実施方法の見直し、授業改善アンケートの結果を大学評価とどう結びつけていくかを中心に活発な意見がだされました。』



1.1.3 平成 16 年度「授業改善のためのアンケート」の分析

FD 専門部会では、平成 16 年度に 349 科目で実施した授業改善のためのアンケートの分析を行い、その結果を FD 活動報告書「ヘルメスの翼に(第 3 集)」に掲載した。分析は次の事項を中心に行われた。

- ・授業の満足度と他質問項目との相関
- ・平均評価値の上位 20 科目と下位 20 科目の質問項目 1～7 に関する比較
- ・授業満足度と推薦度との関連

- ・クラスサイズと授業への満足度との関連
- ・平均評価値の上位 20 科目と下位 20 科目における自由記述欄の分析
- ・自由記述欄の分析
- ・考察—授業改善の視点

1.1.4 平成 17 年度「授業改善のためのアンケート」の実施

平成 17 年度「授業改善のためのアンケート」を 312 科目で実施した。アンケートの質問項目は平成 14 年度から同じである。平成 17 年度のアンケートの概要、分析等は第 3 章に掲載している。

1.1.5 FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」第 3 集の発行

FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」第 3 集は、FD 専門部会が平成 16 年度に活動した内容をまとめたもので、また、平成 16 年度に実施した「授業改善のためのアンケート」の分析結果の報告書も兼ねている。第 3 集は、平成 18 年 3 月に出版され、本学関係部署、教員、学生に配布するとともに、大学評価・学位授与機構をはじめ全国の国公立大学に設置されている FD 関連組織にも送付している。

1.1.6 教員相互の授業参観の実施

平成 17 年度に実施した教員相互の授業参観は、表 1.1 のとおりである。

表 1.1 教員相互の授業参観日程表

	日 時	授業科目名	担当教員
1	平成 17 年 5 月 26 日(木)3 講目	商法 I	道野真弘先生
2	平成 17 年 5 月 27 日(金)1 講目	財務会計論	渡邊和夫先生
3	平成 17 年 6 月 2 日(木)3 講目	化学 I B	片岡正光先生
4	平成 17 年 7 月 14 日(木)3 講目	原価計算論	旗本智之先生
5	平成 17 年 7 月 15 日(金)3 講目	保険論	中浜 隆先生
6	平成 17 年 12 月 1 日(木)1 講目	ドイツ語 I -4	大塚 譲先生
7	平成 17 年 12 月 12 日(月)2 講目	認知科学	佐山公一先生

1.1.7 FD コラム

平成 14 年度から FD 広報として学報及び教育開発センターのホームページに「FD コラム」を掲載している。平成 17 年度に掲載した FD コラムは次のようである。(回数は第 1 回からの通し番号で記載している。)

第 18 回 「大教室講義におけるシャトルカードの利用」

一般教育・心理学 助教授 杉山 成

—学報第 314 号 (H 17.6) 掲載—

筆者の講義では 4 年前から「シャトルカード」を使用して平常点の採点を行っています。これは三重大学・織田揮準教授による「大福帖」を単純にしたもので、A 4 大の用紙に 6 回分の小レポート課題（または授業改善点についての質問）の記入欄とそれに対する教員の回答を並べてレイアウトしたものです。学生側のレポート記入と教員側の確認・添削を通して、学生—教員の間を行き来するという意味で、スペースシャトルになぞらえてシャトルカードと呼んでいます。平成 12 年に本学で行った織田先生の FD 講演会「学生からのフィードバック情報を取り入れた授業改善—大福帖効果について—」を受け、自分の講義（160 や 210 といった大教室で行うことが多い）に何とか学生とのインタラクションを持ち込めないかと考えて開始しました。

この方法の最大の長所は、学生一人一人にフィードバックを与えることができるという点です。基礎科目はレポートの書き方に慣れていない 1 年次学生の受講が多いため、レポートの回答にも話し言葉や流行語が平気で使用されていることが少なくありません。以前もそうした回答には次の回の冒頭で注意を促したりしていたのですが、大教室講義で全体に向けて注意をしても自分のことが言われているとは思にくいようで、あまり改善の効果がありませんでした。その点、シャトルカードでのフィードバックは直接的なので非常に効果的です。教員のフィードバックへの疑問や反対意見が書かれて戻ってくることもあります。そのような場合には互いが納得できるまで意見の交換を続けるようにしています。

さらに、副次的な長所として、代返の防止や小レポート回答の蓄積による動機づけ効果をあげることができます。まず前者は、一人の学生が一枚のカードに継続して記入していきますので、字をみれば代返をチェックすることができるということですが、ただ、これは代返を暴くというよりも、学生に代返をする気を失わせる効果となっているようです。実際、通常の（学生→教員という片道の）小レポートを行っていたときよりも学生の出席率はかなり上昇しているように感じています。後者については、自分のシャトルカードを眺めることによって学習の達成状況を把握することがで

きるということによる効果です。学生話を聴いたりアンケートの自由記述を見ていると、成績についての達成状況が明確で取り組むべき目標が明確である（試験で何点くらい取れば合格、試験で何点くらいとれば優ということがわかる）ことは、そうした見通しがつかない場合に比べ、統制感を高めて試験勉強への動機づけを高める効果を持っているようです。

このように4年の使用を通して、筆者はシャトルカードの使用に一定の効果を感じています。ただ、小人数の授業であれば、直接、学生に注意やアドバイスをしたほうがより効果的でしょうから、この方法はそうした直接的なフィードバックの不可能な場合に限定される方法といえるかもしれません。また、この手法の短所としては、やはり添削に時間と労力がかかる点があげられます。200人超の受講生ですと半日以上は添削と出席チェックにかかりきりになってしまうというのが現実です。ただ、こうした学生との（ささやかな）インタラクションは、どうやら教員側にとっても講義へのコミットメントと動機づけを高める効果があるようで、今後もしばらく継続していこうと考えています。

— 学 部 編 —

第 2 章

F D 研 究 報 告

「GPA 制度の実施及び「秀」評価について」

第 2 章 FD 研究報告

GPA 制度の実施及び「秀」評価について

2.1 検討経緯

FD 専門部会では、平成 16 年度において GPA 制度の導入についての検討を開始し、学部・大学院教育開発部門では、これらの検討・報告等（内容は、ヘルメスの翼に（第 3 集）に掲載）を踏まえ、平成 17 年 10 月 28 日に「GPA 制度の導入等」についての検討依頼を教務委員会へ行いました。また、これと対をなすものとして、平成 17 年 12 月 7 日には「本学における成績評価基準のあり方」についての検討依頼を行いました。

その結果、平成 18 年 2 月 21 日に、学部教務委員会において GPA 制度の実施及び「秀」評価についての検討結果がまとめられ、平成 18 年度より GPA 制度が導入されております。

2.1.1 GPA 制度の導入等についての検討依頼

平成 17 年 10 月 28 日

教務委員会委員長 殿

学部・大学院教育開発部門
部門長 小田 福男

学部・大学院現代商学専攻教育開発部門 FD 専門部会では、中期計画を実施するため、平成 16 年度において GPA 制度の導入についての検討を開始し、平成 17 年 2 月 15 日の FD ワークショップでは、GPA 制度導入の必要性や導入する場合の課題等について他の大学の先行事例及び平成 13 年度から平成 15 年度までの実際の成績データを用い報告を行いました。

これらの検討・報告等を踏まえ、GPA 制度の導入及び成績評価の細分化等について、平成 18 年度からの導入に向け、ご検討をよろしくお願いいたします。

2.1.2 本学における成績基準のありかたについて

平成 17 年 12 月 7 日

教務委員会委員長 殿

学部・大学院教育開発部門
部門長 小田 福男

成績評価に関する中期計画及び年度計画に関して、教育開発センター学部・大学院教育開発部門は、別紙のような結論に達しました。別紙 6 と 7 において提案を行っています。これは、先般検討依頼をいたしました GPA 制度導入と対を成すものです。教務委員会においてご検討をお願いします。

(別紙) 本学における成績評価基準のありかた

1 教育開発センター学部・大学院教育開発部門（以下「学部・大学院教育開発部門」という。）は、中期計画に従って、5 段階成績評価を前提とする GPA 制度及び関連する諸制度の導入について提案を行ったところである。GPA 制度が有効に機能するためには、さらに、一定の基準による厳密で一貫した成績評価（以下「厳密な成績評価」という。）が行われることが必要である。そのために、中期計画では、GPA 制度と共に厳密な成績評価の導入を謳っている。

2 本学では、授業科目間に、ある程度の成績評価のばらつきが見られ、平成 14 年度に本学が受けた分野別教育評価においても、大学評価・学位授与機構から指摘を受けているところである。

3 厳密な成績評価は、履修科目上限制（キャップ制）との関係でも必要である。履修科目を制限されている学生にとって、授業科目の成績評価基準が示されていることが望ましい。また、科目間又は学科間で、成績評価に過度のばらつきがあるのは問題である。

4 学部・大学院教育開発部門は、厳密な成績評価に関して検討を行った。成績評価を均等化するのであれば、相対評価を導入すべきである。しかし、多様な学問分野を抱える本学では、一律に相対評価を行うことは困難であり、教員の理解を得がたく、適切ではない。従って、成績評価は絶対評価とすべきである。

5 絶対評価を原則としつつ成績評価のばらつきを少なくする方法として、4 段階（秀、優、良、可）のそれぞれについて、評価を受ける共通の学習到達度（一律の評価基準）を設定し、すべての教員がそれに従い評価することが考えられる。しかし、一律の評価基準は、学問分野の特殊性を考慮することができないという欠点がある。また、基準自体も抽象的な内容になり、実効性に問題がある。

6 以上の考察に基づいて、学部・大学院教育開発部門は以下の結論に達した。

①シラバスに、「評価の基準」という項目を新設し、各教員が、4 段階について学習到達度を明示する。各教員は、それに従って適切な成績評価を行う。

②各学科において、可能な限り評価基準の共通化をはかる等、過度のばらつきが起こらないように努力する。

7 なお、学部・大学院教育開発部門では、学生の試験対策に資するとともに、評価基準の適用の実際を判断する材料として、経済学科で行われている「過去問題の公表制度」（ホームページに記載）が有効であると判断した。他の学科でも検討すべきである。

2.2 検討結果

2.2.1 GPA 制度の実施及び「秀」評価について

平成 18 年 2 月 21 日

教務委員会委員長

上野耕三郎

学部教務委員会は、教育開発センター学部・大学院教育開発部門からの「GPA 制度の導入等についての検討依頼」及び「本学における成績評価基準のあり方」を受けて、GPA 制度の実施及び「秀」評価について検討を行った。以下、学部教務委員会における検討結果を報告する。

本制度については、本学の中期計画にも、「成績評価基準の過度のばらつきを是正」し、「より客観的で厳密な評価を与えるため、現 4 段階である成績評価の細分化を進め、GPA 制度の導入を図る」と記されており、本報告はその具体化である。

○ GPA 制度の実施及び「秀」評価について

1. 「秀」評価及び GPA 制度導入の趣旨

学生個々人の GPA を大学（学部）として把握し、それを学生及び指導教員等に通知することは、学生の学習意欲を高める上で有効であり、かつ、これを大学院進学や卒業資格等に反映させることは、社会に対して大学の教育の質を保証するという意味において、大学の責務であると考えられる。

また、GPA ポイントを本人に通知することによって、学生が自らの学業成績の状況を的確に把握して、適切な履修計画とそれに基づく真剣な学習に役立てることを目的として使用する。

さらに、一般に GPA 制度は 5 段階の成績評価のもとで行われており、本学においても、他大学の制度との互換性を高めるとともに、よりきめ細かな成績評価を行うことによって成績優秀者にインセンティブを与えるために、「秀」評価及び GPA 制度を導入する。

2. 「秀」評価及び GPA 制度の実施時期

きめ細かな成績評価を行うため、現行の「優」「良」「可」「不可」の4段階評価に「秀」評価を加えた5段階評価を平成18年度から導入する。

この評価方式に基づくGPA制度は、平成18年4月から導入する。

3. GPA制度の概要

GPA制度の概要は以下の表に示す通りであり、5段階の成績評価をもとに、GPA (Grade Point Average) を算出する。

(1) GP 及び GPA の算出方法

【新しい成績評価と GPA】

可否区分	評 価	評 点	グレードポイント
合 格	秀 (S)	100点～90点	4. 0
	優 (A)	89点～80点	3. 0
	良 (B)	79点～70点	2. 0
	可 (C)	69点～60点	1. 0
不合格	不可(D)	59点以下	0. 0
履修取消し	W (Withdrawal)	GPA 計算対象外	

【GPA の算出方法】

GPA とは、1 単位あたりの成績の平均値を示すものである。平成18年度入学生から GP を以下のとおり計算し、その GPA を Web 上で各人に通知する。

なお、GPA の算出基礎になる科目は「すべての科目」(ただし、インターンシップを除く。)を対象とする。

算出式：

$$\frac{4.0 \times \text{秀の修得単位数} + 3.0 \times \text{優の修得単位数} + 2.0 \times \text{良の修得単位数} + 1.0 \times \text{可の修得単位数}}{\text{総履修登録単位数（「不可」の単位数を含む）}}$$

(注1) GPA の計算は、小数点第2位を四捨五入するものとする。

(注2) 「履修取消(W)」は、計算式に含まない。

(注3) 「総履修登録単位数」には、不合格科目を再履修し、合格の評価を得た場合及び再履修の結果再び不合格の評価であった場合の、それぞれ再履修前の不合格評価については、通算の GPA には算入しない。ただし、年度ごとに算出する GPA にはそれぞれ算入する。

(2)対象学生

本制度の対象は学部学生（科目等履修生、特別聴講学生は除く。）とし、平成18年度入学の1年次生から年次進行とする。

(3)対象科目

すべての科目（ただし、インターンシップを除く。）を対象とする。留学先での修得単位についても計算式に算入する。

入学（編入学を含む。）以前の他大学等における既修得単位についても計算式に算入する。

ただし、他大学の成績評価に「秀」評価がなく、「優」「良」「可」の評価のみの場合は、本学においても「秀」評価はせず、従来どおり「優（80点）」「良（70点）」「可（60点）」の評価に対応させるものとする。

(4)履修取消し制度

GPA が著しく低下するのを防ぐため、履修取消し制度を導入する。前期・通年科目は前期の一定期間内に、後期・通年科目は後期の一定期間内に履修取消しの手続きをさせるものとする。

ただし、安易な履修取消しを避けるため、前期に履修を取り消した単位数分を、後期に追加登録することはできないものとする。

2.2.2 GPA (Grade Point Average) 制度について

(1)「学園生活の手びき」・「シラバス」掲載

本学では、平成 18 年度入学生から GPA 制度を導入しました。GPA 制度の概要は下記の表に示す通りですが、5 段階の成績評価をもとに、GPA (Grade Point Average) を算出し、表示することで学修の到達度をより明確に示し、自らの履修管理に責任を持ち、履修登録した科目を自主的、意欲的に学修することを目的としています。

また、5 段階評価や GPA 制度は、外国の多くの大学が採用しており、国際化に対応した成績評価方法です。これからは、留学や大学院進学等を希望する場合に必要な制度と考えられます。

【新しい成績評価と GPA】

可否区分	評 価	評 点	グレードポイント
合 格	秀 (S)	100点～90点	4. 0
	優 (A)	89点～80点	3. 0
	良 (B)	79点～70点	2. 0
	可 (C)	69点～60点	1. 0
不合格	不可(D)	59点以下	0. 0
履修取消し	W (Withdrawal)	GPA 計算対象外	

【GPA の算出方法】

GPA とは、1 単位あたりの成績の平均値を示すものです。平成 18 年度入学生から GPA を以下のとおり計算し、その GPA を Web 上で各人に通知します。

なお、GPA の算出基礎になる科目は「すべての科目」(ただし、インターンシップを除く。)を対象とします。

算出式：

$$\frac{4.0 \times \text{秀の修得単位数} + 3.0 \times \text{優の修得単位数} + 2.0 \times \text{良の修得単位数} + 1.0 \times \text{可の修得単位数}}{\text{総履修登録単位数（「不可」の単位数を含む）}}$$

(注1) GPA の計算は、小数点第2位以下を四捨五入するものとする。

(注2) 「履修取消し(W)」は、計算式に含みません。

(注3) 「総履修登録単位数」には、不合格科目を再履修し、合格の評価を得た場合及び再履修の結果再び不合格の評価であった場合の、それぞれ再履修前の不合格評価については、通算の GPA には算入しません。ただし、年度ごとに算出する GPA にはそれぞれ算入します。

【履修取消し制度について】

「履修取消し制度」とは、授業を受けてみたものの、授業内容が勉強したいものと違っていた場合や、授業について行けるだけの知識が不足していた場合など、そのままでは単位を修得することが難しく、不合格となることで GPA が下がることを回避するための特別な制度で、GPA 制度導入に伴い新たに導入されたものです。

このため、「履修取消し」を申請し、履修を放棄した科目は、卒業や進級、就職などいかなる理由があっても、その学期において履修取消しの申請を取り消し、履修を復活させることはできませんので、間違いのないようにしなければなりません。

また、前期に履修を取消した単位数分を、後期に追加登録することはできませんので、安易に履修取消しを行うことは避けなければなりません。

履修取消しをした科目は、翌年度に再び履修登録をすることができますので、必要に応じ履修登録して下さい。

なお、履修取消しをした科目については GPA の算出の対象外となります。

「履修取消し」は、前期及び後期の一定期間に、本人からの申請により行います。したがって、前期開講科目は前期の一定期間内に、後期開講科目は後期の一定期間内に申請を行うことになりますが、通年科目の場合は、前期、後期いずれの期間であっても履修取消しの申請を認めます。

履修取消しの申請期間、手続方法など詳細は、掲示でお知らせします。

(2) 「ホームページ」掲載

学生の皆さんへ（告知）

学務課学部教務係

平成 18 年度入学生から GPA（グレード・ポイント・アベレージ）制度を導入します。

本学では、学生の主体的な学習を支援しています。そして、その学習成果に関しては厳正な成績評価を行っています。さらに学生が自らの学業成績の状況を的確に把握して、適切な履修計画とそれに基づく真摯な学習に役立つように、平成 18 年度入学生から、履修した全科目の成績の平均を数値で表した GPA (Grade Point Average/グレード・ポイント・アベレージの略) を算出することになりました。

この GPA は、学習の質を評価する成績評価の国際標準となっており、合格した科目だけではなく、不合格や受験不可の科目も成績算出対象となるのが大きな特徴のひとつです。したがって、学生には自分の履修（履修登録を含む）に対して、より真摯に取り組むことが求められます。

(1) GPA の主な内容

GPA は、学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したもので、年度ごとの GPA と入学時から通算の累積 GPA の 2 つの GPA が算出されます。本学が導入する GPA の算出式は下記に示すとおりです。

〈1〉 試験得点に応じて 5 段階 (4.0、3.0、2.0、1.0、0) の数値 (グレード・ポイント) を設定します。なお、不合格となった科目はグレード・ポイントが 0 点となります。

〈2〉 各履修科目のグレード・ポイントに、科目の単位数をかけた値を全履修科目分合算し、その値を全履修科目の単位数の合計で割ったものが GPA となります。

【新しい成績評価と GPA】(省略：12 頁参照)

【GPA の算出方法】(省略：12 頁参照)

参考) ある学生の GPA [例]

授業科目名	(単位)	得点	(評価)	(グレード・ポイント)	グレード・ポイント×科目の単位数
哲学	(2)	92 点	(秀)	(4.0)	$4.0 \times 2 = 8.0$
政治学 I	(2)	75 点	(良)	(2.0)	$2.0 \times 2 = 4.0$
数学 I	(2)	35 点	(不合格)	(0.0)	$0.0 \times 2 = 0.0$
総合科目 I	(2)	70 点	(良)	(2.0)	$2.0 \times 2 = 4.0$
健康スポーツ a	(1)	受験不可	(不合格)	(0.0)	$0.0 \times 1 = 0.0$
英語 I	(2)	80 点	(優)	(3.0)	$3.0 \times 2 = 6.0$

フランス語 I	(4)	90 点	(秀)	(4.0)	$4.0 \times 4 = 16.0$
経済学入門 I	(2)	64 点	(可)	(1.0)	$1.0 \times 2 = 2.0$
流通システム論 I	(2)	84 点	(優)	(3.0)	$3.0 \times 2 = 6.0$
法学	(2)	100 点	(秀)	(4.0)	$4.0 \times 2 = 8.0$
社会情報入門	(2)	95 点	(秀)	(4.0)	$4.0 \times 2 = 8.0$
合 計	(23 単位)				(62.0 ポイント)

GPA=2.7 (62.0÷23=2.69…小数点第 2 位を四捨五入する)

〈3〉平成 18 年度以降入学生を対象に GPA を導入します。

〈4〉Web 上による成績通知の際に GPA が記載されます。

(2)履修取消し制度について（省略：13 頁参照）

(3) GPA に関する Q & A

Q 1. GPA とは何ですか？

Q 2. GPA の目的は何ですか？ なぜ GPA を算出するのですか？

Q 3. GPA は本学独自の制度ですか？

Q 4. GPA は何の役に立つのですか？

Q 5. GPA はどのように利用されるのですか？

Q 6. グレード・ポイントとは何ですか？

Q 7. 各科目の成績のグレード・ポイントはどのように設定されるのですか？

Q 8. GPA の算出はどのように行われるのですか？

Q 9. 実施時期はいつですか？ また対象となる学生は？

Q10. 学生への GPA 通知はどのように行われるのですか？

Q11. 不合格の取り扱いはどうなりますか？

Q12. 再履修した科目のグレード・ポイントはどうなりますか？

Q13. 累積 GPA とは何ですか？

Q14. GPA の要点は何ですか？

Q 1. GPA とは何ですか？

A 1. GPA は、学生が履修した全科目の成績を、その得点に応じてグレード・ポイントを設定し、
修得単位数を加味してグレード・ポイント 1 単位あたりの平均を数値で表したものです。

GPA は、年度ごとの GPA と入学時から通算の累積 GPA の、2 つの GPA が算出されます。

Q 2. GPA の目的は何ですか？ なぜ GPA を算出するのですか？

A 2. 5段階の成績評価をもとに、GPA (Grade Point Average) を算出し、表示することで学修の到達度をより明確に示し、自らの履修管理に責任を持ち、履修登録した科目を自主的、意欲的に学修することを目的としています。具体的には、合格科目だけではなく不合格科目も成績評価の対象とする GPA を取り入れることにより、学生に対して今まで以上に真剣な履修登録、授業への取り組みを期待します。

また、GPA として明確で客観的な総合的成績評価を学生に示すことにより、学生が自分自身の学習への努力の成果を把握しやすくすることも狙いとしています。

Q 3. GPA は本学独自の制度ですか？

A 3. GPA は本学独自の制度ではありません。GPA は、厳格な成績評価方法としては米国の大学における成績評価制度に基づいています。

いま日本の大学には、国際競争力を強化した世界レベルの質の高い高等教育機関としての整備が求められており、GPA は教育の国際化に対応しています。本学においても学生の海外留学、海外の大学院進学、外資系企業への就職が増えている状況を考慮し、海外から見ても「分かりやすい成績評価」を導入することになりました。

Q 4. GPA は何の役に立つのですか？

A 4. 高等学校の評定平均のように学業結果を総合的に判断する指標として役立ちます。学生は年度ごとに記載される自分の GPA を見ることで、成績の伸びなど、学習の状況を客観的に把握することができます。

Q 5. GPA はどのように利用されるのですか？

A 5. 本学においては、GPA を、学生が自らの学業成績の状況を的確に把握して、適切な履修計画とそれに基づく真剣な学習に役立てることを目的に使用します。また、教員は学生の履修指導にこの GPA を使用します。他大学における GPA の活用例としては、学科による履修指導のほか、留学や奨学金の選考における参考資料として使われることがあります。また、海外の大学院では、GPA を書類選考の重要なデータとして取り扱っているところが少なくありません。

Q 6. グレード・ポイントとは何ですか？

A 6. グレード・ポイントとは、各科目の成績を、その得点に応じて5段階（4.0、3.0、2.0、1.0、0）にわけて数値化したものです。そのグレード・ポイントに科目の単位数を加味し、平均値を算出したものが GPA です。

Q 7. 各科目の成績のグレード・ポイントはどのように設定されるのですか？

A 7. 各科目の成績を、その得点に応じて次のようにグレード・ポイントを設定します。

100 点～90 点はグレード・ポイント 4.0、89 点～80 点を 3.0、79 点～70 点を 2.0、69 点～60 点を 1.0、59 点以下および試験欠席、受験不可を 0 とします。

Q 8. GPA の算出はどのように行われるのですか？

A 8. GPA は次のように算出します。

- ① 履修登録科目の成績に応じて与えられた各科目のグレード・ポイントに、各科目の単位数をかけて合計します。
- ② ①で得られた値を履修登録科目の総単位数で割ります。
- ③ ②で得られた値を小数点第 2 位で四捨五入します。

他大学などで修得した科目を本学の単位として認めた認定単位も計算式に含めます。

Q 9. 実施時期はいつですか？ また対象となる学生は？

A 9. 平成 18 年 4 月から実施します。対象は平成 18 年度入学生からです。

Q10. 学生への GPA 通知はどのように行われるのですか？

A10. Web 上による成績通知には年度ごとの GPA 及び通算の累積 GPA を記載します。

ただし、成績証明書への GPA 記載は現在のところおこないません。

学生に通知する GPA は、小数点第 1 位（小数点第 2 位を四捨五入）までの値とします。

Q11. 不合格の取り扱いはどうなりますか？

A11. 不合格点（59～0 点）、試験欠席（得点無）、受験不可（得点無）はすべてグレード・ポイントを“0”（ゼロ）として GPA の算出対象とします。

Q12. 再履修した科目のグレード・ポイントはどうなりますか？

A12. 本学では、年度ごとの GPA と通算の累積 GPA を算出します。再履修科目について、年度ごとの GPA の場合は不合格になったときの成績のグレード・ポイントを GPA 算出対象としますが、累積 GPA では以前に不合格になったときの成績は GPA 算出対象外となり、再履修の成績のグレード・ポイントのみが算出対象となります。

一般的な GPA の考え方では、再履修科目は、すべての履修分を累積 GPA 算出対象としますが、本学では、学生の成績挽回への努力を奨励するため、累積 GPA では最後の再履修分のみを算出対象としています。

Q13. 累積 GPA とは何ですか？

A13. GPA は、1 年間の履修登録科目の成績だけを対象として GPA を算出する年度ごとの GPA と、入学時からの履修登録科目すべて（成績評価の確定した科目。ただし、インターンシップは除く。）の成績を対象として GPA を算出する累積 GPA の、2 種類の GPA を計算します。

Q14. GPA の要点は何ですか？

A14. GPA の要点として以下の点を上げることができます。

- 〈1〉 評価優を試験得点に応じて 2 段階（100～90 点＝4.0、89～80 点＝3.0）のグレード・ポイントに細分化し、あわせて 5 段階のグレード・ポイントを設定したこと
- 〈2〉 平成 18 年度以降入学生を対象に、GPA を導入すること
- 〈3〉 Web 上による成績通知（平成 18 年度以降入学生から）に GPA が記載されること
- 〈4〉 不合格（59 点以下・試験欠席・受験不可）となった科目も GPA 算出対象となること

— 学 部 編 —

第 3 章

平成 17 年度「授業改善のためのアンケート」
の集計結果と分析

第3章 平成17年度「授業改善のためのアンケート」の集計結果と分析

小樽商科大学教育開発センター

助手 辻 義人

3.1 「授業改善のためのアンケート」の概要

3.1.1 アンケートの概要

本学では授業改善に結びつくヒントを探るため、「授業改善のためのアンケート(以後、アンケート)」の集計と分析を行っている。ここでは、平成17年度に実施されたアンケートの項目、ならびに実施形式について述べる。

アンケートは、「Ⅰ教師の教授法について」「Ⅱあなたの出席状況や考えについて」「Ⅲ自由記述欄」「Ⅳオプション質問」から構成されている。以下に、質問項目を記載する。

Ⅰ 教師の教授法について

- 1 授業は十分に準備されたものでしたか？
- 2 教師の話し方（マイクの使い方を含む）は聞き取りやすかったですか？
- 3 黒板などの字は見やすかったですか？
- 4 教師は、教材（テキスト、プリントなど）を効果的に使用していましたか？
- 5 教師は、視聴覚機器（OHP、ビデオ、オーディオ、コンピュータなど）を効果的に使用していましたか？
- 6 教師は、授業内容を理解しやすいように配慮していましたか？
- 7 教師は、授業内容への関心を高めるように工夫していましたか？

Ⅱ あなたの出席状況や考えについて

- 8 あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか？
- 9 あなたは、この授業に満足しましたか？
- 10 あなたは、友人や後輩にこの授業の履修をすすめたいと思いますか？

Ⅲ 自由記述欄

この授業で良かった点を挙げてください

この授業で改善すべき点を挙げてください

IV オプション質問

(この項目群は、個別の授業ごとに独自の質問を行うため設定された。なお、最大で5項目である。)

アンケートの回答形式については、5段階で評価するものであり、質問1～7、および質問9～10についての評価は以下の通りである。なお、当該授業に該当しない項目については、「n/a：不使用」を選択するように設定した。

- 5 強く思う (かなり良い)
- 4 そう思う (やや良い)
- 3 どちらともいえない
- 2 そう思わない (やや悪い)
- 1 全くそう思わない (かなり悪い)

なお、質問8については出席状況を質問する項目であるため、以下のような選択肢となる。

- 5 90%以上
- 4 70～89%
- 3 50～69%
- 2 30～49%
- 1 30%未満

以後の分析において表記を簡潔にするため、各質問項目について以下のように表記する。

質問1：準備

質問2：話し方

質問3：黒板

質問4：教材

質問5：視聴覚機器

質問6：理解

質問7：関心

質問8：出席状況

質問9：満足度

質問10：推薦度

3.1.2 基礎データの集計

平成 17 年度の前期および後期開講科目ならびに通年開講科目は 395 科目で、そのうちアンケートを実施したのは 312 科目であった(実施率=79.0%)。また、395 科目を受講した学生は、延べ 36,863 名で、アンケート回答者数は延べ 11,640 名であった(回収率=31.6%)。アンケートの実施状況を表 3-1 に示す。

表 3-1 アンケート実施状況

	対象科目数	実施科目数	実施率	履修者数	回収数	回収率
知の基礎	8	6	75.0%	2363	463	19.6%
経済	27	20	74.1%	3962	941	23.8%
商学	31	26	83.9%	4992	1638	32.8%
企業法	24	21	87.5%	3693	1089	29.5%
社会情報	27	16	59.3%	3146	586	18.6%
一般教育	104	81	77.9%	11763	2936	25.0%
言語センター	88	85	96.6%	3134	2384	76.1%
夜間主	86	57	66.3%	3810	1603	42.1%
合計	395	312	79.0%	36863	11640	31.6%

全体の回収率について注目すると、平成 14 年度は 36.7%、平成 15 年度は 41.0%、平成 16 年度は 44.4%である。それに対し、平成 17 年度は 31.6%との結果が得られた。過去 3 年間を通して微増傾向にあったのに対し、なぜ平成 17 年度は回収率が低下したのだろうか。

この点について、アンケート実施方法の変化が挙げられる。平成 16 年度以前においては、教員がアンケートの配布と回収を行っていた。しかし、この方法では学生に対して、教員による記入結果のチェックが行われる可能性を意識させるものであった。そのため、平成 17 年度より、教員は配布を行うのみとし、各クラスの学生の代表が回収・提出を行う方法を採用した。この方法を採用することにより、教員の影響を排除した正確な結果が得られることを期待したのである。しかし、学生による回収と提出の目的と意義の説明については十分であったと考えにくい。そのため、アンケート実施における混乱が提出率を低下させたものと考えられる。このことから、今後は学生による回収方法について、また、学生による回収がアンケート調査にもたらす効果と意義について、教員と学生の両者に対し、より広く周知する必要があるものと考えられる。

なお、アンケートの分析を行うにあたり、回答者数が 10 名以下の科目は分析対象から除外した。

また、アンケートにおいて「n/a：不使用」の回答率が30%を超えた項目についても、分析対象から除外した。

アンケートの結果より、全学における平均評定値は4.0(4.0)であった。なお、カッコ内は平成16年度の数値を示している。また、全学における90%ile、75%ile、50%ile、25%ile、10%ile得点は、それぞれ4.6(4.6)、4.4(4.4)、4.1(4.1)、3.8(3.8)、3.4(3.3)であった。これらの平均値とパーセンタイル得点は、各教員の担当科目の評定値とともに教員に周知される。このことから、各教員は担当科目の結果と全学の結果との比較が可能である。各質問項目の平均評定値、標準偏差、パーセンタイル得点、最高点、最低点を以下の表3-2に示す。また、科目群ごとの評定値の平均評定値、最高点、最低点を示す(表3-3)。

表3-2 質問項目の平均評定値

質問項目	平均値	標準偏差	最高点	最低点	90%ile	75%ile	50%ile	25%ile	10%ile
1:準備	4.2	0.42	5.0	2.8	4.7	4.6	4.3	4.0	3.6
2:話し方	4.1	0.61	5.0	2.0	4.7	4.5	4.2	3.7	3.1
3:黒板	3.6	0.56	4.7	1.9	4.3	4.1	3.7	3.2	2.8
4:教材	4.1	0.45	4.9	2.4	4.6	4.5	4.2	3.8	3.5
5:視聴覚機器	4.2	0.42	4.9	2.5	4.7	4.6	4.3	4.0	3.7
6:理解	3.9	0.54	5.0	2.4	4.5	4.3	4.0	3.5	3.1
7:関心	3.8	0.57	5.0	2.5	4.5	4.3	3.9	3.4	3.0
8:出席	4.5	0.24	5.0	3.6	4.8	4.7	4.6	4.4	4.3
9:満足度	3.9	0.55	4.9	2.5	4.6	4.3	4.0	3.6	3.1
10:推薦度	3.9	0.58	5.0	2.4	4.6	4.4	4.0	3.5	3.1
平均値	4.0	0.49	—	—	4.6	4.4	4.1	3.7	3.3

表3-3 科目群の平均点・最高点・最低点

	平均点	最高点	最低点
基礎科目	4.0	4.7	3.1
外国語科目	4.1	4.7	3.1
基幹科目	3.8	4.7	2.8
発展科目	4.1	4.8	3.0
専門共通	4.2	4.9	3.6

アンケートの分析にあたり、以下の観点を設定する。これらの観点からの分析を通して、授業改善のヒントを抽出する。

- ・ 質問項目 9 (満足度) と、他の項目との相関分析。学生の満足度に関連する学生の視点について検討する。
- ・ 各科目の質問項目 1 ～ 7 について、上位 20 科目と下位 20 科目との比較を行う。数量的比較と、定性的比較（自由記述の比較）を行うことによって、それぞれの特徴について検討する。
- ・ 質問項目 9 (満足度) と質問項目 10 (推薦度) との関連について検討する。
- ・ 質問項目 9 (満足度) とクラスサイズ (回収者数) との関連について検討する。
- ・ 自由記述欄から得られたデータについてテキストマイニングを行い、新たな問題点を抽出する。

3.2 アンケート分析

3.2.1 授業満足度と他質問項目との相関分析

ここでは、質問項目 9 の「授業に対する満足度」と、質問項目 1 ～ 7 との相関関係についての分析を行う。この分析を通して、授業の満足度を向上させる手がかりについて得られることが期待される。

調査サンプルについては、アンケート対象となった 312 科目についての授業評価アンケート平均値である。なお、相関分析を行うにあたり、全質問項目の関連性についてまとめる必要がある。ここでは、基礎科目、外国語科目、基幹科目、発展科目、専門共通科目のそれぞれについての基礎統計量（平均値、中央値、標準偏差、最大値、最小値）を示す（表 3-4）。また、各科目群における相関係数を表 3-5 に示す。

表 3-4 各科目群の基礎統計量

基礎科目

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席状況	満足度	推薦度
平均値	4.21	4.06	3.51	3.97	4.18	3.87	3.83	4.62	3.88	3.95
中央値	4.32	4.23	3.53	4.06	4.26	4.00	3.94	4.65	3.92	4.00
標準偏差	0.37	0.53	0.60	0.35	0.32	0.45	0.48	0.21	0.46	0.51
最大値	4.79	4.77	4.50	4.56	4.73	4.67	4.75	4.97	4.72	4.82
最小値	3.31	2.24	2.22	3.11	3.25	2.86	2.76	3.87	2.92	2.94

外国語科目

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席状況	満足度	推薦度
平均値	4.20	4.14	3.75	4.17	4.16	4.01	3.98	4.53	4.06	4.04
中央値	4.27	4.34	3.82	4.31	4.23	4.17	4.08	4.55	4.21	4.27
標準偏差	0.42	0.59	0.51	0.42	0.48	0.56	0.58	0.20	0.57	0.63
最大値	4.87	4.90	4.58	4.77	4.89	4.86	4.94	4.95	4.83	4.86
最小値	2.81	2.45	2.52	2.97	2.50	2.56	2.67	3.93	2.63	2.44

基幹科目

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席状況	満足度	推薦度
平均値	4.13	3.78	3.40	3.95	4.28	3.57	3.51	4.49	3.58	3.55
中央値	4.24	4.00	3.43	4.00	4.35	3.58	3.62	4.53	3.59	3.52
標準偏差	0.48	0.68	0.59	0.56	0.43	0.54	0.55	0.26	0.56	0.59
最大値	4.89	4.84	4.36	4.77	4.84	4.64	4.68	4.92	4.62	4.57
最小値	3.14	1.97	1.86	2.42	3.40	2.44	2.53	3.70	2.45	2.56

発展科目

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席状況	満足度	推薦度
平均値	4.35	4.03	3.68	4.16	4.36	3.96	3.86	4.48	3.95	3.86
中央値	4.48	4.12	3.89	4.29	4.44	4.00	4.00	4.50	4.07	3.96
標準偏差	0.43	0.65	0.56	0.47	0.43	0.58	0.60	0.30	0.55	0.55
最大値	4.95	5.00	4.50	4.89	4.94	4.88	5.00	4.92	4.92	5.00
最小値	3.11	2.35	2.46	2.81	3.32	2.69	2.46	3.62	2.63	2.57

専門共通科目

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席状況	満足度	推薦度
平均値	4.31	4.24	3.73	4.06	4.26	4.01	4.00	4.60	4.11	3.98
中央値	4.35	4.33	3.82	4.09	4.29	4.08	4.09	4.64	4.10	4.00
標準偏差	0.32	0.51	0.50	0.40	0.30	0.46	0.52	0.21	0.42	0.45
最大値	5.00	4.91	4.73	4.82	4.76	5.00	5.00	4.93	4.91	5.00
最小値	3.63	2.69	2.71	3.28	3.75	2.92	2.62	4.05	3.17	3.08

表 3-5 各科目群の相関係数表

全体の相関係数

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席 状況	満足度	推薦度
準備	1.000									
話し方	0.743	1.000								
黒板	0.720	0.755	1.000							
教材	0.810	0.674	0.724	1.000						
視聴覚機器	0.731	0.653	0.562	0.739	1.000					
理解	0.785	0.831	0.745	0.745	0.629	1.000				
関心	0.726	0.821	0.706	0.706	0.605	0.949	1.000			
出席状況	0.335	0.345	0.255	0.232	0.201	0.259	0.283	1.000		
満足度	0.742	0.805	0.730	0.724	0.640	0.925	0.922	0.301	1.000	
推薦度	0.639	0.725	0.703	0.655	0.566	0.864	0.863	0.190	0.922	1.000

基礎科目の相関係数

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席 状況	満足度	推薦度
準備	1.000									
話し方	0.789	1.000								
黒板	0.750	0.756	1.000							
教材	0.850	0.671	0.834	1.000						
視聴覚機器	0.789	0.623	0.233	0.522	1.000					
理解	0.788	0.841	0.740	0.648	0.649	1.000				
関心	0.729	0.832	0.715	0.599	0.621	0.955	1.000			
出席状況	0.401	0.453	0.226	0.287	0.216	0.422	0.417	1.000		
満足度	0.761	0.790	0.720	0.646	0.718	0.884	0.892	0.457	1.000	
推薦度	0.722	0.733	0.717	0.677	0.696	0.782	0.796	0.381	0.896	1.000

外国語科目の相関係数

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席 状況	満足度	推薦度
準備	1.000									
話し方	0.835	1.000								
黒板	0.723	0.836	1.000							
教材	0.822	0.804	0.791	1.000						
視聴覚機器	0.594	0.681	0.534	0.659	1.000					
理解	0.843	0.893	0.777	0.798	0.593	1.000				
関心	0.798	0.847	0.750	0.808	0.628	0.940	1.000			
出席状況	0.151	0.105	0.048	0.079	-0.07	0.008	0.012	1.000		
満足度	0.773	0.866	0.775	0.782	0.650	0.921	0.907	0.028	1.000	
推薦度	0.609	0.714	0.688	0.648	0.530	0.845	0.825	-0.19	0.921	1.000

基幹科目の相関係数

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席 状況	満足度	推薦度
準備	1.000									
話し方	0.604	1.000								
黒板	0.718	0.637	1.000							
教材	0.898	0.563	0.618	1.000						
視聴覚機器	0.855	0.673	0.584	0.940	1.000					
理解	0.685	0.753	0.617	0.679	0.703	1.000				
関心	0.633	0.756	0.538	0.648	0.703	0.926	1.000			
出席状況	0.466	0.269	0.428	0.346	0.266	0.191	0.268	1.000		
満足度	0.726	0.714	0.595	0.722	0.721	0.927	0.911	0.344	1.000	
推薦度	0.614	0.675	0.588	0.635	0.672	0.915	0.886	0.248	0.943	1.000

発展科目の相関係数

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席 状況	満足度	推薦度
準備	1.000									
話し方	0.760	1.000								
黒板	0.707	0.727	1.000							
教材	0.781	0.607	0.719	1.000						
視聴覚機器	0.844	0.789	0.847	0.895	1.000					
理解	0.874	0.811	0.750	0.777	0.796	1.000				
関心	0.804	0.822	0.684	0.688	0.726	0.956	1.000			
出席状況	0.456	0.510	0.376	0.337	0.462	0.452	0.477	1.000		
満足度	0.828	0.824	0.757	0.731	0.779	0.944	0.947	0.503	1.000	
推薦度	0.760	0.762	0.739	0.703	0.754	0.903	0.920	0.381	0.931	1.000

専門共通科目の相関係数

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席 状況	満足度	推薦度
準備	1.000									
話し方	0.774	1.000								
黒板	0.658	0.740	1.000							
教材	0.806	0.754	0.667	1.000						
視聴覚機器	0.636	0.548	0.603	0.821	1.000					
理解	0.668	0.744	0.757	0.655	0.602	1.000				
関心	0.631	0.748	0.768	0.600	0.551	0.969	1.000			
出席状況	0.362	0.351	0.183	0.386	0.567	0.242	0.186	1.000		
満足度	0.543	0.614	0.668	0.508	0.593	0.928	0.944	0.142	1.000	
推薦度	0.549	0.610	0.747	0.550	0.516	0.916	0.936	0.076	0.944	1.000

ここではまず、各科目群における標準偏差に注目する。標準偏差とは、得られた数値についてのばらつきを示す数値である。つまり、値が大きいほど、学生間の評価に違いが見られていたことを示す。以下に、各科目群における満足度、ならびに推薦度の標準偏差のみを抜き出したものを示す(表3-6)。

表 3-6 各科目群における標準偏差

	満足度	推薦度
基礎科目	0.46	0.51
外国語科目	0.57	0.63
基幹科目	0.56	0.59
発展科目	0.55	0.55
専門共通科目	0.42	0.45

特徴的な結果として、基礎科目と専門共通科目の満足度と推薦度の標準偏差の値が低いことが挙げられよう。標準偏差が低いということは、学生による評価が一貫している傾向が強いことを示す。まず、基礎科目の標準偏差が低い理由として、学年による影響が考えられる。基礎科目は一年次配当であるため、主に一年生が履修する。ここで、一年次においては評価観点が定まっていないため、多くの授業間において同じような評価がなされた可能性が考えられる。次に、専門共通科目については、授業の専門性による影響が考えられる。専門共通科目では、学生はある程度の予備知識を所有している。学生が授業評価を行う基準として、すでに所有している知識を活用したため、比較的一貫した評価となったことが予想される。なお、他の可能性としては、履修人数やクラスサイズが満足度と推薦度に影響を及ぼしたことが考えられる。

続いて相関係数に着目すると、ほとんどすべての項目間において中程度以上の相関が認められている。表3-5においては、0.4以上の相関には薄い網掛け、0.7以上の強い相関には濃い網掛けを行っている。一般的には、0.2以上の相関係数であるときに、項目間において何らかの関連があるとされている。この結果より、ある特定の項目を除き、ほとんどの項目間においてある程度以上の相関が認められているといえよう。

ここでは特に科目全体の相関係数表に注目する。満足度と関連する項目として、出席状況を除くすべての項目が挙げられる。

特に強い相関を持つ項目としては、「理解 ($r=.925$)」、「関心 ($r=.922$)」であった。これは、内容について理解することができる科目、また、授業の内容に関心を持つことができる科目は満足度が高いことを示している。授業が理解できて満足、また、内容が興味深いもので満足という関連は、

十分に想像できるものである。このことから、学生の満足度を向上させるためには、学生に対して理解させる工夫、ならびに、興味・関心を持たせる工夫が必要と考えられる。

次に強い相関を示した項目は、「話し方 ($r=.805$)」であった。これは、教員の声の聞き取りやすさを示す項目である。ここで、声の聞き取りやすさに関して、教員の声量のみならず、騒々しい学生に対する注意が関連していることが予想される。いかに教員の声量が十分であったとしても、それを上回る騒々しきであった場合には、この項目の評価は高くない。このことから、学生の満足度の向上に関連して、聞き取りやすく、十分な声量で授業を展開すると同時に、騒々しい学生に対する注意が望まれていることが示唆される。一部の騒々しい学生のために、周囲の学生の集中を妨げられる場면을防止する必要があるだろう。

また、「話し方」に続く項目として、「準備 ($r=.742$)」、「黒板 ($r=.730$)」、「教材 ($r=.724$)」、これらの項目がほぼ同程度の相関を示している。また、満足度との関連に限らず、これらの項目間においても強い相関を示していることから、これらは「授業に対する準備」として考えることができる。学生は、板書やプリントが整っており、それについてきちんと説明する授業に対して、よく準備されていた授業であると評価を行うことが示された。授業に対してどの程度の準備（板書計画や配布プリントなど）をしているかについても、学生の満足度と強く関連していると考えられる。

一方、学生の満足度との関連が弱い項目として、「視聴覚機器 ($r=.640$)」と「出席状況 ($r=.301$)」が挙げられる。視聴覚機器と満足度との関連が低かった理由について、すべての授業においてビデオや OHP が用いられたわけではないことが考えられる。一般的には、ビデオや OHP を用いることによって、学生に対して授業の内容を強く印象づけることが可能となる。しかし、授業の進行やクラスサイズによっては、より効果的な教育活動（ゼミ形式、通常の講義形式など）が選択されることもあるだろう。積極的に視聴覚機器を利用しない選択もありうる点において、この視聴覚機器と満足度との関連について言及することは困難である。ただ、視聴覚機器の活用に関して、学生に視聴覚教材を提示する際、その内容についてどのような観点から捉えるのか、また、どのように報告するのか（レポート、テスト、あるいは何もなし）という点について前もって伝えておく必要があるだろう。

満足度との相関係数が最も低い値となったのは、「出席状況 ($r=.301$)」であった。授業の満足度と出席状況との間には、それほどの関連が見られないことが示された。つまり、授業に満足しているから出席する、または出席するから授業に満足する、これらのいずれの可能性も否定されたといえる。この結果については、質問項目に問題があることが考えられる。本調査は無記名で行われているが、自己申告でどの程度出席したかについて質問したとき、ほとんどの学生が社会的望ましさの影響を受け、出席状況をよりよく申告することが予想される。学生間における評定の差が見られなかったため、天井効果^{*1}が発生し、満足度との関連が見られなかったのではないだろうか。この

^{*1} 天井効果 (ceiling effect) とは、測定の結果から得られた値（実測値）が、測定に用いた指標より極端に大きい場合に発生する回答の歪みを指す。例として、テストを実施した際、問題が易しく全員が満点であった場合が挙げられる。測定を行う際に適した指標を用いることにより、天井効果を回避することが可能である。

点については、質問項目の見直しが必要と考えられる。

3.2.2 平均評定値上位・下位 20 位間の数量的比較

ここでは、平均評定値の高い 20 科目と、平均評定値の低い 20 科目との間において、質問項目ごとに比較を行う。この検討を通して、評価の低い授業科目の問題点を浮き彫りにし、今後の授業改善への知見が得られることが期待される。

また、単純にトップ科目とワースト科目とを比較するだけではなく、どのような要因が相互に関連しているのかについても分析を行う。このことにより、授業の評定値を全体的に向上させるためには（学生の全体的な満足度を向上させるためには）どのような点を重視すべきかについての指針が得られる。

データの収集

平成 17 年度に実施された科目について、平均評定値が高い 20 科目のサンプル（サンプル A）と、平均評定値が低い 20 科目のサンプル（サンプル A*）を抽出した。

ただし、サンプル A ならびにサンプル A* には、健康スポーツ科目が含まれている。健康スポーツ科目については、その特性上、通常の講義とは異なっていることが予想される（講義形式・ゼミ形式を取らない、教室を利用しない、黒板を利用しないなど）。このことから、健康スポーツ科目を除いたサンプルを抽出する必要があると考えられる。そこで、健康スポーツ科目を除外した上位 20 科目としてサンプル B、ならびに、下位 20 科目としてサンプル B* を抽出した。

また、科目によっては視聴覚機器（ビデオや OHP など）が用いられていないものがあり、その科目については上位科目と下位科目との比較の際には欠損値と扱われる。このことから、全質問項目について回答されている科目のみに注目し、上位 20 科目としてサンプル C、下位 20 科目としてサンプル C* を抽出した。

アンケート項目についての基礎統計量について、以下の表 3-7 に示す。なお、サンプル A とサンプル A* のみ、平成 16 年度の結果についても掲載する。

表 3-7 各サンプル群の基礎統計量

平成 17 年度サンプル A (トップ 20)

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席	満足度	推薦度
平均	4.72	4.74	4.24	4.68	4.65	4.69	4.73	4.74	4.67	4.64
標準偏差	0.16	0.15	0.29	0.09	0.25	0.17	0.16	0.19	0.15	0.19
最小値	4.33	4.48	3.78	4.45	4.24	4.44	4.52	4.24	4.42	4.18
最大値	5.00	4.92	4.73	4.82	4.94	5.00	5.00	4.95	4.92	5.00

平成 17 年度サンプル A* (ワースト 20)

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席	満足度	推薦度
平均	3.45	2.79	2.78	3.29	3.36	2.80	2.79	4.29	2.82	2.81
標準偏差	0.31	0.39	0.36	0.39	0.38	0.19	0.17	0.34	0.19	0.23
最小値	2.81	1.97	1.86	2.42	2.50	2.44	2.46	3.62	2.45	2.44
最大値	3.93	3.53	3.41	3.82	3.79	3.13	3.07	4.79	3.25	3.35

平成 16 年度サンプル A (トップ 20)

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席	満足度	推薦度
平均	4.73	4.78	4.48	4.79	4.85	4.68	4.71	4.74	4.78	4.73
標準偏差	0.14	0.10	0.24	0.06	0.13	0.15	0.14	0.17	0.08	0.16
最小値	4.52	4.56	4.04	4.71	4.62	4.43	4.44	4.43	4.64	4.44
最大値	4.94	4.95	4.81	4.88	5.00	4.90	4.96	5.00	4.92	5.00

平成 16 年度サンプル A* (ワースト 20)

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席	満足度	推薦度
平均	3.39	2.56	2.54	3.26	3.09	2.69	2.63	4.26	2.71	2.74
標準偏差	0.31	0.52	0.28	0.36	0.22	0.27	0.32	0.42	0.36	0.41
最小値	2.93	1.69	2.08	2.59	2.80	2.16	2.00	3.30	2.00	2.00
最大値	4.00	3.47	3.10	4.00	3.33	3.11	3.05	5.00	3.25	3.47

平成 17 年度サンプル B（トップ 20）

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席	満足度	推薦度
平均	4.74	4.79	4.27	4.66	4.62	4.69	4.72	4.66	4.69	4.65
標準偏差	0.15	0.11	0.27	0.10	0.24	0.18	0.18	0.22	0.14	0.20
最小値	4.33	4.50	3.78	4.45	4.24	4.38	4.32	4.24	4.45	4.18
最大値	5.00	4.92	4.73	4.82	4.94	5.00	5.00	4.95	4.92	5.00

平成 17 年度サンプル B*（ワースト 20）

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席	満足度	推薦度
平均	3.45	2.79	2.78	3.29	3.36	2.80	2.79	4.29	2.82	2.81
標準偏差	0.31	0.39	0.36	0.39	0.38	0.19	0.17	0.34	0.19	0.23
最小値	2.81	1.97	1.86	2.42	2.50	2.44	2.46	3.62	2.45	2.44
最大値	3.93	3.53	3.41	3.82	3.79	3.13	3.07	4.79	3.25	3.35

平成 17 年度サンプル C（トップ 20）

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席	満足度	推薦度
平均	4.72	4.72	4.22	4.59	4.60	4.64	4.63	4.67	4.64	4.60
標準偏差	0.15	0.16	0.22	0.16	0.25	0.17	0.21	0.21	0.15	0.25
最小値	4.41	4.33	3.78	4.13	4.00	4.29	4.29	4.24	4.36	3.98
最大値	4.95	4.92	4.55	4.89	4.94	4.88	5.00	4.92	4.92	5.00

平成 17 年度サンプル C*（ワースト 20）

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席	満足度	推薦度
平均	3.75	3.19	3.08	3.55	3.62	3.03	2.95	4.40	3.12	3.11
標準偏差	0.31	0.41	0.27	0.30	0.37	0.30	0.27	0.34	0.26	0.32
最小値	3.17	2.27	2.67	2.81	2.50	2.44	2.50	3.62	2.70	2.63
最大値	4.32	3.77	3.57	4.04	4.11	3.76	3.44	4.85	3.57	3.57

基礎統計量より

まず、平成 17 年度におけるサンプル A（上位科目）とサンプル A*（下位科目）とを比較する。両データについて概観すると、サンプル A では、「黒板」を除くすべての項目において、4.5 以上の評定値が得られている。その一方、サンプル A* では、「出席」では 4.29 の値となっているが、それ以外の項目については 2.8 前後から 3.5 前後という結果となっている。特にサンプル A* において評価が低かった項目として、「話し方」、「黒板」、「理解」、「関心」、「満足度」、「推薦度」が挙げられる。これらはいずれも評定値平均が 3.0 に満たないものであった。ここで「出席」に関して、前項における分析結果より、学生の満足度と推薦度との関連は非常に弱いことがわかっている。このことから、本データの分析においても除外されるべきと考えられる。また、標準偏差についてもサンプル A においては 0.1 前後から 0.3 の範囲にすべて収まっている。一方で、サンプル A* においては、0.17 前後から 0.4 前後の値が得られており、下位科目の方が評定に散らばりがあることが示された。これは、評定の高い科目においては、多くの学生からの評定が一貫して高いことを示している。逆に、評定の低い科目においては、一部の学生の評価は高いものの、全体的には評価は大幅に散らばっていることが示された。

次に、平成 17 年度の結果と、平成 16 年度の結果との比較を行う。両年度間において、どのような評定の違いが見られるのだろうか。結果を概観したところ、両年度ともにサンプル A（上位科目群）の評定値が高く標準偏差が小さい。これは、ほとんどの学生に対して適切な授業を行っていることを示すものであると考えられる。また、サンプル A*（下位科目群）についても同様に、評定値が低い反面、標準偏差が高い結果が得られている。平成 17 年度と平成 16 年度との間において、学生の授業に対する評価に大きな違いは見られていないことが示された。ここで両年度の素点について着目する。その結果、サンプル A については、平成 17 年度は 4.65 であり、平成 16 年度は 4.73 であった。わずかに減少しているものの、年度間において大きな違いは見られていない。また、サンプル A* については、平成 17 年度は 3.12 であり、平成 16 年度は 2.99 であった。平成 17 年度において、平均評定値が 3.0 を下回ったことから、学生の授業に対する評価は次第に厳しくなりつつあるといえるだろう。

なお、サンプル B-B*、ならびにサンプル C-C* においても、サンプル A-A* と同様の傾向が見られている。全サンプルについて掲載した場合、表の数が膨大なものとなるため掲載を避けるが、年度間の比較においても、サンプル A-A* 間と同様の特徴が見られている。

では、サンプル A-A* 間において、下位 20 科目はどのような項目が問題点となっているのだろうか。サンプル A-A*、サンプル B-B*、サンプル C-C* のそれぞれについて、各項目の評定値をグラフに示す（図 3-1～図 3-3）。なお、グラフ中の実線は上位 20 科目を、破線は下位 20 科目を示す。

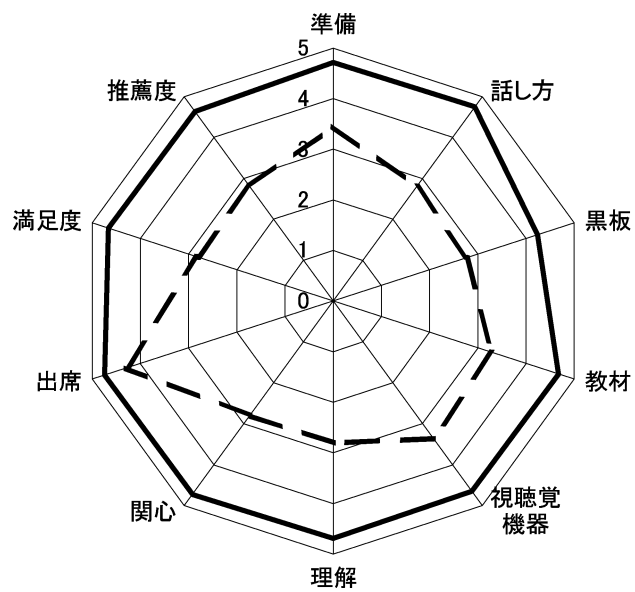


図 3-1 サンプル A-A* における評価値

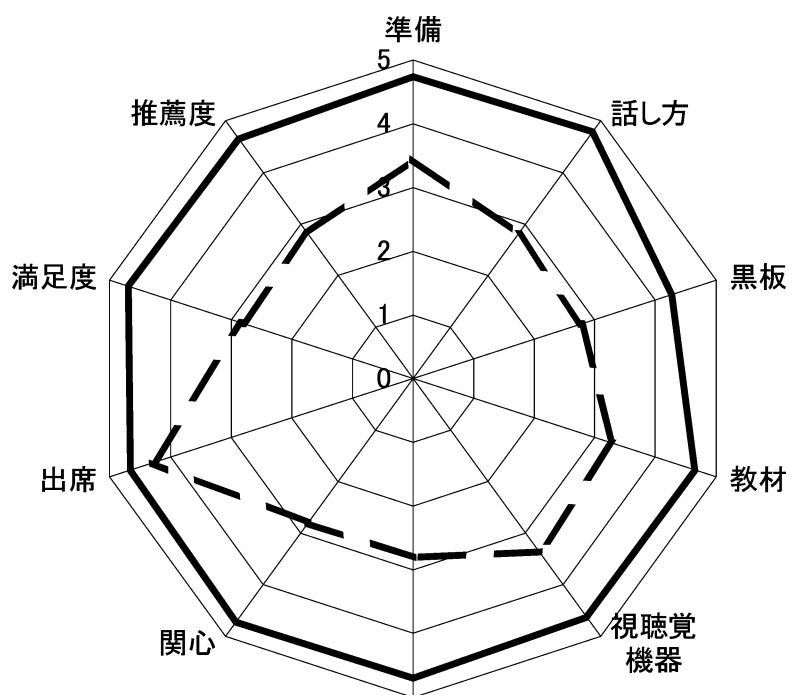


図 3-2 サンプル B-B* における評価値

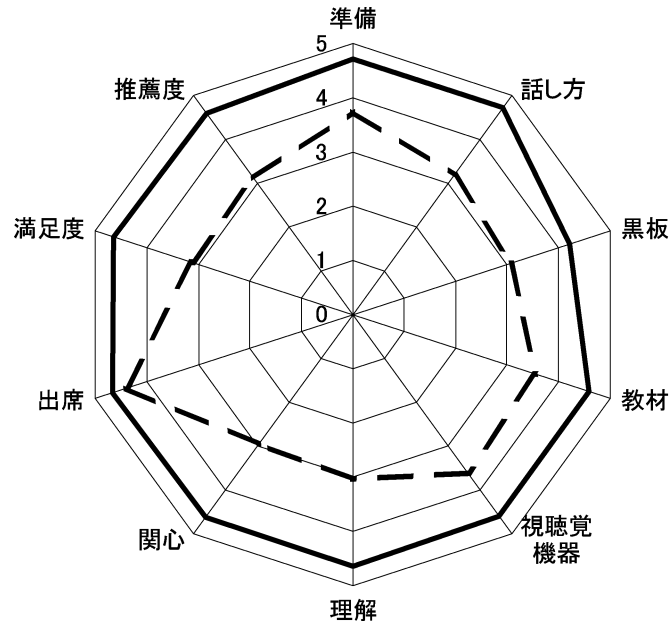


図 3-3 サンプル C-C* における平均評定値

これらいずれの図においても、上位科目と下位科目との評定値に大きな違いが見られていることがわかる。なお、「出席」については比較的差は小さいように見えるが、この点について「出席」と他の項目との関連は見られていないことから、分析から除外することが適当であるだろう。ただし、「出席」の項目についても、上位科目の方が下位科目に対して評定が高い結果となっている。

上位科目群と下位科目群との比較

では、上位科目群と下位科目群との間において、どの項目に評定値の違いが見られるのだろうか。ここで、各サンプルごとに 1 要因分散分析を行った。以下に、得られた F 値を示す(表 3-8)。なお、F 値が大きいほど上位科目群と下位科目群において差が開いていたことを示す。

表 3-8 各項目における F 値の比較

サンプル A-A* 間における分散分析結果

質問項目	上位群	下位群	F 値
準備	4.72	3.45	257.04
話し方	4.75	2.79	442.06
黒板	4.24	2.78	146.83
教材	4.67	3.29	176.29
視聴覚機器	4.63	3.36	71.09
理解	4.71	2.80	1168.86
関心	4.74	2.79	1413.98
出席状況	4.75	4.29	26.90
満足度	4.68	2.82	1180.61
推薦度	4.64	2.81	726.09
平均	4.65	3.12	560.97

サンプル B-B* 間における分散分析結果

質問項目	上位群	下位群	F 値
準備	4.74	3.45	272.58
話し方	4.79	2.79	488.46
黒板	4.28	2.78	184.99
教材	4.66	3.29	206.62
視聴覚機器	4.62	3.36	87.87
理解	4.69	2.80	1037.31
関心	4.72	2.79	1160.72
出席状況	4.70	4.29	20.78
満足度	4.68	2.82	1143.22
推薦度	4.65	2.81	703.74
平均	4.65	3.12	530.63

サンプル C-C* 間における分散分析結果

質問項目	上位群	下位群	F値
準備	4.69	3.73	138.98
話し方	4.67	3.16	208.68
黒板	4.19	3.06	183.12
教材	4.56	3.53	161.50
視聴覚機器	4.57	3.60	84.86
理解	4.58	3.02	230.37
関心	4.55	2.95	199.25
出席状況	4.67	4.38	10.07
満足度	4.56	3.13	181.31
推薦度	4.53	3.11	148.18
平均	4.56	3.37	154.63

表では1%水準で差が見られた項目について、F値に網掛けを行った。その結果、すべてのサンプル、すべての質問項目間において、評定値が有意に独立していることが示された($p < .01$)。ここで、すべてのサンプルを通して、「理解」、「関心」、「満足度」のF値が高いことが特徴として挙げられる。このことから、上位科目群と下位科目群との間でもっとも異なるのは、授業の理解度と、授業に対する関心であることが示された。ここで、授業に対する「理解」と「関心」は、その授業内容に対する満足度に関連していることが考えられる。授業に対する評定値を決定づける要因として、特に学生に「わからせること」、「興味・関心をもたせること」の重要性が強調されているといえよう。また、次に上位科目群と下位科目群との差が大きかった項目として、「話し方」が挙げられる。これは、教員の声量やトーンはもちろん、授業中に騒がしい学生がいた場面における対処に関連する。授業に対して真剣に取り組んでいる学生に対して、集中を阻害しない工夫が必要であるといえよう。

相関分析

上位科目群と下位科目群との間で、各項目間においてどのような関連が見られているのかについて相関分析を行う。その対象について、サンプル A-A*、B-B* では、データ内において多くの欠損値があり、相関係数に乱れが生じることが予想される。このことから、ここでは特に回答データが安定していると考えられるサンプル C-C* に注目する。以下に、サンプル C とサンプル C* の相関分析表を示す(表 3-9)。

表 3-9 サンプル C とサンプル C* の相関係数表

サンプル C の相関係数表

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚	理解	関心	出席	満足度	推薦度
準備	1.000									
話し方	0.391	1.000								
黒板	0.019	0.331	1.000							
教材	0.336	0.155	0.076	1.000						
視聴覚	0.426	0.305	-0.020	0.054	1.000					
理解	0.369	0.534	-0.104	0.291	0.047	1.000				
関心	0.257	0.257	-0.637	0.037	0.104	0.709	1.000			
出席	0.079	0.165	-0.440	-0.233	-0.074	-0.055	0.365	1.000		
満足度	-0.199	0.217	-0.256	0.021	-0.321	0.254	0.511	0.206	1.000	
推薦度	-0.313	-0.105	0.108	0.053	-0.171	0.283	0.272	-0.334	0.527	1.000

* 網掛けは 5 %水準で有意であることを示す。

サンプル C* の相関係数表

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚	理解	関心	出席	満足度	推薦度
準備	1.000									
話し方	0.359	1.000								
黒板	0.490	0.499	1.000							
教材	0.671	0.386	0.447	1.000						
視聴覚	0.573	0.261	0.469	0.569	1.000					
理解	0.559	0.535	0.591	0.560	0.483	1.000				
関心	0.382	0.554	0.539	0.357	0.433	0.894	1.000			
出席	0.252	0.188	0.248	0.238	0.095	0.121	0.234	1.000		
満足度	0.466	0.594	0.635	0.380	0.482	0.844	0.885	0.280	1.000	
推薦度	0.284	0.519	0.544	0.306	0.461	0.791	0.816	0.148	0.889	1.000

* 網掛けは 5 %水準で有意であることを示す。

まず、サンプル C(上位科目群)における相関係数表に注目する。ここで最も強い相関が見られたのは、「理解」と「関心」間の 0.709 であった。これは、理解できるから興味を持つこと、逆に、興味があるから理解できるという場面を表現したものであるといえよう。次に、「理解」と「話し方」についても高い正の相関が見られている ($r = .534$)。教員の声の聞き取りやすさと、授業のわかりやすさとの間には強い関連があることが考えられる。

一方、「黒板」と「関心」との間には強い負の相関が見られた ($r = -.637$)。これは何を示しているのだろうか。一般的には、黒板が読みやすければ学生の関心が高まる可能性が考えられる。しかし、この結果からは、黒板が読みにくければ学生の関心が高まるという、非現実的な解釈が可能となっている。ここで考えられる理由としては、学生の関心が高ければ、板書に対する評価が厳しくなることが挙げられる。学生の関心が高く、できるだけ多くのことを学びたいと考えたとき、読みにくい板書は学習の阻害要因となる。そのため、「関心」と「黒板」との間に負の相関が見られたのではないだろうか。授業に対してやる気のある学生は、ていねいな板書を特に強く望んでいることが考えられる。

次に、学生の満足度との関連については、「関心 ($r = .511$)」、「推薦度 ($r = .527$)」との間に有意な相関が見られた。これは、上位科目においては、学生の関心に応えられる授業がなされているものと解釈が可能である。また、満足度が高い授業については、友人や後輩などにも安心して推薦することが可能であることが示された。

続いて、サンプル C* (下位科目群) に注目すると、「出席」の項目を除きすべての項目間において有意な相関が見られている。多くの要因が相互に関連しているため、全相関についての解釈は困難である。そこで、ここでは学生の満足度と他の要因との関連に注目する。

下位科目群において、特に学生の満足度と関連している項目として、「理解」、「関心」、「推薦度」が挙げられる (いずれも相関係数 0.8 以上)。これは、全体における相関分析の結果とほぼ同様である。学生が授業の内容を理解し、関心を持ったときに満足度が高く、同時に友人や後輩にも推薦するものと考えられる。次いで相関係数が高い項目として、「黒板 ($r = .635$)」、「話し方 ($r = .594$)」が挙げられる。このことから、授業満足度が低い授業においては、黒板の読みやすさや、教員の話の聞き取りやすさが、改善の糸口となると考えられる。

サンプル C (上位科目群) とサンプル C* (下位科目群) との相関係数表を比較したとき、これらの間には明確な違いが見られる。上位科目群においては、相関を示す項目が相対的に少ない。これは、全般的に学生の期待するレベルを満たしていたためであると考えられる。また、「関心」と「黒板」との間に強い負の相関が見られるなど、学生側においても、授業に対して期待をしていたことが予想される。その一方で、下位科目群においては多くの項目間において強い相関が見られている。その内容としては、「理解」と「関心」と「推薦度」が満足度と強い関連を示しており、次いで「話

し方」と「黒板」が強い関連を示している。このことから、下位科目群においては、何らかの項目が改善されることによって、全体的な満足度が向上する可能性が考えられる。特に、学生の「理解」と「関心」に注目することによって、授業の満足度が向上することが予想される。

では、学生の「理解」と「関心」を満たすにはどのような改善が望ましいのだろうか。まず、「理解」に関しては、大学教育に関する研究結果より、学生と教員とのコミュニケーションがある場合、動機づけの低い学生に対して理解を促進するとの知見が得られている。例えば、授業において積極的に対話を行う、あるいは、レポート課題を課した際、特に優秀であったものについて匿名で学生に公開するなど、学生の努力が授業に反映される環境を構築することが提案されている。「関心」に関しても同様に、教員に対して興味があるために、授業内容に対しても興味が促進されるケースが指摘されている。また、授業を開始する際に、その授業の意義（今日の授業を通して、〇〇ができるようになります、など）を説明することで、学生の関心が集まることが報告されている。このように、授業を運営する際に工夫が求められているといえよう。なお、その際には「黒板」や「話し方」などに注意し、学生が集中しやすい環境を構築することが望まれていると考えられる。

3.2.3 平均評定値上位・下位 20 位間の自由記述の比較

授業改善アンケートでは、各授業の評価できる点と改善が必要な点について、自由記述形式で調査を行っている。

ここでは、上位 20 位と下位 20 位にランクされた授業の特徴を明らかにし、より効果的な授業のヒントを得るため、これらの科目間において自由記述文の比較を行う。以下に、上位 20 位と下位 20 位にランクされた授業の評価点と改善点の書き込み数について記載する（図 3-4）。

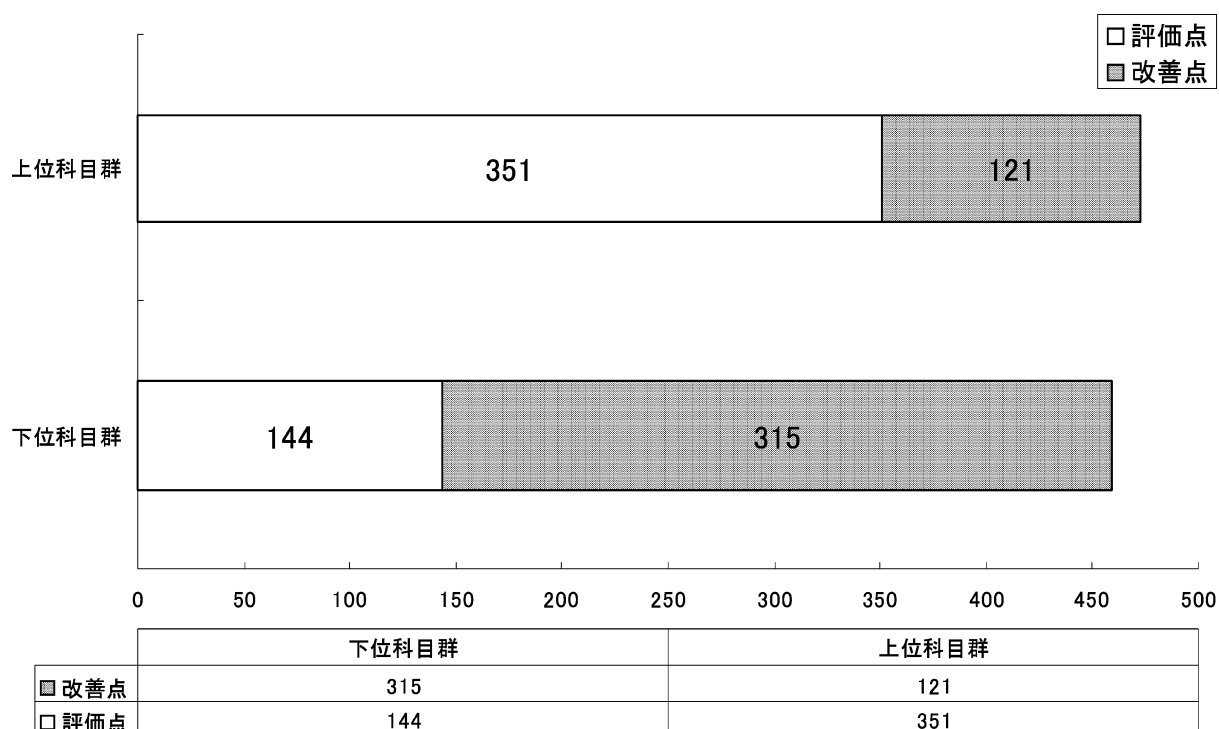


図 3-4 上位・下位科目群の自由記述数

上位 20 科目の評価点の特徴

学生からの評価が特に高かった 20 科目の評価点に注目する。この点に注目することを通して、学生からの評価が高い理由についてヒントが得られることが期待される。

平成 15 年度と平成 16 年度の調査結果、ならびに、今回（平成 17 年度）の調査結果より、上位 20 科目の評価点について以下の 3 つの観点から検討することが妥当と考えられる。

- 1) 授業のわかりやすさ・ていねいな進行
- 2) 授業の社会的有用性
- 3) 学生と教員とのコミュニケーション（学生参加）

1) 授業のわかりやすさ・ていねいな進行

自由記述の結果より、学生は個々の授業に対して「授業のわかりやすさ・ていねいな進行」の観点から捉えていることが示された。また、その下位には、①聞き取りやすさ、②授業構成の明確さ、③教員の対応、これらの観点を設定することが可能である。以下に、それぞれの観点についての結果を記載し、具体的な記述例を示す。

①聞き取りやすさ

授業のわかりやすさを構成する概念として、まず「聞き取りやすさ」に注目した。学生からの評価としては、教員の声が聞き取りやすいこと、また、ハキハキしていることについて特に評価が高いことがわかる。また、教員の声の聞き取りやすさと授業の騒々しさとの間には関連があるものと考えられる。評価の低い授業においては、周囲の学生の声が騒々しく、教員の声が聞き取れないことに対するいらだちが多数記述されている。このことから、聞き取りやすさを向上させるためには、教員は意図的にハキハキ話すこと、重要なポイントを声でも強調することなどの個人的な工夫に加え、騒々しい学生に対して注意する、あるいは退席させるなどの毅然とした対応が必要であるだろう。

〈自由記述データより〉

「先生の声がききとりやすくハキハキして聞きやすい講義だった。」

「スライドを見ながら効果的に授業を進めていたと思う。聞きとりやすい声だった。」

「先生のハキハキとした話方がとても聞きやすかった。重要なポイントなどわかりやすく説明してくれて良かった。」

「興味をもちやすい。説明が丁寧。例が楽しい。」

「商大の授業の中で一番受けがいのある授業でした。先生の講義はとても効率がよく、聞きやすくて、とても良かったです。」

「先生がゆっくりききやすく話してくれるので、良かったです。」

「先生の話し方、声の大きさなどは非常に聞きとり易くすばらしいと思います。特に会話のテンポが良く、こちらの関心を引きつけるリズムが最高です。」

「やさしい声で教えてくださり、もっとやる気が出て来ます！coolな先生の教え方はものすごく良いです。」

「説明がわかりやすかった。丁寧に復習もしてもらえたので、身についたと思います。」

②授業構成の明確さ

次に、授業構成の明確さに注目する。授業構成の明確さとは、具体的には授業内容を提示する順序や方法と言い換えることができよう。では、どのように提示すれば学生の理解を促すことが可能

なのだろうか。学生が特に高く評価を行っている事例として、わかりやすいレジュメを準備すること、事前知識の確認、学生の興味を引く内容の準備など、多様な工夫が指摘されている。内容提示の工夫の重要性について示しているものと考えられる。

〈自由記述データより〉

「授業の構成がしっかりしていた点。演習のためのプリント等を配ったり、学生に質問しながら、スライドを進めるなど、ただ話しをするだけでなく、対話的に授業を進めていた事。枝葉的なものの紹介がある。(授業の本節とは直接関係しないが、関連する問題を扱った題材等の紹介)」

「プリントを毎回用意していただいていたので良かったです。全く、パソコンの知識がない状態ではじめてなので、すごく不安でしたが、毎回の問題演習が良かったです。」

「聞きとり中心の授業なので、理解しやすかった。面白く、自ら進んで授業にとりくむことができた。わかるまで、何度もテープなど聞かせてくれるので、納得して次へ進むことができた。自分の中で上達具合を知ることができた。」

「授業内容の他に予備知識等を教えてくれる場面が多くあった。」

「商大の授業の中で一番受けがいのある授業でした。先生の講義はとても効率がよく、聞きやすく、とても良かったです。また、この先生の講義を取りたいです。」

「毎回面白い内容が準備されていた。英会話力をつけるには本当に良い授業だと思う。」

③教員の対応

授業は、ほとんどの場合において、1人の教員と多数の学生で実施されるといえよう。ここで、学生に不明点や要望が生じたときに、教員がどのように対応するかについても、学生のわかりやすさを規定する要因であることが考えられる。また、個別の学生ごとに既有知識や、学習に対する姿勢が異なることが考えられる。このような場面において、教員がどのような工夫を行い、できるだけ多くの学生に理解させるか、そして満足感を与えることが出来るか、この点について問われている項目であるといえるだろう。

〈自由記述データより〉

「出欠の確認がネットで見れるので良かった。」

「よく自分勝手に説明をし、理解できないことを学生の責任にする人がいるが、この授業では難しい話をわかりやすく説明してくれて、勉強したいという気になった。先にのべたような先生に影響されず、このような授業を続けてもらいたかったです。」

「プリントをうまく使ってくれたのが良かった。生徒の事を考えてくれたのがうれしかった。」

「経験者、初心者にとわず、ていねいに教えてもらった点。」

「レベルごとにチーム分けられた点。」

2) 授業の社会的有用性

学生からの自由記述では、評価できる点として「楽しかった」、「今後、役立てたい」という意見が多く見られた。大学全体の教育効果の観点からも、今後の生活において有用な知識の習得が望まれている。ここでは、特に「役だった」、「今後に役立てたい」という内容について代表的な意見を抽出した。その結果、新しい知識や視点の獲得によって、楽しかった、満足したという意見が多いことが示された。

なお、社会的有用性に関連して、聞き取りやすさや進行ペースについても望ましいものであったことが同時に示されている記述が多く見られた。これは、学生に授業の社会的有用性を認識させるためには、その土台として、聞き取りやすさや適切な進行ペースが求められているものと解釈できるだろう。このことから、社会的有用性が評価点として強調されている授業は、聞き取りやすさや進行ペースなど、学生に対する配慮がなされていることの根拠となるものであることが考えられる。

〈自由記述データより〉

「最初に、この授業を受ければ英語が身につくと思い履修しました。本当に少しだけ英語が聞けるようになったと思います。」

「決定的に他の授業と違うところは「実践的である」ということ。授業を「演習」ととらえ、とにかく学生に考えさせ、書かせ、発言させるという雰囲気は、これからの商大の講義モデルとして継続していくべきだ。」

「ビデオが面白いもので、興味が沸いた。パワーポイントがわかりやすいものだった。将来にきっと役立つものもあると思う。」

「大学のどの授業より役に立つと思いました。」

「経済科目を初めて履修したのですが、圧倒されました。実学という感じがします。1年次配当で必修科目にしたら生徒の学生生活（意識）はきっと変わると思います。」

3) 学生と教員とのコミュニケーション（学生参加）

次に、学生と教員とのコミュニケーションについて注目する。学生からの評価点として、教員とのコミュニケーションが楽しかった、また、学生同士のコミュニケーションが楽しかったという事例が多く挙げられている。多くの授業研究の結果より、小学校、中学校、高校、大学を問わず、すべての教育場面は学習者と教授者とのコミュニケーションとして捉えることが可能であることが指摘されている。また、教員と学生とのコミュニケーションが用意されている授業は一般的に学生の満足度が高いことが示されている。授業内容のスムーズな伝達を意図した際、学生と教員とのコミュニケーション、また、学生同士のコミュニケーションが大きな影響を及ぼしているものといえよう。

〈自由記述データより〉

「少人数制の授業ということもあってか、授業には取組みやすかった。講義→課題提出→プレゼンという過程で、生徒皆が授業に参加できる形だったと思う。」

「これをやるとこういう能力がつく、というように具体的なていじがありよい。参加型の授業で、ここまで積極的にできてよかった。」

「グループ作業やプレゼンは他の授業ではできないのでためになった。以前は苦手だったがよい訓練になった。」

「大学の授業の中でこんなに楽しいものはなかったです！ プレゼン・コミュニケーション能力が大いに伸びたと思います。」

「いろいろな人とコミュニケーションがとれる点。ただ授業に参加しているだけではなく、積極性が身につく点。」

「プレゼンテーションでクラスの人と協力し合えてよかったです!! 毎回会話出来たこともよかったと思います。」

「スピーキングにおけるコミュニケーション力の養成に重点が置かれていた点。ゲームなどをして楽しめる授業にしていた点。」

上位 20 科目から得られる示唆

これまで、授業評価アンケート上位 20 科目の自由記述データから、どのような点が学生にとって望ましかったかについて代表例を抽出した。その観点として、「わかりやすさ・ていねいさ」、「授業の社会的有用性」、「学生と教員とのコミュニケーション」を設定した。その結果として、それぞれの観点を裏付ける意見が多く見られている。ここで、3つの観点の関連について考察する。

まず、「授業の社会的有用性」について、その内容に関する記述とともに「わかりやすさ・ていねいさ」に関する記述が多く見られた。これは、学生がその授業を聞き取りやすく、そして理解できたと考えたときに、今後の生活で役に立ちそう、あるいは役立てたいという感想に達したものと考えられる。授業改善の指針として、聞き取りやすいように話すこと、また、学生の理解の度合いを確認しながら進行することが第一に挙げられよう。さらに、この「わかりやすさ・ていねいさ」を重視することを通して、授業の社会的有用性について認識させることが可能になるものと考えられる。

次に、「学生と教員とのコミュニケーション」については、学生の授業に対するモチベーションを向上させる効果を持つことが予想される。学生が授業内容の理解に困難をきたした際、教員に対して質問を行う必要が生じる。ここで、すぐに質問が可能な雰囲気と、質問をしにくい雰囲気とでは、明らかに前者の場合に学生の積極性とモチベーションが向上することが予想される。また、学生と教員との間のみではなく、学生同士のコミュニケーションも多数記述されていた。学生同士でコミュニケーションをとることによって、友達が増えた、また、新しい視点を獲得したとの意見が多く報

告されている。このことから、講義形式の中にもグループでの作業を取り入れるなどの工夫を通して、学生の授業に対する動機付けをさらに高めることが可能となるのではないだろうか。

下位 20 科目の改善点の特徴

授業評価アンケートにおいて下位 20 科目に位置した自由記述の改善点に着目する。このデータについて集計・検討を行うことにより、授業ではどのような行動を避けるべきかについてヒントが得られることが期待される。ここで、改善点を検討するにあたり、前年度と前々年度の結果から以下の 2 点の観点からの検討が適切であると考えられる。

1) 授業のわかりにくさ

2) 教員による不適切な対応

1) 授業のわかりにくさ

学生による授業評価アンケートの下位 20 科目にほとんど共通している指摘として、授業のわかりにくさが挙げられる。その下位項目として、さらに 3 つの観点が挙げられる。第一に話の聞き取りにくさ、第二に提示資料の見にくさ、第三に授業内容の難解さである。

ここでは、個別に代表的な例を抽出し、対策を提案する。

①話の聞き取りにくさ

授業における改善点として、まず話の聞き取りにくさが挙げられる。その原因として、教員の話し方が不明瞭である、発話スピードが速すぎるなどの直接的な要因と、周囲の騒がしさ、また機材の不調などの間接的な要因が挙げられよう。直接的な要因として、不明瞭な話し方、また、発話スピードの速さについては、教員個人個人の努力によって改善することが可能であるだろう。この聞き取りやすさの要因は、授業の社会的有用性につながる重要な要因であることが予想されること、また、教員個人個人の努力によって改善が可能であると考えられることから、まず最初に取り組むべき課題である。

次に、間接的な要因として周囲の騒がしさや機材の不調が挙げられる。これは、授業運営に関わる部分であるために普遍的な改善方法を提案することは困難である。しかし、学生からの意見としては「自分は授業に集中したいのに、周囲に騒いでいる学生がいて、集中できなかった」という内容が数多く見られている。このことから、授業の進行を妨げる程度の騒々しさに対しては、授業に集中したい学生からの苦情が多いことについて言及した上で、きちんとした対応（静かにするように注意する、あるいは退席させる）を行う必要があるものと考えられる。また、機材の不調に関しては、ある程度授業を開始する前に利用可能かどうかをチェックする必要があるだろう。具体的には、授業開始の数分前に講義室に入り、利用する機材が利用可能であるかどうかのチェックを行っ

た上で授業を開始することが望ましい。数分前に講義室に入ることにより、機材のチェックが可能であると同時に、教員の授業に対するやる気を示すことが可能である。教員の授業に対するやる気を示すことによって、間接的に学生の動機付けも向上させることができるだろう。

〈自由記述データより〉

「先生の話すスピードが速いです。もっと落ちついてゆっくりでも良いと思います。」

「不慣れなせいだと思いますが、内容が難しくて理解できないのではなく、聞き取れないので理解できないと言ったことが多かったです。あと、どこが重要なのかよくわかりません。」

「プリントを読み上げる時に、早すぎてどこを読んでいるかわからなくなる。声が小さく、聞きづらい。マイク使って欲しい」

「もう少しゆっくりお願いします。」

「もう少し大きい声で話してほしかった。」

「授業中うるさい人がいて、授業が聞こえなくてめいわくだった。」

「発音が聞き取りにくい。発言のタイミングと内容を考慮して話すべきだ。」

「プレゼンの技術を勉強すれば良くなるのではないかと思います。」

②提示資料の見にくさ

黒板の文字やパワーポイントの見にくさについて、提示資料の問題としてまとめた。黒板に関する問題としては、文字が小さい、字が汚い、構成が分からないなどの問題が指摘されている。また、パワーポイントについては、進行するペースが速すぎてノートに写せない、スライド一枚あたりの情報量が多すぎる、一方で字が小さすぎるなどの問題が挙げられている。黒板については、より大きな文字で書くこと、丁寧に書くこと、内容を系統立てて配置すること、これらが必要であるといえよう。これらを実現するためには、授業で触れる内容について精選する必要がある。授業内容を精選することによって、重要なポイントを端的に表現することが可能となる。また、端的に表現することによって、一語一語をより大きく書くことも可能となるだろう。次にパワーポイントに関して、一時期はパワーポイントを利用すると学生の満足度が向上すると言われてきたが、実際は異なる意見も多い。具体的な意見としては、内容を書き写すことに時間を取られ教員の話聞くことができない、パワーポイントにしても文字が小さく読めないなどの問題が挙げられている。この点については、教員同士の授業参観が対策として有効と考えられる。講義室の最後列に座ったとき、どの程度の文字まで読むことができるか、また、書き写すにはどの程度の時間が必要かなどの問題について、学生と同じ視点で評価することが可能である。他の教員のプレゼンテーション技法を参考に、自分自身のプレゼンテーションを向上させる試みが効果的であると考えられる。

〈自由記述データより〉

「黒板の字みづらい。」

「パワーポイントで扱う量が多く、どこが大事なのかわからなかったのもっとコンパクトにまとめていただきたいです。」

「つめすぎたスライドを次々と板書する暇も与えず変える。理解させようとする気のない授業。」

「授業がものすごく早くて、ノートを書きとるゆとりも先生の話聞くゆとりもあんまりなかったのもっと授業をゆっくりやってほしかったです。」

「プリントの文章がまわりくどい。あとで読み返しても全く意味がわからない。」

「板書をノートに写しましたが、家へ帰ってよく見ると、説明不足でよくわかりませんでした。先生の説明をききながら黒板をみている時はよくわかるつもりでいても、家へ帰るとわからなくなります。」

「授業中に書く黒板の文字が見えづらい時が何回かあったので power point にしてみるどうか、改善してみてほしい。」

「プレゼンの技術を勉強すれば良くなるのではないかと思います。」

「パワーポイントを使ったときは、生徒がノートに書くくらいの時間がせめてほしかった。」

③授業内容の難解さ

一般的な授業においては、学生は「知らないこと」を学習するものである。そのため、学生にとっては内容について難しく感じる機会が多いものと考えられる。しかし、その領域について先行知識を持たない学生に対して、専門用語を用いた解説を行っても理解を促すことは困難であるだろう。この、先行知識を持っている状態、持っていない状態のことを、学習のレディネスと呼ぶ。学生の授業内容に対するレディネスが整っていない場合、前もってその段階まで知識レベルを引き上げることが必要であるだろう。なお、この点については「自ら学ぶ場所が大学である」という意見と、「難しい内容を分かりやすく教えるのが大学である」という意見が対立する。どちらの意見・方針においても「教育」の根幹に関わることであるため、どちらのスタンスを取るかは個々の教員に委ねられるべきであろう。ここで学生に対して、教員がどのようなスタンスで授業を行っているのかについて説明を行うことを通して、授業方針を適切に運営することが可能になるものと考えられる。

〈自由記述データより〉

「内容がむずかしいのにペースが早すぎる。」

「専門的で、あまりよくわかりませんでした。」

「話してる内容がわからないことが多かったのもっとみんながわかるように授業して欲しいです。」

「難度が異様に高かった。」

「テストが難しすぎる。毎回しっかり出席している人にはわかるものにしてほしい。出席しても
しなくてもテストの点数が同じになってしまうのはおかしい。」

「わかりづらい。推測させるような問題は、初めてその内容に触れる学生には難しすぎる。」

「練習問題が欲しい。」

「初心者にとって内容が全く理解のできないものであった。」

「授業の内容が難しくわかりにくいので、もっとゆっくりわかりやすいように授業を進めてほ
しいです。」

2) 教員による不適切な対応

自由記述アンケートの結果より、アンケートの質問項目には掲載されない多様な学生の観点が得られる。ここでは特に、質問項目には掲載されていないものの、学生から問題として捉えられている点について抽出する。その内容としては、シラバスと授業内容との違いや、授業の運営(雰囲気)に関するものが多かった。シラバスについては、学生はそれを参考に授業を選択せざるを得ないことから、重要な情報であるといえよう。ここで、シラバスの内容と授業内容との間に違いが見られたとき、学生にとっては約束を破られたような印象を持つことが予想される。シラバスの内容と授業内容とが異なる場合には、前もって説明を行う必要があるだろう。また、授業の運営(雰囲気)については、学習環境の整備という観点からも重要な問題である。学生と教員の両者にとって、気持ちのよい授業を進行させるために気をつけたい点である。

〈自由記述データより〉

「生徒を批判するばかりで教えることを教えてない。」

「シラバスに試験なしと書いていたが試験をした。」

「間違えた人に対するいい方が厳しすぎる。自信を持って答えろといっているがあれではかえって自信を失ってしまう。」

「自分で講義の内容を理解していない時があった。学生をバカにしている。」

「先生が生徒に平気で失礼な事を言う点。」

「みなが問題をとけないのは自分の説明が悪かったせいだと思った方がよい。」

下位 20 科目から得られる示唆

これまで、下位 20 科目についての自由記述データから、避けたい内容についてまとめてきた。その内容としては、第一に「授業のわかりにくさ」、第二に「教員による不適切な対応」が挙げられた。「授業のわかりにくさ」については、さらに 3 つの要因があることが考えられ、①説明の聞き取りにくさ、②提示資料の見にくさ、③授業内容の難しさ、これらが示された。この点に関して、学生が聞き取りやすいように話すこと(話し方、設備の利用)、また、学生にとって見やすい資料を提示す

ることが重要であるだろう。学生が授業内容を十分に聞き取ることができ、そして資料を有効活用することが可能となることを通して、授業内容の難しさの問題がスムーズに解決できるものと考えられる。

また、教員による不適切な対応については、教員間において教育方針が異なるため一概に対応策をまとめることはできない。しかし、前もって教員自身の教育方針（自習する時間を多く取ってもらいたい、授業時間中に理解してもらいたい、など）を説明することによって、学生からの「誤解」を防ぐことができるのではないだろうか。

いずれにしても、授業は学習者と教授者とのコミュニケーションで成立しているという視点に立つことが求められている。また、学生からの意見を聞きそれに対してどう対応するかという工夫が、すべての授業において等しく求められているといえよう。

まとめ ～「よい授業」を実践するには～

では、「よい授業」を実践するにはどのような試みが求められているのだろうか。学生による評価が高い科目と低い科目とを比較することを通して、いくつかのヒントが得られた。まず、評価が高い授業の自由記述には、聞き取りやすさ、明確な授業目的、良好な教員の対応、これらの記述が多かった。また、わかりやすいと記述されていた科目では社会的有用性が認識されやすく、学生と教員とのコミュニケーションが成立していたことが考えられる。授業を行うにあたり、その科目についてどのように教えるか、どうすれば学生にとってわかりやすいか（あるいは学習に対する動機付けが高まるか）について十分に準備して望む必要があるだろう。

学生からの評価が低い科目からは、わかりにくさ、教員の対応が問題として挙げられていた。効果的に学習者に学習を促すためには、学生からの意見を受け止め、授業に反映する必要があるだろう。なお、急激な授業形態の変化が困難である場合には、その前段階として学生が授業に対してどのような要望を持っているか1～2行分のスペースで簡単に質問するだけでも、学生の印象が変化することが予想される。さらに、その要望を適切に取り入れることによって、授業評価得点にとらわれない「よい授業」を行うことが可能となることが予想される。

3.2.4 授業の満足度と推薦度との関連

学生の授業に対する満足度と推薦度との相関について分析を行った。実際、授業に対して満足した学生は、友人や後輩に対して授業の履修を勧めることが予想され、これまでの結果も予想に違わない結果が得られている。平成17年度のデータにおいても、同様の結果が得られている。授業の満足度と推薦度との関連について、以下の図3-5に示す。なお、相関係数は0.922 ($p < .01$)であった。

この結果より、これまでの結果と同様、授業に対する満足度と推薦度との間に強い相関関係が見

られることが示された。

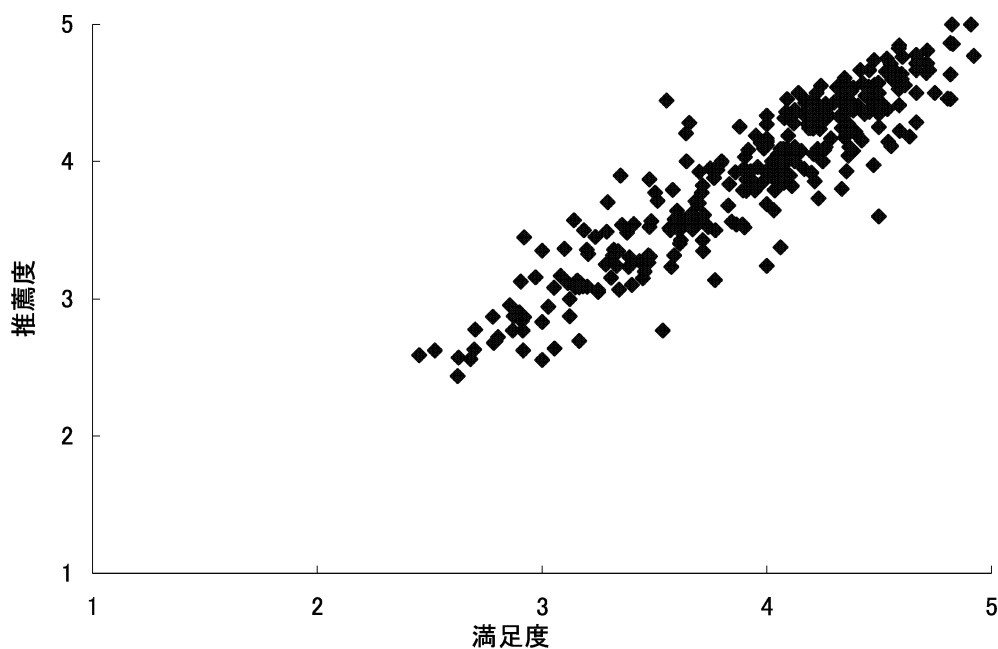


図 3-5 授業満足度と推薦度との相関

ここで、極めて珍しい例ではあるが、満足度が高い一方で推薦度が低い科目が見られている。これは何を意味するのかについては解釈が極めて困難である。学生が授業に対して満足している一方で友人にはお勧めできない授業、また、学生が友人にお勧めしている一方で満足度は低い授業、これらは具体的にどのような授業なのだろうか。考えられる原因の一つとして、容易に単位を取得できる一方で授業自体はそれほど興味深いものではないものが挙げられる。その他にも多様な要因があるものと考えられるが、いずれにしても学生の満足度を規定する背景要因が明らかにならないことには解釈は依然として難しい。今後、学生の授業に対する満足度を規定する要因についての検討が求められているといえよう。

3.2.5 授業の満足度とクラスサイズとの関連

授業の実施規模と、学生の満足度との間にはどのような関連が見られるのだろうか。これまでの結果では、いずれも負の相関が見られている。なお、その背景としては私語や遅刻者の多さ、途中退室のような行動の増加や、学生や教員間のコミュニケーション不足が推測されている。

ここでは、平成 17 年度のデータについて、学生の履修者数と満足度との関連、ならびに、実際に回答を得られた数と満足度との関連について相関分析を行った。その結果、履修者数と満足度との間には -0.254 の相関、回収枚数と満足度との間には -0.137 の相関が見られた（図 3-6～3-7）。なお、これらは 1% 水準で有意であった。

履修者数と回収枚数のどちらにおいても負の相関が見られていることから、クラスサイズが大規模な授業では、学生の満足度は低くなる傾向があるといえるだろう。この結果については、これまで考察されているように、私語の多さや遅刻者・早退者の多さによるものと考えられる。しかし、これらに対して授業中に注意することは困難であることが考えられる。大規模な授業においては、講義時間帯の分割や、授業担当者を増やすなどの根本的な対策が求められていると考えられる。

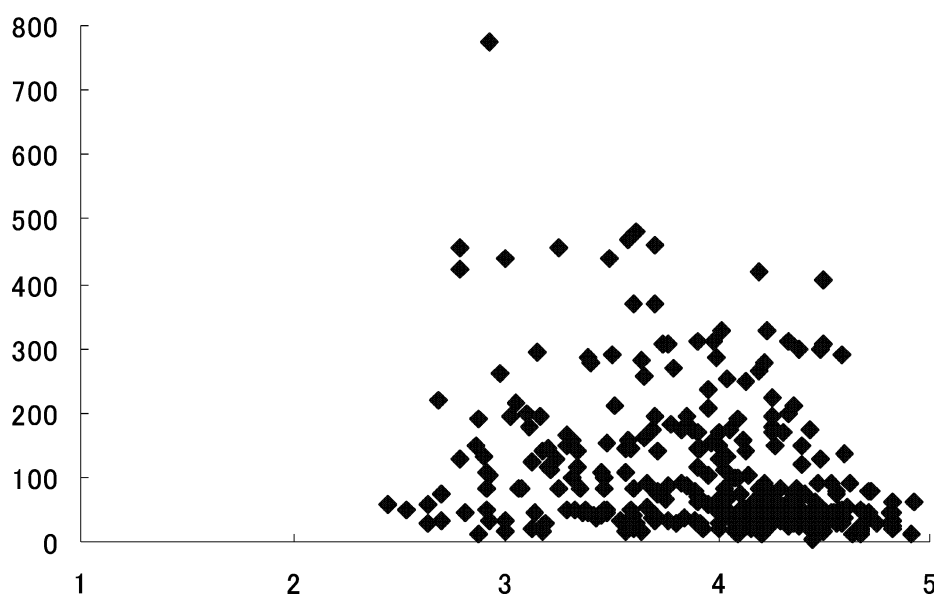


図 3-6 履修者数と満足度との散布図

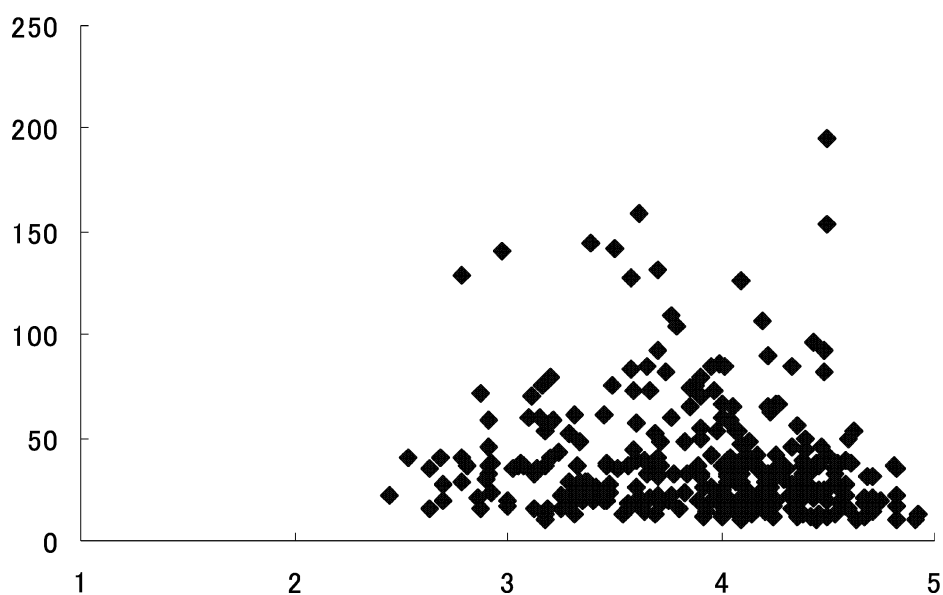


図 3-7 回収枚数と満足度との散布図

次に、授業規模と満足度との関連について、その規模ごとにカテゴリー化し、満足度ごとに分類を行った。なお、満足度は 33 パーセンタイル得点、66 パーセンタイル得点を基準に、低満足度、中満足度、高満足度に区分した。結果を以下の表 3-10、表 3-11 に示す。

表 3-10 履修人数と授業満足度

履修人数	科目数	満足度低群	満足度中群	満足度高群
		(～33%ile)	(34%ile～65%ile)	(66%ile～)
200人以上	76科目	32(42.1%)	27(35.5%)	17(22.4%)
100～199人	34科目	20(58.8%)	11(32.4%)	3(8.8%)
50～99人	61科目	16(26.2%)	24(39.3%)	21(34.4%)
50人未満	141科目	34(24.1%)	42(29.8%)	65(46.1%)
合計	312科目	102	104	106

表 3-11 回収枚数と授業満足度

回収人数	科目数	満足度低群 (～33%ile)	満足度中群 (34%ile～65%ile)	満足度高群 (66%ile～)
200人以上	0科目	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
100～199人	13科目	7(53.8%)	4(30.8%)	2(15.4%)
50～99人	51科目	19(37.3%)	23(45.1%)	9(17.6%)
50人未満	248科目	76(30.6%)	77(31.0%)	95(38.3%)
合計	312科目	102	104	106

ここでは特に、表 3-10 の履修人数と授業満足度との関連について着目する。履修人数が 200 人を超える大規模授業においては、満足度低群が最も多く、満足度高群は少ない結果となっている。それに対し、履修人数が 50 人から 99 人までの中規模授業においては満足度は均等に分布しておりそれほどの違いは見られない。このことから、授業規模が大きくなるにつれて、学生の満足度に大きなばらつきが生じているといえよう。さらに、授業規模が大きくなるにつれて、授業に対する満足度が低くなっていると考えられる。この点については、教員の個人個人で対処が可能な要因と、対処が難しい要因が混在していることが考えられる。教員、学生の両者にとって、授業を実施しやすい環境、ならびに授業を受けやすい環境を整える必要があるものと考えられる。

最後に、履修者数、回答者数と各項目との相関について検討する。この検討を通して、クラスサイズの規模が各項目にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることが可能である。相関分析を行った結果を、以下の表 3-12 に示す。なお、網掛けの部分は 5 %水準で有意であることを示す。

表 3-12 クラスサイズと各項目の相関係数

	準備	話し方	黒板	教材	視聴覚 機器	理解	関心	出席状況	満足度	推薦度
履修者数	-0.05	-0.18	-0.17	-0.15	-0.01	-0.21	-0.22	-0.09	-0.26	-0.20
回答者数	0.00	-0.08	-0.09	-0.08	0.10	-0.09	-0.10	0.09	-0.14	-0.11

クラスサイズと各項目との相関について分析を行った結果、いくつかの部分に比較的弱い相関が認められた。クラスサイズと満足度との関連については事前に述べたとおり、例年通りの結果となっているが、他の項目についても同様に相関が見られている。特に、「理解」と「関心」において比較的弱い相関が見られており、それに続いて「話し方」、「黒板」、「教材」が続いている。この結果については、学生の満足度との相関分析の結果と非常に類似しているといえよう。クラスサイズが大規模である授業については、比較的学生の満足度が低くなりやすく、その傾向も授業の満足度との相関に非常に類似していることが示された。

これらの結果より、クラスサイズが大きいほど学生の満足度は低下する傾向が見られているといえよう。その結果、相関係数は比較的低く、弱い相関が認められている。これは、クラスサイズが授業満足度に対して致命的な要因ではないことを示しているものと考えられる。しかし、いずれも負の相関を示していることから、何らかの対策が必要であることは明白である。クラスサイズが大規模である場合、学生の理解度や興味には大きな差異が生じる。そのような状況において、どのように学生の「理解」を深め、「関心」を引き出すのか、この点について工夫が求められているといえよう。その一方、クラスサイズが大きい場合、私語の多さや遅刻者・早退者など、教員の努力によって解決が困難な課題も多い。教員のみに努力を求めるのではなく、カリキュラム編成時に授業を分割するなど、授業編成時においても何らかの工夫が必要ではないだろうか。

3.2.6 自由記述欄の分析

平成 17 年度アンケートにおける、のべ回答者数は 11,640 名であった。その中で、評価点（この授業で良かった点を挙げてください）を記入した学生は 4,287 名、改善点（この授業で改善すべき点を挙げてください）を記入した学生は 3,319 名であった。なお、平成 16 年度アンケートにおける回答者数は 15,610 名、評価点の回答者は 5,689 名、改善点の回答者は 4,411 名であったことから、すべての結果において昨年度よりも減少していることが示された。

本節においては、自由記述欄の分析を通して、授業改善のために有用な知識・情報を抽出することを目的とする。そのため、自由記述欄の文章をキーワードに分解し、授業改善に関連する知識・情報の出現頻度に注目した。この手法は、テキストマイニングと呼ばれる手法である。キーワードの抽出にあたり、形態素解析を行った*1。形態素解析を通して、文章を文法的に意味づけが可能な最小単位に分析し、文法的に意味を持つ最小単位（要素）に区別することができる。例として「血液型と性格との関連は実証されていない」を形態素解析した場合、その要素は「血液型」、「と」、「性

*1 キーワードの抽出と、品詞の区分をにあたり、形態素解析システム「茶筌（奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻自然言語処理講座）」を用いた。

格」、「と」、「の」、「関連」、「は」、「実証」、「する」、「れる」、「て」、「いる」、「ない」に分けられる。なお、キーワードの抽出は品詞情報に基づいて行われる。その際の品詞として、以下の種類に注目した。

①形容詞—自立、接尾、非自立

②動 詞—自立

③副 詞—助詞類接続

④名 詞—サ変接続、一般、形容動詞語幹、固有名詞—組織

⑤未知語の一部

なお、形態素解析を行うにあたり、類義語に注意する必要がある。例として、教員を指し示す単語として「講師、教授、先生、教師」などが挙げられる。これらは、表記は異なるものの、同一の意味として扱う必要がある。今回の分析では、自由記述から得られたそのままの文章に形態素解析を実施し、その後、得られた結果をまとめる方法を採用した。なお、まとめられた単語としては、「パワーポイント、パワポ、PowerPoint、ppt」、「レジュメ、レジメ」、「良い、よい」などが挙げられる。

形態素解析によるデータ抽出を行った結果、評価点として 4287 文章から 31905 単語が得られた。また、改善点として 3319 文章から 26400 単語が得られた。この中で、単語の出現回数が 100 以上のキーワードに注目し、評価点ヒストグラムとして図 3-8、改善点ヒストグラムとして図 3-9 を作成した。また、キーワードの中には、「する」、「授業」、「思う」などのように、評価点と改善点の両方で抽出されているものがある。その出現比率の「改善点」／「評価点」で求めたものを、図 3-10 に示す。

まず、評価点キーワードの出現比率に注目したとき、「よい (1227)」、「わかる (801)」、「楽しい (417)」など、授業に対して好意的な回答が多く見られる（括弧内は出現頻度を示す）。ここで、授業に対する好意的な回答の理由として、「説明 (353)」、「プリント (220)」、「丁寧 (116)」、「ビデオ (115)」などが挙げられる。これらの項目は、学生にとって望ましい授業のあり方についての示唆を与えるものであるといえよう。

次に、改善点キーワードの出現比率に注目すると、特に頻度が高く、授業内容に関連する項目として、「ほしい (775)」、「もう少し (426)」、「にくい (236)」などが挙げられよう、具体的には、「もう少し〇〇してほしい」、「〇〇しにくい」という形で、改善を求める内容が記載されていた項目と考えられよう。では、学生は具体的にどのような内容を改善点として挙げているのだろうか。ここで、授業内容に関する項目に注目すると、「わかる (469)」、「黒板 (274)」、「話す (105)」、「声 (102)」などが見られている。このことから、学生は特に「わかりやすさ／わかりにくさ」、「黒板の読みやすさ／読みにくさ」に、改善を求めているものといえよう。ここで、特徴的な項目として「話す (105)」

と「声（102）」が挙げられる。この両者の出現頻度がほぼ同様であることから、この項目は「話し声」の形態素解析の結果から得られたものであると考えられる。授業中の周囲の学生の話し声についても、問題と感じている学生が多いことが予想される。

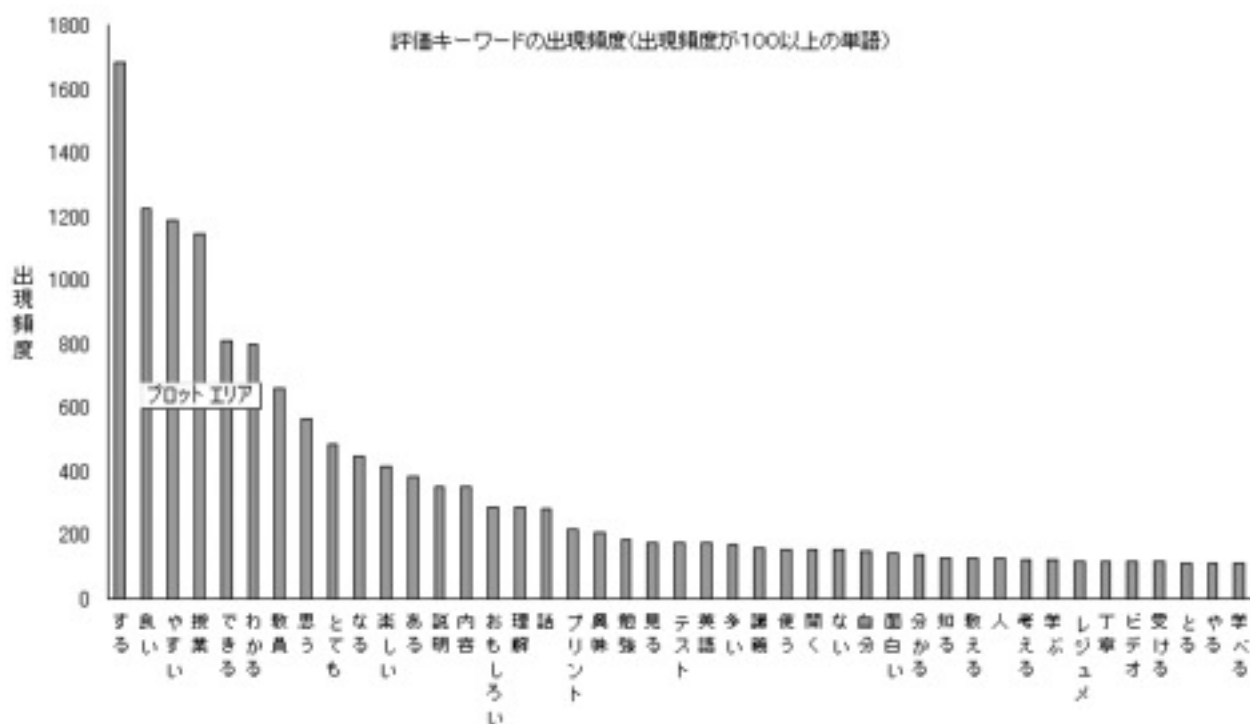


図 3-8 改善点キーワード（出現頻度が 100 以上の単語）

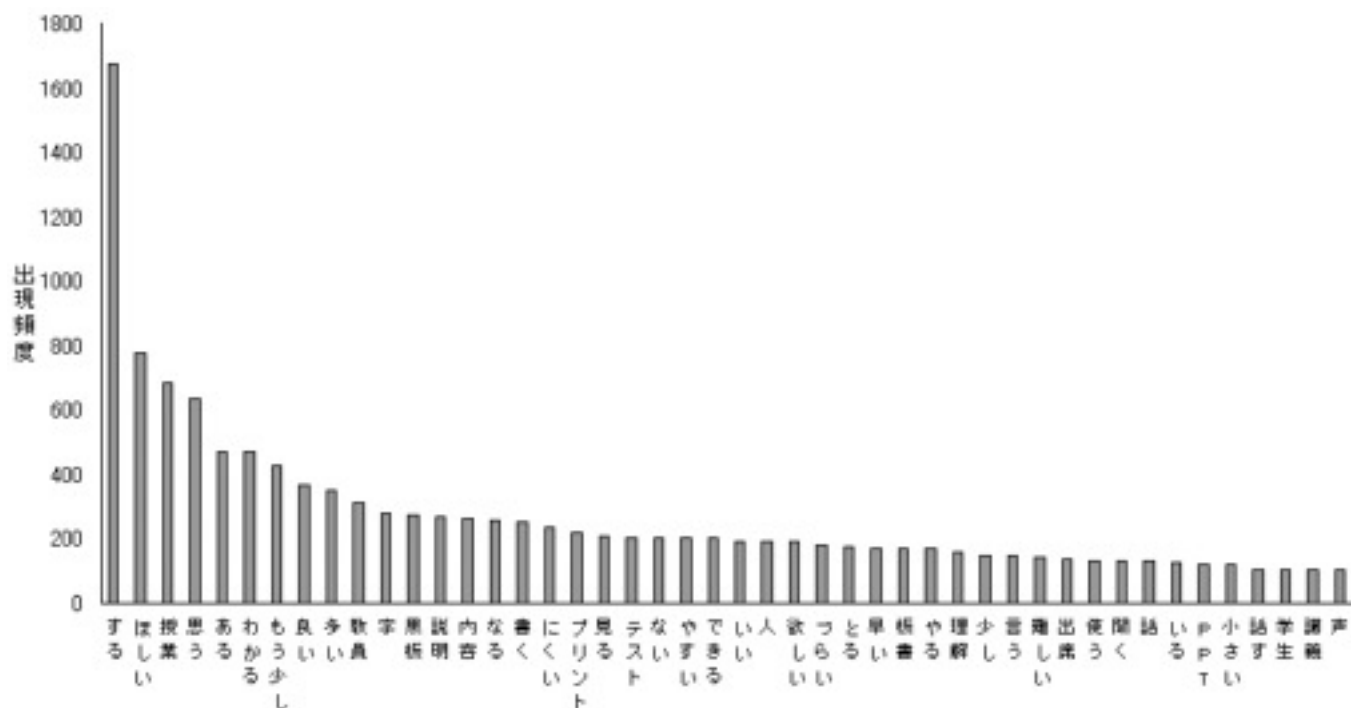


図 3-9 改善点キーワード（出現頻度が 100 以上の単語）

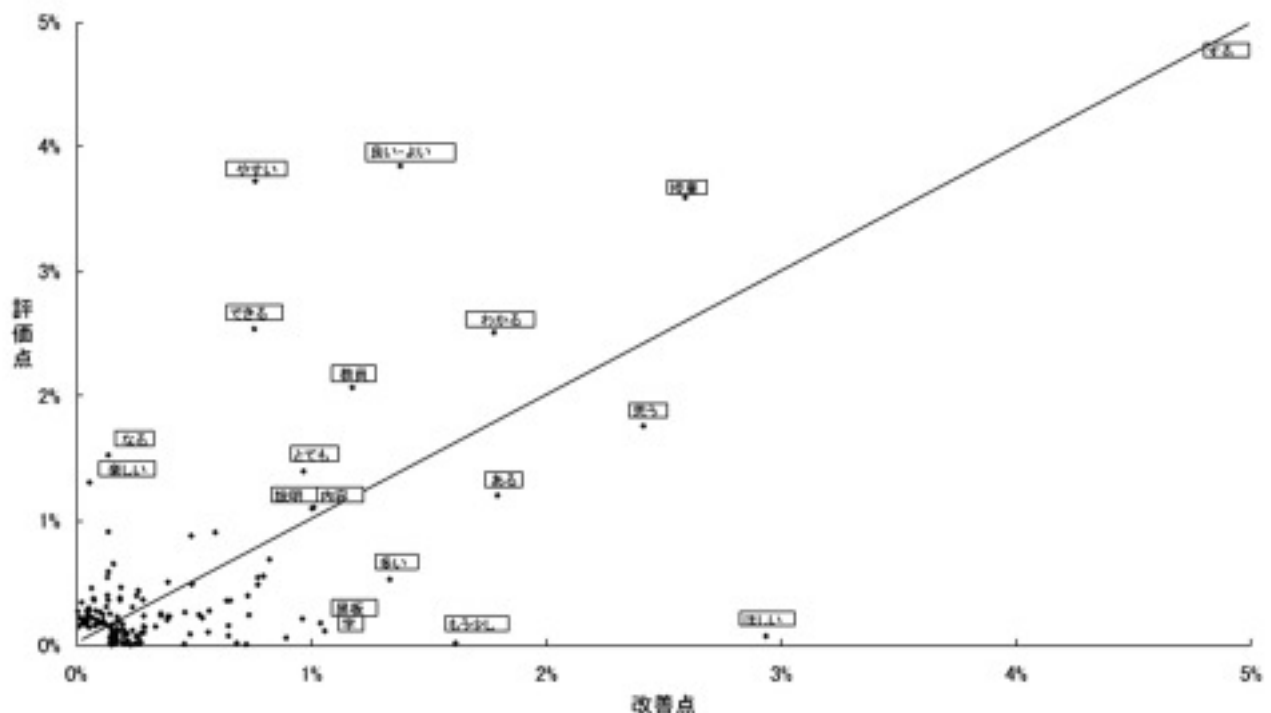


図 3-10 評価点と改善点の出現比率

次に、評価点と改善点の出現比率に注目する。出現比率については、評価点／改善点の式で求められる。そのため、上記の図 3-10 において右下にあるものほど改善が求められる項目であり、左上にあるものほど学生が満足している項目であることを示している。

ここでは、評価点と改善点の出現比率から、授業改善に関連する内容に注目する。まず、評価点としては「良い」、「やすい」、「できる」、「わかる」、「なる」、「楽しい」などの項目が挙げられる。この項目を抽出する際、「できるようになる」、「わかるようになる」などの好意的な回答が多かったことによるものと考えられる。以下に、代表的な回答例を示す。

- 板書が程良い量でわかりやすかった。
- まず第一に興味をそそられた。魅きつける授業内容で飽きることがなかったと思う。一回の講義で、必ずその日やったことの演習があるので、講義の内容が頭に入り、良い。先生が大変楽しそうに講義をしているので、良い。
- 進度→丁度良いと思う。早くしたらわかりにくくなるのでは、と思う。
- 教材・講義ともに充実しており、実践的（実社会に根ざした話）な部分が多くとても満足している。また、講義の仕方も学生が関心のもつよう、わかりやすく工夫されていたと感じる、私が商大で受けた商学の授業では一番良い授業だった。
- 先生の人柄が良い。
- 模擬授業が経験できる点はやはり良い。

- 授業について、細かい注意点まで指摘してくれるのが良い。
- 学生に意見を述べさせるので、受身の授業でないのが良い。
- 良い緊張感があるのでとても集中して授業に取り組める。
- 教科書の知識を定着させるために、色々な工夫（ディスカッションやクイズ等）をしてくれたこと。すんなり理解することが出来た。皆の前で発言することは良い経験になった。
- 生徒に意見をきいたりするのは良い試みだと思われる。
- 2講続きで本来なら疲れるが、できるだけ疲れさせないように努力してるのが良い。
- webでパワーポイントのデータを公開して頂いたのが非常に良かった。又、パワーポイントの資料も非常に手がこんでいてわかりやすかった。下手な参考書よりも良い資料だと思います。非常に参考になりました。
- 説明も分かり易かったし、半期4単位にしても良いと思う。
- オープンで親しみやすかった。時事的なものも多く良い。
- 授業はおもしろかったです。私語も少なくて静かで良い授業でした。
- グループで一つの事に関して学ぶということは良いことだと思う。
- グループやペアでの会話練習などは良いと思います。時々やっていた、グループでの遊びも面白くて良かったです。
- けっこう肩の力抜いて授業を受けることができました。
- この授業を受けるまでは不とう明だった金融機関の取引についてくわしく知ることができた。出席がないので、授業に出たい人のみ出席し、良い環境であった。
- とても静かです。みんな集中しています。かなり授業態度の良い授業だと思います。授業は全員参加型です。
- テキストに基づく講義だけではなくて最新の情報で授業だったので、こういう勉強をしている人にとっては良い勉強になると思います。
- テストに①講義の内容＋②ある事柄に対する自分なりの分析があるのは良いことだと思う。
- 学生からの質問を毎回講義にフィードバックするのもライブ感があり、「毎年同じ」という印象を抱かず参加できる。
- とってもわかりやすいレジュメ、授業で楽しかったです。身近な例を出してくれたり、とても良かったです。ありがとうございました。
- とってもレジュメがわかりやすかったです。
- とってもわかりやすい説明（授業内容）でした。また、なるべく、わかりやすくするよう努めていました。
- とってもわかりやすく、学ぶべき点が多かった。
- とってもわかりやすい授業で良かったと思う。このままの授業の進め方で問題ないと思う。
- とっても学生にわかりやすく授業をされていた気がします。

- とても聞き易いペースで授業が進行していたので、とてもわかり易かったです。又、最近の時事問題や興味・関心を抱くような話題にも触れ、あまり好きでは無かった民法も好きになれて良かったと思います。5分間の休憩も集中を持続するのにとても役立ちました。生徒のことをよく考えてくれている授業だったと思います。
- とにかく、授業がていねいで最高にわかりやすいです。監査論につづき、大満足の講義でした。プリントが多いとの批判もあるようですが多くなければ、理解できるような内容ではないと思います。これからも素敵な授業よろしくをお願いします。
- パワーポイントの授業はとてもわかりやすかったです。図は自分で書くというのは聞いてるだけでなく良かったです。
- パワーポイントやDVDで、すごくわかりやすい説明でした。例などもわかりやすい例えを挙げてくれて、とてもわかりやすかったです。他の学科の人でも理解できそうな授業なので、友人にもすすめたいです。
- ビデオを通じて、実際の企業をモデルにしたことでわかりやすかった。
- プリントがわかりやすかった。声もききとりやすく、たくさん説明してくれたので理解できた。
- プリントが読みやすく、理解しやすい。黒板にもいろいろと書いて、わかりやすい。インターネットでプリントをダウンロードできると便利だ。
- プリントの内容はまとめてあり、とてもわかりやすかった。授業中にお話しのあった出来事は自分の未体験のことばかりで参考になった。
- レジュメがすごくわかりやすかったです!! あんなにいいレジュメを作れるのだから、授業も、慣れればもっと良いものができると思います。
- わかりやすく理解できるように先生が教えてくれるのが良い。
- 何度も繰り返し説明していただけたので、1度聞いただけではよく分からなかったことも理解できるようになった。
- 会話や自由作文など、楽しみながらできる内容が多かった。
- 教員のための授業であるが、将来自分の子供の教育にも活用できると思う。家族のあり方を違った視点でとらえることができ、参考になった。また、少人数であったため授業よりもより真剣にとりくめた。
- 興味深い話が多く、とてもためになった。受け身の授業ではなく、自分が参加できることがよかった。
- 最初、何を言っているか聞き取りづらく授業も分かりにくかったが、何回も授業に出るにつれて慣れてかえって興味深く授業を聞いた。
- 授業に毎回出ていればプリントを見たら理解できるようになっていて良かった。

次に、評価点と改善点の出現比率における、改善点に注目する。改善点としては、「ほしい」、「もう少し」、「黒板」、「字」などの項目が見られている。以下に、上記の単語を含む回答例を示す。

- 具体的な議論（学説）に触れてほしい
- テストとジャーナル毎日書くのがつらい。どっちか片方にしてほしい。
- もうちょっと簡単な言葉で概要を説明してほしい。語句説明とかを新しい言葉がでてきたら、もうちょっとマメにしてほしい。
- 話しの内容で大事なことは、ゆっくりしゃべるかくり返す、もしくは板書する等してほしい。同じ流れで話されるとメリハリがなく、非常にききとりづらい。
- やはり出席のとりかたは別の方法が望ましいと思う。おちついて話すよう心がけてほしい。
- 出席にかわるものとして、小テストの実施、あるいは定期試験で合格に満たない場合における救済措置などを考えてもらえればうれしい。授業中において、試験で出しそうな部分を、はっきりと教えてほしい。
- 多少声が聞きとりにくいのもっと大きな声でしゃべってほしい。難しい論点の説明に関しては、もう少し普段より時間をかけて説明してほしい。
- 1つのテーマが長すぎて、少しあきてしまった。黒板の字が見づらいので、大きく濃く書いてほしい。
- 単語の中でも、これは必ず使うというものを、もっとピックアップしてほしい。
- 連続でやるのは、疲れるし集中力が続かないと思うので、やめてほしい。
- OHPにうつり変わるのが早いので、ノートがとれなかった。もっと、ゆっくりやってほしい。
- グラフが多くでてきたが、記号を使いすぎて分からないので、もっと分かりやすくしてほしい。
- たまにスライドで次のページに行くのが早かった時があったので、もう少しゆっくりやってほしい時がありました。
- たまに声が小さく独り言のようになる時があったのでそこを改善してほしいです。
- どうしてもわからないところをわかるまで質問してくるのはやめてほしい。
- ノートを書いている最中に説明をはじめているのをやめてほしい。聞きたいけど、聞けない。
- プリントの図だけでは、わかりにくいものがいくつかあり、それらの詳しい説明がもっとほしかった。
- プリントをパソコン上で配布するのではなく、普通に配ってほしい。
- マイクの音がききとりにくかった。もっと、聞こえやすいように話してほしい
- 時間が全くなりませんでした。私の勉強不足かもしれませんがもうちょっと余裕をもってできるようにしてほしいです。
- もう少し、おもしろそうな内容を増やしてほしいです。

- もう少し、トピックごとにしてる、ということを強調してまとめてやってほしい。
- もう少しかみくだいてわかりやすい授業にしてほしいです。レジュメもっと易しい言葉で簡単に作成してほしいです
- もう少していねいに字を書いてほしい。黒板のばん書をもっと増やしてほしい。
- もう少しはきはきと喋り、やる気を出してほしいです。欲を言えば、学生が授業内容に関心を持つように工夫をして欲しいです。
もう少しゆっくり進めてほしいです。板書と口頭での説明が同時に速いスピードで行われているので、ノートをとるのに精一杯で説明を聞くことができません。
- もっと試験の事にふれてほしい。はんいが広すぎるし、いろんな説のあつかい方がわからなかった。
- 全てのことを教えるより、ある大事な事項にしぼってやってほしい。テストに初めて授業でやってほしいような例だいが出て解けない。
- レポート集める日付くらいは事前に掲示板で連絡してほしい。あるいは講義内でもいいが数度の連絡が欲しい。
- 私語している人を注意するときは、ただ大声をだすのではなくて、ちゃんと注意してほしい。
- 教官が前期やすんでいたのもう一つの授業との進度が全く違って最初とまどいました。教官がしばらく休む場合はなにか対応策をとってほしいです。
- 興味のある人が多いと思うので、もっとプリントや関連する情報を与えてほしい。
- 計算問題を解いて説明する時に、黒板の字が小さくて見えなかったり、もう少し詳しく説明してほしい。
- 言葉だけではなく、黒板にもう少しまとめて、重要なことなどを書いてほしい。
- 後ろの方に座ると、先生の声が聞き取りにくかったり、黒板の字が見えにくい点。
- 黒板が若干見づらかった。あと、黒板がごくまれにまちがっていることがあったので、プリントの解答もホームページにのせてほしい。
- 黒板に書く字が小さすぎて、読めない。前列1～5列目の席にすわって、やっと見えるようなときもあった
- 使用する順にパワーポイントを作成していただきたい。
- 授業で使うパワーポイントは事前にホームページに出してほしいです。手元に資料がないと不便です。
- 授業の際のスライドは、やはりパワーポイントなどのソフトを使ってほしいと思いました。
- 授業自体はすごく面白かったのですが、パワーポイントを画面かえるのがちょっと早すぎてかきとれない部分がけっこうありました
- マイクを使っていたが、声が小さくて聞きにくい時もあった。もう少し、はっきりと喋ってほしい。

- プリントは、ほぼ話し言葉で書かれてあるため、必要のない言葉が多い。プリントとは言葉で説明するのが困難である場合などに配布するため、話し言葉にする必要はないと思う。もっと簡潔にわかりやすい用語を使ってみてはどうか。
- プリントを読み上げる時に、早すぎてどこを読んでいるかわからなくなる。声が小さく、聞きづらい。マイク使って欲しい。

最後に、図 3-10 の対角線上の項目に注目する。得られた単語の評価点と改善点の割合が 1 対 1 に近いとき、つまり、良い点と悪い点の両方で均等に出現した単語ほど、対角線により近くなる。この項目の解釈としては、賛否両論があるものの学生の関心は高いことが考えられる。具体的には、「説明」と「内容」が挙げられる。これらは、出現頻度が極めて近い結果となっていた。学生にとっては、「説明」と「内容」とがほぼ同じ意味で解釈されている可能性が示された。以下に、「説明」と「内容」を含む具体的な回答例を示す。

- 資料を沢山使って説明した事。他の授業ではあまりプリントやプロジェクタを使わないものもあるので、いろんな資料に目を通してよかった。
- 事例を挙げて実務上のことも念頭に説明されるので理解しやすいし興味深い。
- 時間に遅れることが一度もなく、皆が理解しやすいように、わかりやすく説明してくれました。
- 実験して見せてくださったり、具体例をあげてくださったりと、わかりやすく説明してくださいました。
- 実例を挙げて、説明することでより理解が深まったと思う。
- 授業ではきちんと下準備を怠らなかったし、最後まで納得のいく形で説明してくれたと思う。
- 授業に関するビデオや、先生が訪れた様々な場所などを紹介していただけた点です。自分もぜひ行ってみたいと思いました。説明も丁寧でわかりやすく、とても興味深くて楽しく学べました。
- 授業の進む早さが丁度良く、自分で考えながら学習できたので、理解しやすかった。事例を挙げながらの説明で、わかりやすかった。
- 親切丁寧な説明で大変わかりやすかった。質問を受け付けてくれる姿勢がとても嬉しい。
- 知識のあまりない生徒に対しても分かりやすいように説明していた点
- 静かな中で話を聞け、説明もとても丁寧で良かった。時折入る雑談が面白い。
- 説明がわかりやすく良かったです。時々混乱したがういういしくて楽しかったです。ゆえに親しみが持てました。楽しく授業を受けることができて良かったです。
- マイクを近づけすぎていて、何を言っているかわからない。説明していることの意味がわからない。

- まだ板書している時に、説明をはじめられると、説明を聞きのがしてしまったり、板書しそびれることがあるので、改善してほしいです。
- もう少しさっぱりした説明をしてもよいのでは…。
- 板書と口頭での説明が同時に速いスピードで行われているので、ノートをとるのに精一杯で説明を聞くことができません。
- 多くの事を教えていただけるのは良かったが、説明をかなり速くする部分があったのが、少々残念であった。
- 計算問題の説明が足りなかったと思う。もう少し時間をかけてほしかった。
- 黒板の字が小さくて見えなかったり、もう少し詳しく説明してほしい。
- 現実の問題に関わりの深い部分を現実とからめて説明してもらえともっとわかりやすいかもしれない。
- 口頭での説明が多い分板書量が少なく、後で復習するときに困ってしまうことがあるので、もうちょっと詳しい板書がほしいです。
- 黒板がやや乱雑。説明を飛んだりするのを改善してほしい。
- 黒板に書きながら説明されると書くことに集中してて聞きのがしたことがよくあったので、書く時間と話す時間を分けてほしいです。
- 黒板に書くことに対して説明が不十分だと思うのもっと後でノートを見てもわかるように説明を書くべきだ。
- 最後まで内容がよく分からなかった。マイクが大きくて、反対にききとりづらかった。
- 仕方がないのかもしれないが、授業内容が教科書に沿っておらず、あっちこっちに飛ぶのは、分かりにくくて、理解が難しかった
- プリントが教科書とほぼ同内容だったので、教科書と違う部分もあると良かったと思います。
- 内容をがらりと変えてしまうので、生徒は混乱すると思います。
- 内容がちょっと難しかったと思う。でも、先生はがんばって説明してくれていた。
- 内容がとびとびで、言いたい本筋がよくわからない。
- 板書、内容が錯綜しすぎている。全部レジュメ化してみてもどうか。
- 内容が難しく理解できないのではなく、聞き取れないので理解できないと言ったことが多かったです
- 毎回授業で何をするのか分からないので試験やプレゼンは内容を事前に予告してほしい。
- 先生が学生が授業内容をちゃんと理解できるようよく配慮して頂きました。
- 内容は難しかったけれど噛み砕いて教えてくれたので理解しやすかったです。
- 全部出席してみると、すごく難しいイメージだった内容がそんなに難しくないので感じた。
- 丁寧に説明してくれていた。進度は丁度良かった。レジュメも内容を押さえやすく、分かりやすく作っていた。

- 普段の授業とはまったく違う内容だが、身近な事を扱っていたので理解しやすかった。
- テストの解説が詳しくて、次のテストの参考になりました。論述の書き方の参考にもなりました。レジュメも分かりやすくまとめてあって良かったです。小テストが数回あると、内容の確認にもなってとても勉強になりました。

本節では、特に自由記述の内容に注目し、テキストマイニングの手法を用いた評価点と改善点の分析を行った。その結果、評価点としては「良い」、「やすい」、「できる」、「わかる」、「なる」、「楽しい」などの記述が多いことが示された。この結果は、「わかりやすい」、「できるようになる」、「わかるようになる」など、知識や技能の獲得に関する記述内容が多かったことを示すものと考えられよう。一方、改善点としては「ほしい」、「もう少し」、「黒板」、「字」の記述が多いことが示された。この点については、何らかの改善を示す「〇〇してほしい」という意見が多かったことを示すものと考えられる。そのなかでも、特に黒板や板書の読みやすさが、学生にとって大きな問題となることが予想された。なお、この点については黒板に限らず、パワーポイントやプリントの全般にわたる問題であることが考えられる。授業時間内における理解や、自習による理解が可能となるような板書や資料作成が強く望まれていることが示された。

また、評価点と改善点の割合が1対1である項目として、「説明」と「内容」の記述が多いことが示された。これは、賛否両論あるものの、学生の関心は高い項目であるといえる。これらの項目については、わかりやすさ、どのような場面で有効であるのかなど、学生に対して伝達する際に工夫が求められていることを示すものと考えられる。

このテキストマイニングによる分析を通して、学生が満足している点、また、改善を望んでいる点、さらに、学生の関心が高い点についての知見が得られたといえよう。今後の授業改善の指針として、上記の内容に注意した試みが学生に求められていると考えられる。

3.3 授業改善アンケートのまとめ ―授業改善の指針―

ここまで、定量的分析、定性的分析の二つのアプローチから、授業改善の指針について検討を行った。分析の結果より得られた知見を、以下にまとめる。

3.3.1 定量的分析を通して

質問紙調査の結果について、相関分析を行った。その結果より、「出席状況」を除くすべての項目に、「授業満足度」との相関が見られている。その中でも、特に強い相関を持つ項目として、「理解 ($r=.925$)」と「関心 ($r=.922$)」が挙げられる。これは、授業を理解することによる満足感、関心のある授業を学習する満足感、これらの要因が授業満足度に特に強く関連していることを示すものといえよう。次に授業満足度と関連する項目としては、「話し方 ($r=.805$)」が挙げられる。これは、授業における教員の声の聞き取りやすさを示す項目である。このことから、授業ではマイクを利用するなど、全ての学生に聞き取りやすくなるような配慮が必要であると考えられる。なお、「話し方」は授業における教員の声の聞き取りやすさを示す項目である。この点に関して、授業における騒々しさが関連していることが予想される。騒々しい学生に対する注意（静かにさせる、退席させるなど）が求められているといえよう。

なお、「視聴覚機器」と授業満足度との相関は、相対的に低い結果となっている ($r=.640$)。この点については、ビデオやパワーポイントを利用することによって、直接的に授業満足度と関連していないことが考えられる。このことから、視聴覚機器の利用にあたっては、クラスサイズや授業内容についても考慮し、より教育効果を高める工夫が求められているといえよう。

また、学生の評価に基づく上位科目群と、下位科目群との比較を行っている。その結果として、上位科目群には有意な相関が見られている項目が少ない一方で、下位科目群には多くの項目間に有意な相関が見られていた。これは、上位科目群においては学生の満足度がすでに満たされており、さらに満足度を高めるための指針が得られているものといえる。下位科目群においては、ある項目が改善されることに伴って、全般的に評価が向上する可能性が示されたものであるといえよう。

全般的な定量的分析の結果より、「理解」と「関心」が学生の満足度と強く関連していることが示された。わかりやすい授業、学生の関心を引く授業が望ましいと考えられる。次に、「話し方」と満足度との関連が強かったことから、授業では、学生にとって聞き取りやすい環境を構築する必要があることが示された。

3.3.2 定性的分析を通して

質問紙調査における定性的分析として、上位科目と下位科目の比較、ならびにテキストマイニングによる分析を行った。まず、上位科目と下位科目との比較の結果より、学生は授業に対して、①授業のわかりやすさ・ていねいな進行、②授業の社会的有用性、③学生と教員とのコミュニケーション、これらの観点から評価を行っていることが示された。上位科目の共通点としては、聞き取りやすいこと、社会的な有用性が理解できること、学生と教員とのコミュニケーションが成立していることが挙げられた。一方、下位科目においては、特にわかりにくさと、教員の対応が問題として挙げられていた。特に下位科目においては、学生からの意見を受け止め、その要望を適切に取り入れることが望ましいことが考えられる。

次に、より現実的な意見を収集するため、テキストマイニングによる自由記述文の分析を行った。結果より、大まかな内容としては定量的分析の結果と違いは見られないものの、学生は特に資料の読みやすさ、また、説明のわかりやすさを強く求めていることが示された。これは定量的分析の結果とも関連する結果であるが、授業の際には板書やプリントの読みやすさ、内容の精選が求められていることが考えられる。授業においては、十分な準備を行って臨むべきであるといえよう。

3.3.3 授業改善の指針

これまで、定量的な観点と定性的な観点から、授業改善に有効な知見を探る検討を行ってきた。その結果から得られた内容としては、これまでに報告された内容と大きな変化は見られていない。学生からの評価が高い授業の特徴として、「理解」や「関心」、次いで「話し方」の評定が高いことが示された。これは、学生が授業に対して、「わかりやすさ」、「関心のある内容」、「聞き取りやすさ」を強く求めていることを反映した結果であるといえるだろう。また、これらの項目を達成するためには、授業で活用する資料（PowerPoint、ビデオ、プリントなど）の質や、学生の要望に対してどのように対応するか、これらの点が問われているものと解釈することができる。

ここで、授業改善アンケートの目的を確認すると、より学生の満足度を向上させる授業のあり方についての指針を獲得することであった。この目的に対しては、学生の授業に対する視点の分析から、特に教員が気をつけるべき内容について、ある程度の知見が得られたといえるだろう。しかし、現実的な授業においては、多様な要因が関連している。例として、数百人単位の授業となると、学生からの要望に対応することが極めて困難である。特に学生の心的特性に注目すると、個人での学習が得意な学生もいれば、グループでの学習が得意な学生もいることが予想される。同様に、文章による学習が効果的な学生がいる一方で、図表による学習が効果的な学生がいることが予想される。このように、多様な学生に対して、個別に対応することは極めて困難である。そのため、大部分の学生にとっては望ましい授業であっても、一部の学生にとっては、満足感が得られない結果とな

ることがある。学習者の特性と授業改善の指針との関連に注目した研究は少なく、ほとんどの大学では、手探りでの授業改善の試みが行われている。この例が示すように、大学教育における授業改善研究は、ようやく本格的に取り組みが開始された領域であるといえよう。

ここで、他大学における授業改善の具体例を紹介する。ある大学では、授業を開始する際に、「今日の授業の内容を理解することによって、あなたは〇〇ができるようになります」という説明を行う取り組みを行った。これは、本学の調査結果の「社会的有用性」を特に強調する試みと捉えることが可能である。この試みを通して、学生の授業に対するモチベーションの向上、また、授業に対する態度が積極的となったことが報告されている。

この例は、授業を構成する多様性から一つの要因を抜き出し、その要因について重点的に対策を行ったものといえよう。現実的な授業場面においては、多様な要因が関連しており、全体的に評価を向上させる方法は個別にまったく異なることが予想される。しかし、一つ一つの要因に注目することによって、具体的な授業改善に取り組むことが可能となる。このことから、授業改善に取り組むにあたっては、一度に全ての内容を改善するのではなく、広い視野に立った、長期的な試みが求められているといえよう。この授業改善アンケートの結果が、教員にとっても、学生にとっても有意義な授業に近づくための手がかりとなることが願われる。

— ビジネススクール編 —

第 4 章

F D 活 動 報 告

(大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門)

第 4 章 FD 活動報告

4.1 アントレプレナーシップ専攻教育開発部門の活動状況

4.1.1 アントレプレナーシップ専攻教育開発部門の活動

平成 17 年度の大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門会議は 9 回開催された。主な審議内容は以下のものである。

- ・平成 17 年度授業参観について
- ・平成 16 年度授業評価アンケートの集計結果と分析について
- ・授業参観に係る旅費について
- ・平成 17 年度前期・後期授業評価アンケート集計結果と分析について
- ・FD 研修会について
- ・修了生による評価アンケートについて
- ・学習効果を測定する「アンケート調査」について
- ・年度計画（平成 17 年度・平成 18 年度）について
- ・ケースライブラリ設置・運用について

4.1.2 研修会の開催状況

大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門では、教員対象の FD 研修会を前期終了時及び後期終了時の 2 回実施し、授業評価アンケートの集計結果報告及び分析結果の検討並びに GPA を用いた成績評価が行われた。

4.1.3 授業評価等の実施状況

(1) 平成 17 年度「授業評価アンケート」の実施

大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門では、前年度に引き続き、平成 17 年度の前期及び後期の 2 回、開講しているすべての授業科目を対象に授業評価アンケートを実施した。授業評価の集計結果は、対象授業科目名、担当教員名を含めすべて公表した。平成 17 年度のアンケートの概要、分析等は、第 5 章 5.2 節に掲載している。

(2) 教員相互の授業参観の実施

大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門では、教員相互の授業参観を前期と後期に分け、実施した。

授業参観は、授業科目 1 科目毎に、アントレプレナーシップ専攻の専任教員 2 名が出席し、同僚による同僚評価を行った。同僚評価の対象となる科目は、実践科目を除く 34 科目とし、半期に 4 科目ないし 5 科目を評価対象として前期は 6 月、後期は 11 月に実施した。参観後に授業担当教員との懇談を行い意見交換後、授業参観記録シートを作成している。

(3) 教員による自己評価の実施

大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門では、平成 17 年度に開講されたすべての授業科目の担当教員を対象に自己評価を実施した。

自己評価は、教育活動実施記録と学生による授業評価、教員による同僚評価（実施された場合）に基づいて行われた。評価項目のうち、「自己評価レポート」は、教員氏名、担当科目名とともに第 5 章 5.3 節に掲載している。

4.1.4 FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」第 3 集への掲載

FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」第 3 集に、大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻における FD 活動について『ビジネススクール編』として掲載した。これは、大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門が平成 16 年度に活動した内容をまとめたもので、また、平成 16 年度「教育評価」の結果と分析の報告書も兼ねている。

— ビジネススクール編 —

第 5 章

平成 17 年度「教育評価」の結果と分析

第5章 平成17年度「教育評価」の結果と分析

大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門長

教授 奥田 和重

5.1 本学ビジネススクールにおける教育評価

本学ビジネススクールでは、教育の質の向上を目的に教員の「教育評価」を実施しており、そのためのガイドライン（付録1）を設けている。ガイドラインによると、本学ビジネススクールの教育目的は「専門職にふさわしい知識とスキルを身につけ、職業上それらの知識やスキルを実践的に応用できる教育を目的としている。」であり、この目的を達成するために、個々の教員が実施しているモジュール型授業の効果を測定して、その結果を教員にフィードバックすることにより教育の質の向上を目指すものである。教育評価は、教育の質の向上を目指すものであることから「形成評価」と位置付け、次の5種類の評価を実施している。

A) 学生による授業評価：

教育の受け手である学生による講義科目・実践科目の評価を行う。評価は Semester ごとに一貫性のある形式で実施する。学生によるこの評価結果は教育開発センターアントレプレナーシップ専攻教育開発部門が集計・分析して当該教員にフィードバックする。

B) 教員による自己評価：

教員自身が自己の教育活動に対して自己点検評価を行う。教員はモジュール毎に教育活動実施記録（付表1）を作成し、学生による授業評価と同僚による同僚評価を参考にして、Semester 終了後担当科目に関する自己点検評価を行う。評価結果は、教育開発センターアントレプレナーシップ専攻教育開発部門が取りまとめる。

C) 同僚による同僚評価：

同僚評価は教員同士による相互評価であり、同じ立場にある教育者がそれぞれに経験した多様な知見を共有することによって多面的な授業改善ができる。本専攻で行う同僚評価は授業参観を中心に、Semester ごとに評価者と被評価者を決めて行う。

D) アントレプレナーシップ専攻修了者による評価：

本専攻における教育の実質的な成果の有無を抽出するために在学学生だけでなく修了者による評価を行う。

E) 修了者の雇用主による評価：

修了者を雇用している企業が本専攻における教育の実質的な成果の有無を修了者の勤務実績を通じて抽出するために、雇用主による評価を行う。

「修了生による評価」と「雇用主による評価」は、学生がまだ課程を修了していないことから、実

施していないので、次節以降では「学生による授業評価」「教員による自己評価」「同僚による同僚評価」を掲載する。

5.2 学生による授業評価

5.2.1 アンケート集計結果と分析

(1) アンケートの概要

本節の目的は、平成 17 年度前期及び後期において実施された「授業評価アンケート」（以後「アンケート」）の集計と分析を行い、授業改善に結びつくヒントを探ろうとするものである。アンケートは、「Ⅰ 教員の教授法について」「Ⅱ オプション質問」「Ⅲ 自由記述欄」の 3 項目からなり、担当教員が独自にたずねる質問である「Ⅱ オプション質問」以外の質問項目は以下のようなものである。

Ⅰ 教員の教授法について

1. 授業は十分に準備されたものでしたか？
2. 授業はシラバスに沿っていましたか？
3. 教員の話し方は明瞭で聞きやすかったですか？
4. 黒板や OHP、パワーポイントの字や図は見やすかったですか？
5. 教員は、教材（テキスト、プリント、ケースなど）を効果的に使用していましたか？
6. 教員は、授業内容を理解しやすいように配慮していましたか？
7. ディスカッションは適切に運営されていましたか？
8. E-learning システムは効果的に活用されていましたか？
9. 課題の設定と授業の関連は適切でしたか？
10. あなたは、友人や後輩に、この授業を薦めたいと思いますか？
11. あなたは、この授業に満足しましたか？

Ⅲ 自由記述欄（記述欄略）

その他、気がついたこと、感想などをお書きください。

なお、アンケートは各質問項目について 5 段階評価を行っており、当該授業に該当しない質問項目については「n/a：不使用」を選択するようになっている。以後の分析において表記を簡潔にするために各質問項目を表 5-1 のように表記することにする。

表 5-1 質問項目の表記法

I 教員の教授法について						
質問項目	1	2	3	4	5	6
表記法	準備	シラバス	話し方	黒板	教材	授業
質問項目	7	8	9	10	11	
表記法	ディスカッション	E-learning	課題	推薦	満足度	
III 自由記述欄						
この授業のよかった点を5つまであげてください。					評価点	
この授業の改善すべき点を5つまであげてください					改善点	
その他、気がついたこと、感想などをお書きください。					自由記述	

(2) アンケートの集計結果

アンケートは平成 17 年度に開講した 34 科目（実践科目を除く）すべてで実施されており、各科目の回答者数は表 5-2 のようで、アンケートの回収率は 94.5%⁽¹⁾ である。

表 5-2 アンケート実施状況

科目名	履修者数	回答者数	科目名	履修者数	回答者数
経営戦略	35	33	技術と事業革新	11	11
マーケティング・マネジメント	37	36	ライフサイエンスビジネス創造	11	11
組織と人的資源管理	39	38	国際取引実務	3	3
コーポレート・ファイナンス	37	34	起業と法	11	9
企業会計の基礎	37	37	市場調査法	14	13
調査研究とデータ解析の技法	36	33	金融システムと企業発展	19	18
情報の処理と活用	36	32	財務会計とIR戦略	9	8
アントレプレナーの系譜とリーダーシップ	24	23	環境と経営	2	2
組織的意志決定とIT	14	13	予算管理と業績評価	13	13
企業財務と税務戦略	10	9	組織運営のためのシステム構築法	7	7
生産管理	7	6	パブリックマネジメント	7	7
経営者のための経済分析及び統計分析	24	20	上級ビジネス英語	2	2
企業の社会的責任と経営倫理	16	13	ベンチャー起業論	11	9
国際経営	15	15	北海道経済論	10	10
会計情報と経営分析	28	27	ビジネス英語の実践	12	12
顧客満足経営	31	31	知的財産の評価と活用戦略	12	11
事業革新と企業戦略	32	32	北東アジア研究	7	7
			合 計	619	585

各質問項目に対する 5 段階評価の各評価値の合計数と、各質問項目の平均評価値を表 5-3 に示す。表 5-3 ではほとんどの質問項目について 4 と評価した回答が最も多い。「ディスカッション」

⁽¹⁾ 平成 16 年度の回収率は 89.04%であった。

では、3と評価した回答が5と評価した回答より多く、これら以外は5と評価した回答が3と評価した回答より多い。「話し方」については5と評価した回答が最も多い。このような評価を行うと一般的には好意的に評価しようとする傾向があり、本アンケートでも同様の傾向が見られる。一方、1と評価している回答が「シラバス」以外にあり、特に「推薦」「満足度」には2桁あり、注意する必要がある。しかし平成16年度（付表5：136頁付録2参照）では「話し方」「黒板」「授業」「E-learning」「推薦」「満足度」に1と評価している回答が2桁あったことを考慮すると、本年度は改善されているといえる。

表5-3 回答数と平均値

質問項目	準備	シラバス	話し方	黒板	教材	授業	ディスカッション	E-learning	課題	推薦	満足度
回答1	4	0	4	1	2	4	8	6	3	13	10
回答2	8	6	19	14	10	20	32	29	30	23	26
回答3	43	50	66	63	62	77	155	121	68	91	76
回答4	287	302	243	241	241	259	237	233	270	245	258
回答5	238	222	245	239	236	213	143	156	197	208	209
1-5計	580	580	577	558	551	573	575	545	568	580	579

(3) アンケートの分析

各質問項目間の相関係数を計算すると表5-4のようになる。ここで相関係数が0.4以上の値を太字で示している。

表5-4 質問項目間の相関係数

相関係数	準備	シラバス	話し方	黒板	教材	授業	ディスカッション	E-learning	課題	推薦	満足度
準備	1										
シラバス	0.57	1									
話し方	0.49	0.35	1								
黒板	0.45	0.43	0.51	1							
教材	0.54	0.47	0.55	0.69	1						
授業	0.52	0.31	0.57	0.46	0.61	1					
ディスカッション	0.34	0.24	0.42	0.38	0.48	0.55	1				
E-Learning	0.35	0.34	0.38	0.40	0.49	0.33	0.36	1			
課題	0.52	0.44	0.53	0.46	0.61	0.64	0.54	0.46	1		
推薦	0.55	0.34	0.60	0.42	0.57	0.70	0.57	0.40	0.70	1	
満足度	0.55	0.36	0.61	0.45	0.59	0.68	0.57	0.41	0.68	0.87	1

注：0.00—0.20：ほとんど相関がない 0.21—0.40：やや相関がある
0.41—0.70：かなりの相関がある 0.71—1.00：強い相関がある

質問項目ごとに相関係数をみていくと、以下のようになる。

- ①準備：「ディスカッション」「E-learning」以外では「かなりの相関がある」であり、この2つの質問項目は「やや相関がある」である。
- ②シラバス：「準備」「黒板」「教材」「課題」の相関係数が0.4以上（「かなりの相関がある」）であり、これら以外の質問項目は「やや相関がある」である。
- ③話し方：「シラバス」「E-learning」は「やや相関がある」であり、これら以外が「かなりの相関がある」である。とくに「推薦」「満足度」は相関係数が0.6以上になっている。
- ④黒板：「ディスカッション」のみが「やや相関がある」であり、これ以外は「かなりの相関がある」である。特に「教材」は相関係数が0.69である。
- ⑤教材：すべての質問項目に関して相関係数が0.4以上の「かなりの相関がある」である。
- ⑥授業：「シラバス」「E-learning」が「やや相関がある」で、これら以外は「かなりの相関がある」である。「推薦」と「満足度」の相関係数は「強い相関がある」に近い値を示している。
- ⑦ディスカッション：「準備」「シラバス」「黒板」「E-learning」が「やや相関がある」であり、これら以外の質問項目は「かなりの相関がある」である。
- ⑧E-learning：「準備」「シラバス」「話し方」「授業」「ディスカッション」が「やや相関がある」であり、これら以外は「かなりの相関がある」であるが、相関係数は0.4台であった。
- ⑨課題：すべての質問項目に関して「かなりの相関がある」である。その中でも「教材」「授業」「推薦」「満足度」の相関係数が0.6以上である。
- ⑩推薦：「シラバス」のみが「やや相関がある」で、「満足度」は「強い相関がある」である。これら以外の質問項目は「かなりの相関がある」であった。
- ⑪満足度：「シラバス」が「やや相関がある」で、「推薦」とは「強い相関がある」である。これら以外は「かなりの相関がある」である。

付表6（136 頁付録2 参照）の平成16年度の相関係数を比較すると、質問項目間の相関関係が全体として強くなっていることがわかる。特に「話し方」と「黒板」は互いの相関係数が約0.7である以外では0.1台かあるいは0.1以下であった、平成17年度はほとんどの質問項目で0.4以上になっている。「E-learning」もほとんどの質問項目について相関係数は0.3以下であり、「話し方」と「黒板」については0.1以下であったが、平成17年度ではすべての質問項目が0.3以上になっている。これらのことから、個々の質問項目に関する改善努力が相乗効果をあげていると思われる。

次に、アンケートを実施した個別科目ごとの評価値は表5-5のようである⁽²⁾。アンケートを実施した34科目全体の評価の平均値は4.161であり、「推薦」と「満足度」を除いた9項目の評価の平

⁽²⁾ この評価値は、原則公開であるが、兼担・兼任教員については科目担当者の判断により公開・非公開を決めている。非公開の場合は空欄にしている。

均値は 4.162 であった。各質問項目の評価の平均値は「ディスカッション」の 3.848 から「話し方」の 4.300 までの間にある。平成 16 年度では、17 科目全体の評価の平均値は 3.894 であり、「推薦」と「満足度」を除いた 9 項目の評価の平均値は 3.901 であった。各質問項目の評価の平均値は「ディスカッション」の 3.648 から「準備」の 4.117 までの間にあった。一方、全科目を通じての評価値の最大値と最小値は、平成 16 年度が 0.880 と -2.379 で平成 17 年度が 0.878 と -2.033 であり、レンジは 3.259 と 2.912 であった。これらを表 5-6 のようにまとめて示す。以上のことから、「教員の教授法」に関する評価は、いずれの評価項目も平成 16 年度よりも平成 17 年度のほうが高い値を示しているので改善されているといえる。

表 5-5 個別科目毎の評価値

科目名	回答者数	準備	シラバス	話し方	黒板	教材	授業	ディスカッション	E-learning	課題	推薦	満足度
経営戦略	33	4.36	4.42	4.09	4.27	4.27	4.24	4.24	4.00	4.36	4.24	4.39
マーケティング・マネジメント	36	4.42	4.61	4.78	4.75	4.61	4.47	4.56	4.11	4.36	4.61	4.63
組織と人的資源管理	38	4.18	4.40	3.18	4.05	4.16	3.87	3.87	3.43	3.89	3.53	3.50
コーポレート・ファイナンス	34	4.12	4.03	4.21	4.29	3.94	3.79	3.53	3.91	3.74	3.44	3.47
企業会計の基礎	37	4.62	4.54	4.73	4.65	4.49	4.46	3.42	4.11	4.43	4.03	3.97
調査研究とデータ解析の技法	33	4.64	4.42	4.76	4.68	4.72	4.52	3.82	4.60	4.36	4.21	4.42
情報の処理と活用	32	3.94	4.25	3.32	4.31	4.13	3.59	3.00	3.47	3.56	3.00	3.13
アントレプレナーの系譜とリーダーシップ												
組織的意志決定と IT	13	4.39	4.08	4.23	4.08	4.54	4.23	4.23	4.46	4.15	4.39	4.46
企業財務と税務戦略	9	2.33	3.67	3.67	3.11	3.22	3.00	3.11	3.78	3.00	2.44	2.44
生産管理	6	4.17	4.50	3.83	4.50	4.50	3.50	3.17	4.33	3.50	3.67	3.67
経営者のための経済分析及び統計分析	20	4.45	4.05	4.35	4.05	4.22	4.00	3.40	4.53	4.00	4.05	3.95
企業の社会的責任と経営倫理	13	3.54	3.77	3.67	3.42	3.91	3.85	3.77	—	3.33	3.39	3.54
国際経営	15	4.60	4.80	4.40	4.57	4.54	4.47	3.80	3.67	4.36	4.53	4.60
会計情報と経営分析	27	4.04	4.33	3.67	3.79	3.91	3.84	3.48	4.16	4.00	3.85	3.82
顧客満足経営	31	4.47	4.36	4.61	4.47	4.41	4.43	4.41	4.13	4.17	4.58	4.52
事業革新と企業戦略	32	4.31	4.32	3.97	4.07	4.18	3.89	3.97	4.03	4.07	4.21	4.24
技術と事業革新	11	4.82	4.82	4.91	4.70	4.73	4.73	4.36	4.09	4.73	4.64	5.00
ライフサイエンスビジネス創造	11	4.09	3.73	4.55	4.64	4.46	4.46	4.46	3.82	4.46	4.55	4.64
国際取引実務	3	4.33	4.00	4.00	4.00	4.33	4.00	4.67	—	4.33	4.33	4.67
起業と法	9	4.00	4.00	4.33	3.89	4.11	4.11	4.22	3.78	4.00	4.33	4.22
市場調査法	13	4.00	3.85	4.00	4.39	3.92	3.77	4.00	4.00	4.08	3.92	3.92
金融システムと企業発展	18	4.11	3.83	4.22	4.11	3.94	4.17	3.39	4.00	4.00	4.17	3.94
財務会計と IR 戦略	8	4.14	3.88	4.75	4.25	4.57	4.25	4.13	4.00	4.25	4.25	4.25
環境と経営	2	4.00	4.00	4.50	4.50	4.50	4.50	4.00	4.50	4.00	4.00	4.50
予算管理と業績評価	13	4.15	4.00	3.77	4.00	4.00	3.75	3.70	4.08	4.00	4.00	3.92
組織運営のためのシステム構築法	7	4.57	4.14	4.57	4.14	4.33	4.57	3.71	4.00	4.14	4.14	4.57
パブリックマネジメント	7	3.83	3.67	4.83	3.80	4.00	4.20	4.33	—	4.17	4.33	4.33
上級ビジネス英語	2	5.00	5.00	5.00	4.50	5.00	5.00	4.00	4.00	4.50	5.00	5.00
ベンチャー起業論	9	4.44	4.56	4.78	4.33	4.13	4.33	4.11	4.25	4.56	4.67	4.56
北海道経済論	10	4.50	3.90	4.50	4.44	4.22	4.20	3.44	4.30	4.10	4.20	4.20
北東アジア研究	7	4.43	4.14	4.57	4.57	4.50	4.14	3.43	4.43	3.86	4.00	4.14
ビジネス英語の実践	12	4.48	4.67	4.92	4.00	4.80	4.83	4.67	—	4.50	4.75	4.75
知的財産の評価と活用戦略	11	4.55	4.18	4.27	3.50	4.00	4.40	2.73	—	4.60	4.55	4.64
質問項目毎の平均値		4.26	4.22	4.30	4.21	4.28	4.17	3.85	4.03	4.16	4.12	4.18
「準備」～「課題」までの平均値		4.162										
全体の平均値		4.161										

表 5-6 平成 16 年度と平成 17 年度の評価値の比較

年度	全体の 評価値	9 項目の 評価値	質問項目の評価値			科目の評価値		
			最大値	最小値	レンジ	最大値	最小値	レンジ
16 年度	3.894	3.901	4.117	3.648	0.469	0.880	-2.379	3.259
17 年度	4.161	4.162	4.300	3.848	0.452	0.878	-2.033	2.912

自由記述欄については、授業改善に有用な知識・情報を抽出するために、「評価点」と「改善点」についてキーワードを文章の中に出現する回数をもとに抽出する。抽出のために文章の形態素分析を用いる⁽³⁾。この方法は文章を文法的に意味づけが可能な最小単位に分解するもので、得られる最小単位（要素）が文法的な品詞情報を持っている。キーワードの抽出はこの品詞情報に基づいて行うのであるが、キーワードとして適切な品詞情報を表 5-7 のように定める。

表 5-7 キーワードとして採用する品詞

品詞区分	形 容 詞	動 詞	副 詞	名 詞
詳 細	自立、接尾、非自立	自立	助詞類接続	サ変接続、一般、形容動詞語幹、 固有名詞（組織）

「評価点」と「改善点」についてキーワードを抽出し、キーワードの出現頻度の総計が 5 以上のものについて図示したものが図 5-1 である。図 5-1 は横軸に「改善点」の出現頻度、縦軸に「評価点」の出現頻度を取り、キーワードの出現頻度を座標として図中の点で示したものである。図中の対角線は（「評価点」の出現頻度）／（「改善点」の出現頻度）＝ 1 となる線で、「評価点」の出現頻度と「改善点」の出現頻度が等しい点の集まりである。この直線の右下にある点が、「評価点」の出現頻度より「改善点」の出現頻度が多い点で、改善の必要性を示すキーワードを示し、直線上の周辺にある点は改善と評価が拮抗しているキーワードを示している。これらのキーワードを『「改善点」キーワード』として付図 1（137 頁付録 2）に示す。直線の左上にある点は「改善点」より「評価点」の出現頻度が多く、今後さらに伸ばしていくキーワードである。これを『「評価点」キーワード』として付図 2（137 頁付録 2）に示す。なお、キーワード「する」「ある」「ない」「なる」は、「動詞－自立」であり「評価点」と「改善点」の出現頻度は高位にあるが、このキーワードのみでは意味を持たないので、以下では取り上げない。なお、「自由記述」は付録 3（138～149 頁）に掲載する。

⁽³⁾「講師、教授、先生、教師、教官」を「教員」に、「講義」は「授業」に、「生徒」は「学生」に、「おもしろい」や「できる」などひらがなで書かれているものは「面白い」や「出来る」など漢字に置き換えている。

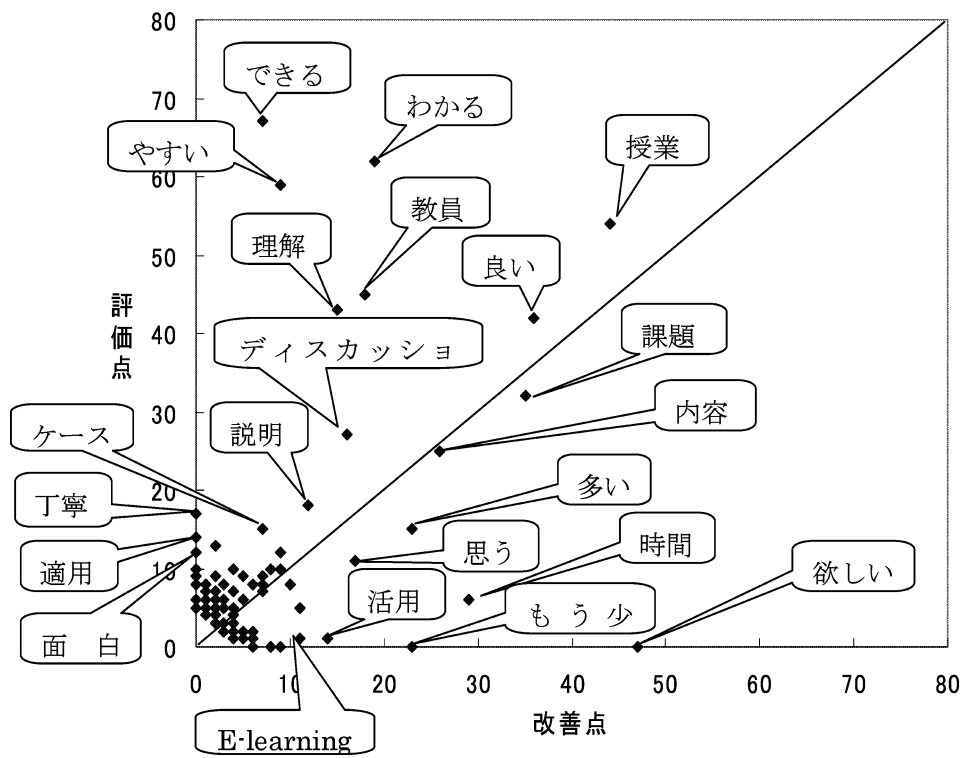


図 5-1 CS 分析

キーワード「欲しい」を含む「改善点」の記述は以下のものである。

- ダミーをもう少し説明して欲しかった。
- 復習につかえる資料が欲しい。
- ディスカッションの時間が欲しかった。
- 手元資料がもう少し欲しかった。
- 課題を直前に出すのはやめて欲しかった。
- E ラーニングをもっと活用して欲しかった。
- シラバスの変更連絡を早くして欲しい。
- E ラーニングに事前に、レジメを出して予習をしやすくして欲しい。
- 課題の主旨を把握していないことがあったのもう少し説明が欲しかった。
- パワーポイントの配色、コントラストを改善し見やすくして欲しい。
- 財務分析をもっと教えて欲しかった。
- 宿題は E ラーニング上で確認出来る様にして欲しい。
- デスカッションをもっと多く入れて欲しかった。
- パワーポイント資料の体裁を統一して欲しかった（タテ向きヨコ向き）。
- 法人税の基礎をもっとやって欲しかった。
- もっと現実的な講義をして欲しい。
- 数式を少なくして欲しい。
- 実際の調査会社の事例をもっと活用して欲しい。
- 課題の解答が欲しい。
- エクセルの使い方などもう少し具体的説明が欲しかった。
- ファイナンスをもっと実務的にして欲しい。
- コーポレート・ファイナンスとかなりダブっている。
- ケースが欲しかった。
- ディスカッションのまとめをもう少し判りやすくして欲しいです。
- 一つの科目として統制をとるようにして欲しい。
- アンケート集計期間をもっととって欲しかった。
- 課題の締切りをわすれる時があるので E ラーニングでアナウンスして欲しい。
- 参考図書を上げて欲しい。
- 学生のレベルで理解に大きな違いがあることに配慮して欲しい。
- CUP 分析の時間を多くして欲しい。
- もう少し重要ポイントを早く行って欲しかった。
- もう少し詳しく〇〇〇〇を教えて欲しい。
- テキストを指定して欲しかった。

- ○○○の基礎は別の授業で行って欲しい。
- もう少しディスカッションを深めて欲しい。
- テキストに日本語番の補促本を入れて欲しい。
- 資料に文字が多いためまとめてわかりやすくして欲しい。
- 小テストの量を減らして欲しい。
- テキストを入念に検討して途中変更をなくして欲しい。
- ○○教員とのジョイントはもう少し工夫して欲しい。
- ディスカッションを増やして欲しい。
- 課題のフィードバックが欲しい。
- 試験は事後課題にして、その分講義にして欲しい。
- 具体的な事例（会社）ケースを用いて説明して欲しい。
- できれば、パワーポイントを授業前に UP して欲しい。
- 副読本を紹介して欲しい。
- もっと判例を紹介して欲しい。
- わかりやすく説明して欲しい。

キーワード「もう少し」を含む「改善点」の記述は以下のようである。

- もう少しビジネスの場面で使える実用的な授業の方がよかったと思います。
- ダミーをもう少し説明して欲しかった。
- 手元資料がもう少し欲しかった。
- E ラーニングをもう少し活用した方がよかった。
- 課題の主旨を把握していないことがあったのももう少し説明が欲しかった。
- ○○○○と○○分析にももう少し時間が使えるとよかったと思う。
- もう少し○○的なところを少なくして○○○○的な部分を多くすればよかった。
- 分析について、SPSS を使ってやってるなどもう少し深くやってもよかった。
- エクセルの使い方などもう少し具体的説明が欲しかった。
- ディスカッションのまとめをもう少し判りやすくして欲しいです。
- もう少し重要ポイントを早く行って欲しかった。
- もう少し詳しく○○○○を教えて欲しい。
- もう少しディスカッションを深めて欲しい。
- もう少し早めに資料を UP していただければより効果的に予習できる？
- 課題テーマをもう少し明確にしてもらおうと最初からフィットする。
- ○○システムに関するところはもう少しなくてもよい。
- もう少しディスカッションを突っ込んだものにした方がよい。
- テキストをもう少し活用すべきだったと思います。

- ○○教員とのジョイントはもう少し工夫して欲しい。
- もう少し、内容を工夫。
- もう少し自信をもって授業すべき。
- テキストの使っていない部分をもう少し活用（Eラーニング）した方がよいと思う。
- テキストをもう少し活用した方がよかったと思います。

キーワード「活用」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- Eラーニングの質疑応答をもっと活用するとよかったと思います。
- Eラーニングをもっと活用して欲しかった。
- Eラーニングをもう少し活用した方がよかった。
- テキストをもっと活用すべきであった。
- Eラーニングをもっと活用した方がよかった。
- Eラーニングを活用すべき。
- 具体的事例の活用を増やす。
- 実際の調査会社の事例をもっと活用して欲しい。
- テキストをもう少し活用すべきだったと思います。
- Eラーニングをもっと活用すべきであった。
- テキストをもっと活用すべきであった。
- Eラーニングを活用すべき。
- テキストの使っていない部分をもう少し活用（Eラーニング）した方がよいと思う。
- テキストをもう少し活用した方がよかったと思います。

キーワード「活用」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 職務と密接に関連しており実際に活用できる内容であった。

キーワード「時間」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- ディスカッションの時間が欲しかった。
- 人数が多すぎて、発表や講義の時間が十分に取れなかった点が残念です。
- 時間管理面。
- 時間の管理（タイムスケジュール）。
- 時間管理。
- 時間の配分が予定通りにいかないために、最後の方に教えるべき内容が、十分に時間がとれなく、わからない箇所があった。
- もっとトレーニングの時間があるとよい。
- ワーク時間不足。
- やはり、内容の量に対して時間が少なかった。
- 時間配分。

- 脱線すると時間がもったいない。
- ○○○○と○○分析にもう少し時間を使えるとよかったと思う。
- ○○の知識の取得に時間が多くさかれすぎている。
- ディスカッションの時間が少ない。
- 授業中、時間が隊滞留する。
- 時間オーバーの点。
- 時間通りに終わらない。
- グループワークの時間設定（もっと長い時間）。
- ディスカッションがどうしても時間不足。
- CUP 分析の時間を多くして欲しい。
- ケースに対してのあまり時間がとれなかった点。
- 時間管理、重複説明がしばしばあった。
- 授業の時間が短い点。
- 授業の時間配分。
- 時間管理。
- 教員（外部）の講義が内容に対して時間が足りなかった。
- ディスカッション時間不足。
- 時間数を多くすべき。
- 授業の終了時間が守られていなかった。
- 講義時間が大幅延長。
- 課題の提出までの時間が少なすぎた。

キーワード「時間」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 基本を時間かけていた。
- 時間管理がしっかりと守られていた。
- ○○を多く時間がとれた点。
- 時間をかけ、納得できる説明だった。
- ディスカッションの時間が多かったこと。
- プレゼンテーションより講義の時間を多くすべき。

キーワード「思う」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- ワードやパワーポイントの説明で一緒に進める方針をとった方がよいと思った。
- もう少しビジネスの場面で使える実用的な授業の方がよかったと思います。
- Eラーニングの質疑応答をもっと活用するとよかったと思います。
- 英語を使ってもよいかと思う。
- 演習問題集があると「慣れ」が早まってよいと思います。

- ○○にあまりふみ込まない方がよいと思う。
- 本来事後課題として出題されるべき問題が事前課題として出題されている様に思われる。
- CSR に関する内容をもっと入れた方がよいと思う。
- ○○○○の基礎知識のないものにはつらいと思います。
- 1日の授業の分量が多すぎると思う。
- このままでいいと思います。
- もっと課題やテストがあってよいと思う。
- 復習用に事後課題とエクササイズの模範回答を示した方がよいと思います。
- テキストをもう少し活用すべきだったと思います。
- テキストの使っていない部分をもう少し活用（Eラーニング）した方がよいと思う。
- テキストをもう少し活用した方がよかったと思います。

キーワード「思う」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 本の選び方はよかったと思った。
- 口頭の説明が丁寧で、わかりやすかったと思います。
- ○○の初心者には、わかりやすかったのではと思います。
- 私にとっては、基本が理解できたのでよかったと思う。
- 内容が理解しやすいような配慮がなされていたと思う。
- ポイントを絞った講義だと思います。
- 内容たっぷりであったと思う。
- 自分のプレゼンにおける欠点が明確になり今後活かしていきたいと思った点。
- ケースの選定がよかったと思う。参考になった。
- パワーポイント資料の他に、補助資料が用意されたのは効果的だったと思います。
- グループでの課題も面白くよかったと思う。

キーワード「多い」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- 課題が多少多かった。
- 人数が多すぎて、発表や講義の時間が十分に取れなかった点が残念です。
- 課題の量が多い。
- 個別のテーマが多く内容が浅かった。
- 少々課題の量が多い時があった。
- もう少し○○的なところを少なくして○○○的な部分を多くすればよかった。
- 課題の量が多いこと。
- ケースの量が多く印刷が大変だった。
- 自宅での印刷量が多かった点。
- デスカッションをもっと多く入れて欲しかった。

- 英文の課題が多すぎる。
- 教員が3名は多すぎる（内容が細切れになって理解しにくかった）。
- やさしいことは、やさしく、むずかしいことも、やさしく、逆が多かった。
- CUP 分析の時間を多くして欲しい。
- 1日の授業の分量が多すぎると思う。
- 資料に文字が多いためまとめてわかりやすくして欲しい。
- OHP の枚数が多く、説明が省略された。
- 計算の実習が多い方が理解しやすい。
- 英語の課題が多かった。
- 時間数を多くすべき。
- 課題が多過ぎる。
- 課題の量が多い。

キーワード「多い」を含む「評価点」の記述は以下のようである。

- 適切な文献を多数読むことができ、且つ必ずサマリを作成することが求められるので理解が深まりよかったです。
- 多才な教員陣。
- 非常に多くの気づくことがあった。
- 理論を多数提示している事。
- ○○の内容が多すぎる。
- ディスカッションが多く授業が楽しかった。
- 事前課題の量は適切だった事が多い。
- レポートのコメントを多く頂いた点。
- ディスカッションが多く、実務的な話を聞けた。
- 話し合いが多く、参加型であったこと。
- 実務に活かせる部分が多くあった。
- 学生に発表させる機会を多く作った。
- 会話を多く時間がとれた点。
- 資料は大学側で作成していただき助かった。(分量が多く各自打出しは大変)
- 身近な事例のケースを多くしてあった。
- 多くの○○○○ビジネスに係る外部の方の話し。
- 学外の教員が多い。
- 身近な話題が多く、理論を導入しやすかった。
- 企業事例が多かったこと。
- 参考図書が多い。

- ディスカッションの時間が多かったこと。

キーワード「内容」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- 時間の配分が予定通りにいかないために、最後の方に教えるべき内容が、十分に時間がとれなく、わからない箇所があった。
- 内容が大盛であり、2つに分割した方がよい。
- ディスカッションの内容と課題の内容が微妙にずれて答えにくかった点があったこと。
- 内容がやや単調であった。
- やはり、内容の量に対して時間が少なかった。
- 授業内容がわかりづらい。
- 個別のテーマが多く内容が浅かった。
- 理解した内容をどのように実践するのかつかめないこと。
- 教えるべき内容を少し足りなかった。
- 事前課題は講義内容を理解していないとできないので、講義後の事後課題とするべき。
- 教材の内容がわかりづらい。
- CSR に関する内容をもっと入れた方がよいと思う。
- 教員が3名は多すぎる（内容が細切れになって理解しにくかった）。
- M6～M7の内容、進め方。
- 内容がもりだくさん、経済と統計。
- ○○の知識、○○の知識と内容がもりだくさんすぎる。
- 授業内容で専門的すぎる点があった。
- 授業のテーマ、内容を考慮すると4モジュールでは不足である。
- 教員（外部）の講義が内容に対して時間が足りなかった。
- あまり授業の内容を教員が理解していないのではないか。
- もう少し、内容を工夫。
- 課題の内容が不明確で困ったことがあった。
- 内容があまり CSR に沿っていない。
- ○○教員の内容とうまくマッチしていなかった。別な科目として独立した方がいい。
- 1単位でなく2単位の授業をすべき内容である。

キーワード「内容」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 内容に一貫性がある。
- 職務と密接に関連しており実際に活用できる内容であった。
- 質疑によって内容は理解できたこと。
- ケースにより、内容の応用理解ができた。
- 内容は大枠で理解できた。

- 内容がわかり易かった。
- 授業の内容は理解できたこと。
- 学生の反応を見ながら講義の内容を組み合わせていた。
- 内容が理解しやすいような配慮がなされていたと思う。
- 内容もわかりやすく、課題も授業の理解をふかめるのに、効果的でした。
- 内容は理解しやすかった。
- 事前課題及び事後課題の内容及びタイミング。
- 事前・事後課題の内容。
- 授業の内容が非常に面白く、参考になった。
- 内容たっぷりであったと思う。
- 他では学べない内容であった。
- 参考テキストの内容を網羅的に学べたこと。
- これまでにはない心理学的内容。
- 学生の様子をみて授業内容を考えてくださったこと。
- 授業内容がわかりやすく工夫されていた。
- 授業内容がわかりやすかった点。
- 調査票を実際に使って実査するなど実践的な内容だった。
- テキストの内容。
- 授業の内容自体面白かった。

キーワード「課題」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- 課題が多少多かった。
- 課題の量が多い。
- 課題を直前に出すのはやめて欲しかった。
- 課題に対するフィードバック。
- 事前課題への評価が不明確。
- 課題の主旨を把握していないことがあったのもう少し説明が欲しかった。
- 事後課題のフィードバックがない。
- 事前より事後の方がよい。(課題)
- ディスカッションの内容と課題の内容が微妙にずれて答えにくかった点があったこと。
- 事前課題と結果が連動できない。
- 少々課題の量が多い時があった。
- 課題の量が多いこと。
- 英文の課題が多すぎる。
- 課題の答えが明示されない。

- 明確な解答の用意されていない課題を授業中にやるべきではないのではないか。
- 事前課題は講義内容を理解していないとできないので、講義後の事後課題とするべき。
- 事前課題（計算）が難しかった。
- 本来事後課題として出題されるべき問題が事前課題として出題されている様に思われる。
- レベルの違いと課題の評価。
- 課題の解答が欲しい。
- 課題の締切りをわすれる時があるので E ラーニングでアナウンスして欲しい。
- 事前課題より事後課題の方がよい。
- 気を付けるポイントを課題の前に教えていただきたいかった。
- 最終モジュールはもったいない。ちゃんと普通の授業と課題があってもいい。
- 事後課題のボリュームが大きすぎる。
- 課題が重かった点。
- 課題テーマをもう少し明確にしてもらおうと最初からフィットする。
- 課題についての直接的な細かいフィードバックがない、(あるとの指示があったが)主に〇〇論。
- 課題提出 BOX の作成が、遅い。
- もっと課題やテストがあってよいと思う。
- 課題に対する個別フィードバックなし。
- 復習用に事後課題とエクササイズの模範回答を示した方がよいと思います。
- 事前課題について添削があった方がよいのでは。
- 事前課題の分量はやや少なく独自性を発揮しにくい。
- 英語の課題が多かった。
- 課題の内容が不明確で困ったことがあった。
- 課題のフィードバックが欲しい。
- 試験は事後課題にして、その分講義にして欲しい。
- 課題を講義で再びプレゼンテーションさせるのは、意味がない。
- 事後課題を出して理解を深める工夫をすべきであった。
- ディスカッションを活発にする為に事前課題のテーマをもっと具体化すべき。
- 課題に対するコメントも若干読みにくいときがありました。
- 課題が多過ぎる。
- 課題の提出までの時間が少なすぎた。
- 課題の量が多い。

キーワード「課題」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 事後課題とエクササイズでフィードバックがあった点。

- 事前課題資料。
- 事前課題の発表。
- 課題を丁寧に読んでくださったこと。
- 課題に対してのコメントが丁寧。
- 課題へのコメントが丁寧だった。
- 課題のフィードバックが丁寧に行われていたこと。
- 課題の量が適切であった。
- 課題のフィードバックが適切だった。
- 課題のフィードバックがあった点。
- 課題の量が適当であった。
- 事前課題→ディスカッション→事後課題の流れ。
- 課題の量が適切であった。
- 課題のフィードバックが丁寧。
- 課題が楽なところ。
- 事後課題に対する対応が丁寧。
- 事前課題の量は適切だった事が多い。
- 課題のフィードバックが丁寧。
- 内容もわかりやすく、課題も授業の理解をふかめるのに、効果的でした。
- 事前課題及び事後課題の内容及びタイミング。
- 事前・事後課題の内容。
- 課題が実際にありそうなもので、よい課題だった（ただ一人でとりくむには辛いですが）。
- 学生の事前課題発表。
- 事前事後課題を授業で発表し、ディスカッションする点。
- 授業と課題の設定。
- 課題の量が適切。
- 北海道を拠点とするビジネス展開の課題について理解を深めることができた。
- 課題（事前、事後）とエクササイズの設定の目的がハッキリしていた。
- 課題が過大であること。
- 事後課題に対してキチンとコメントを入れて返却して下さった事。
- 事前課題のテーマはわかりやすかった。
- 毎回わかりやすく説明して下さったが課題に追われてあまり理解できなかったのが残念。
- グループでの課題も面白くよかったと思う。
- 課題を何項目から選べる点。
- 課題が身近なテーマと一体化していた。

- 適当な量の課題。
- 課題のフィードバック。
- 出される課題の量が適量。
- 課題提出期間が適切。
- 課題の量が適切であったこと。
- 事前課題だけに特化してくれたこと。
- 事後課題、エクササイズ共に授業の進捗にマッチしていた。
- 課題の適切さ。

キーワード「授業」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- 授業の効果自体が疑問。
- もう少しビジネスの場面で使える実用的な授業の方がよかったと思います。
- 授業の目的がはっきりしない。
- 授業であまり理論に触れていなかったが理論がわからないと自分としては納得できない所がある。
- 何がテーマか何を学ぶかが不明確な時があり授業意図をくみとれなかったことがある。
- ガイダンスがなければ授業意図がわからない。
- 授業内容がわかりづらい。
- ○○教員の授業は余りシラバスに沿っていない感じを受けた。
- 明確な解答の用意されていない課題を授業中にやるべきではないのではないか。
- 授業中、時間が滞りすぎる。
- ○○○○関係は授業の組立てがよくない。
- 3人の教員がバラバラの授業をしている。
- 最終モジュールはもったいない。ちゃんと普通の授業と課題があってもいい。
- 後半は授業展開が早すぎてついていけません。
- 1年前期に経済の概論的授業が必要。
- モジュールによって授業のスピードが全然異なる点があった。
- 1日の授業の分量が多すぎると思う。
- 授業タイムスケジュール。
- 授業の時間が短い点。
- 授業内容で専門的すぎる点があった。
- 授業の時間配分。
- 授業のテーマ、内容を考慮すると4モジュールでは不足である。
- 授業のフィードバックが少ない。
- エクササイズが授業から少し飛躍しているように感じる部分があった。

- ○○と○○○を1つの授業（半年）で教えるのに無理があるのではないか。
- あまり授業の内容を教員が理解していないのではないか。
- もう少し自信をもって授業すべき。
- 授業意図が伝わってない場合もあった。
- ○○学だけの授業があるとよいです。
- 授業の終了時間が守られていなかった。
- 1単位でなく2単位の授業をすべき内容である。
- できれば、パワーポイントを授業前にUPして欲しい。

キーワード「授業」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 学生の理解度を確認しながら授業の方向性を修正していた。
- 授業の最初に前回モジュールのポイントの再確認があり、頭が整理できた。
- 全くの初心者としても何とか授業についていけた。
- 教員の授業準備が非常になされていた点。
- 理解度に応じて、授業の進め方を変えて、わかりやすかった。
- フランクな授業。
- わかりやすい資料。授業でした。
- 学生の反応を確かめながら授業を行っていた。
- ディスカッションが多く授業が楽しかった。
- 授業の内容は理解できたこと。
- ○○教員の授業。
- OBSの授業としては異色であった。
- 現実のケースを取り込んだ授業は面白く興味深かった。
- ○○教員の授業はディスカッションの雰囲気がよい。
- わかりやすい授業構成。
- 内容もわかりやすく、課題も授業の理解をふかめるのに、効果的でした。
- 基本的なところに絞って授業が行なわれた事。
- わかりやすい授業でした。
- 素人にもわかりやすい授業でした。
- 前期の統計の授業が理解できる。
- 授業の内容が非常に面白く、参考になった。
- 事前事後課題を授業で発表し、ディスカッションする点。
- 授業と課題の設定。
- 学生に意見を求め、授業に参加しやすい。
- 授業の構成、目的が明確だった。

- 授業はわかりやすかった。
- テキストに添った授業で一貫性があった。
- 少数の授業であったため、自分の疑問等が、伝わり、問題解決になった。
- 学生の理解度に応じて、授業の進め方をコントロールしてくれた。
- 事前準備が良くされている授業であると感じました。
- 学生の様子をみて授業内容を考えてくださったこと。
- 授業内容がわかりやすく工夫されていた。
- 授業内容がわかりやすかった点。
- 授業で結論が出ない点を後日 up する。
- 授業開始以前の資料配付（ソルバー LINDO）
- 授業＋飲会で完成する。
- 法律を1度も勉強していなくてもとても理解しやすく有意義な授業だと感じました。
- 授業と関連するケースが取りあげられていてとてもよかった。
- 楽しい授業であった。
- 授業の内容自体面白かった。
- 補習。予習の授業があった点。
- ユーモアをまじえて、楽しく授業を受けることができた。
- テーマが授業ごとに絞られていた点。
- ○○法変更に伴い、ホットを授業があった。
- 授業のテーマ自体興味深かった。
- 楽しい授業のための工夫がされていた点。
- 事後課題、エクササイズ共に授業の進捗にマッチしていた。

キーワード「良い（よい）」を含む「改善点」の記述は以下のようである。

- 個々のレベルにあわせた方がよいように感じます。
- ワードやパワーポイントの説明で一緒に進める方針をとった方がよいと思った。
- もっとトレーニングの時間があるとよい。
- 内容が大盛であり、2つに分割した方がよい。
- 事前より事後の方がよい。（課題）
- 英語を使ってもよいかと思う。
- 演習問題集があると「慣れ」が早まってよいと思います。
- 簿記にあまりふみ込まない方がよいと思う。
- CSR に関する内容をもっと入れた方がよいと思う。
- 事前課題より事後課題の方がよい。
- ○○学の基礎は前期に独立させたほうがよい。

- 理論の話がもっとあってよい。ドラッカーについてはもっと学んでおくべきだった。
- 情報システムに関するところはもう少しなくてもよい。
- もう少しディスカッションを突っ込んだものにした方がよい。
- もっと課題やテストがあってよいと思う。
- 復習用に事後課題とエクササイズの模範回答を示した方がよいと思います。
- 事前課題について添削があった方がよいのでは。
- 使えることを目的とするとよい。
- テキストの使っていない部分をもう少し活用（Eラーニング）した方がよいと思う。
- 教員は一人でよい。
- ○○関係の法について何らかの方法であつた方がよいのでは？

キーワード「良い（よい）」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 迫力があってよい。
- 今後の産業発展においてよいテーマだった。
- 知らないことがどんどんわかる時が心地よい。
- 新しい角度からの視点がよい。
- 具体的に手法を用いたのがよい。
- ○○教員の授業はディスカッションの雰囲気がい。
- ディスカッションの運営がよい。
- 課題が実際にありそうなもので、よい課題だった（ただ一人でとりくむには辛いですが）。
- 厳しさがあってよい。
- 細かい説明がよい。
- 現地学習もあり、よい体験ができた。
- ○○を学び直すよい機会だった。
- 過去の○○○○と関連しているのでよい。

キーワード「ディスカッション」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- ディスカッションの時間が欲しかった。
- ディスカッションの内容と課題の内容が微妙にずれて答えにくかった点があったこと。
- ディスカッションの方法は検討が必要かも。
- ディスカッションを体系的にとり入れるべき。
- ディスカッションの時間が少ない。
- ディスカッションをもっと多く入れて欲しかった。
- ディスカッションのまとめをもう少し判りやすくしてほしいです。
- ディスカッションがどうしても時間不足。
- 教科書が英語なので、理解が浅くディスカッションが浅い。

- もう少しディスカッションを深めて欲しい。
- ディスカッション特定の人が話していた。
- もう少しディスカッションを突っ込んだものにした方がよい。
- ディスカッションで、時々、軸足が動いている。
- ディスカッション時間不足。
- ディスカッションを増やして欲しい。
- ディスカッション（プレゼンテーション発表）の存在意義が不明確。
- ディスカッションを活発にする為に事前課題のテーマをもっと具体化すべき。

キーワード「ディスカッション」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- ディスカッションを適切に取り入れていた事。
- グループディスカッション。
- 自由な雰囲気ですみ形式のディスカッションや質問ができた。
- ディスカッションは有益であった。
- 出来る限りミニケースを用いてディスカッションをしていた。
- ディスカッション。
- 事前課題→ディスカッション→事後課題の流れ。
- ディスカッションが多く授業が楽しかった。
- テーマ毎にディスカッションが設定されていた。
- 活発なディスカッション。
- OF、DF のディスカッション。
- ケースディスカッションが充実していてよかったです。
- ディスカッションの運営がよい。
- ディスカッション。
- ディスカッション。
- ディスカッションのフォローがよかった。
- グループでの発表ではなく個人の意見に対してディスカッションができたこと。
- ディスカッションが多く、実務的な話を聞いた。
- 事前事後課題を授業で発表し、ディスカッションする点。
- ディスカッションのテーマが面白かった。
- ディスカッションが手短かでよかった。
- ディスカッションも工夫されていた。
- ディスカッションの運営が適切。
- 毎回のディスカッション。
- ディスカッションの時間が多かったこと。

- 適切なディスカッションテーマ。

キーワード「説明」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- ワードやパワーポイントの説明で一緒に進める方針をとった方がよいと思った。
- ダミーをもう少し説明して欲しかった。
- 時おり、説明のスピードが早すぎてついていけないときがあった。
- 課題の主旨を把握していないことがあったのでもう少し説明が欲しかった。
- ○○の説明の位置付けが不明。
- アンケート手法がはっきり説明がない。
- エクセルの使い方などももう少し具体的説明が欲しかった。
- 仕方がないかもしれませんがRの画面を使った説明は字が小さく見にくかったです。
- 時間管理、重複説明がしばしばあった。
- OHPの枚数が多く、説明が省略された。
- 具体的な事例（会社）ケースを用いて説明して欲しい。
- わかりやすく説明して欲しい。

キーワード「説明」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 説明がわかりやすかった。
- 説明がわかりやすかった。
- ○○○○の基礎理論をわかりやすく説明していただいた。
- 論理的な説明。
- 口頭の説明が丁寧で、わかりやすかったと思います。
- 説明は丁寧でわかりやすかったです。
- わかりやすい説明でした。
- 新しい見方を知れたのは良かったです、教員がいちいち解釈不足で説明不足であった点残念でした。
- 説明が丁寧であった。
- 教員の説明。
- わかりやすい説明。
- 質問に対して具体的に説明がある。
- 説明はわかりやすい。
- 時間をかけ、納得できる説明だった。
- 身近な事例で説明していた。
- 毎回わかりやすく説明してくださったが課題に追われてあまり理解できなかったのが残念。
- 細かい説明がよい。
- 情報の非対称の説明。

キーワード「ケース」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- ケースの量が多く印刷が大変だった。
- 例やケースを用いて実践での利用やイメージがあるとわかりやすい。
- ケースの選定。
- ケースが欲しかった。
- ケースに対してのあまり時間がとれなかった点。
- サイコロでのケースが、応用しづらいかも。
- 具体的な事例（会社）ケースを用いて説明して欲しい。

キーワード「ケース」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 出来る限りミニケースを用いてディスカッションをしていた。
- ケースにより、内容の応用理解ができた。
- 現実のケースを取り込んだ授業は面白く興味深かった。
- 理論とケースを織り混ぜていた点。
- ケースディスカッションが充実していてよかったです。
- 様々なケースで企業の成功要因がわかったこと。
- ケースのよさ（教員の選択）。
- ケースのポイントをまとめている所。
- ケースを中心にやっていたので面白い。
- 実際のロシアビジネスのケースに触れることができた。
- ○○運営のケーススタディーが豊富だった事。
- 身近な事例のケースを多くしてあった。
- ケース選択の適切さ。
- ケースの選定がよかったと思う。参考になった。
- 授業と関連するケースが取りあげられていてとてもよかった。
- 事例（ケース）が面白かった。

キーワード「教員」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- ○○教員の授業は余りシラバスに沿っていない感じを受けた。
- 教員が3名は多すぎる（内容が細切れになって理解しにくかった）。
- 教員によって質にばらつきがあったこと。
- 2人の教員の講義。
- 2人の教員だとやり方も2通りで対処しづらい。
- ○○教員の声が小さくて聞きとれなかった。
- ○○教員の教材。
- 進行が教員のペースで進み、理解しづらい点があった。

- 教員による違いが大きすぎ。
- 教員（外部）の講義が内容に対して時間が足りなかった。
- ○○教員とのジョイントはもう少し工夫して欲しい。
- あまり授業の内容を教員が理解していないのではないか。
- ○○教員のパワーポイントは小さすぎて読めなかった。
- 教員は一人でよい。
- ○○教員の内容とうまくマッチしていなかった。別な科目として独立した方がいい。
- ○○教員はパワーポイントの使い方勉強すべき。

キーワード「教員」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 教員の解説が丁寧だったこと。
- 教員の授業準備が非常になされていた点。
- ○○教員が毎回参加していただけたこと。
- 現役のトップレベル技術者が教員。
- 現役の外部教員。
- 多才な教員陣。
- ○○、○○両教員の他に○○、○○教員が加わったこと。
- 教員の熱心さ。
- 教員の熱心さが伝わって来ました。
- 大学教員にありがちな、高い所から見下すような所がなく、誠実に講義にのぞんでいる点。
- 教員の熱心さ。
- 教員の教え方。
- 教員の熱心さ。
- 教員の熱意が感じられた。
- ○○教員の授業。
- 教員に熱意が感じられた。
- ○○教員のパートは、实际的でよかった。
- ○○システム（○○教員）の資料。
- ○○教員の資料がわかりやすい。
- ケースのよさ（教員の選択）。
- 教員の話し方が丁寧でよかった。
- 教員の熱意。
- ○○教員に○○○○の入門をやさしく導いていただいた。
- ○○教員が丁寧に教えてくれた点。
- 教員の熱意。

- 教員の説明。
- 教員陣からの講義と学生のプレゼンテーションのバランスが適切。
- ○○教員はわかりやすかった。
- 外部教員を使ったこと。
- 教員陣のレクチャー。
- 学外の教員が多い。
- 金融システム（○○教員）のレクチャー。
- 後で読むと、○○教員のテキスト細かく書いていて勉強になる。
- 教員のキャラクター。
- ○○教員のパワーポイント（見やすい）。
- 教員の指導レベルが高い点。
- 教員の発音。
- 教員の意気込み。
- 教員の熱意が伝わった。
- 教員の独自の見解が面白い。
- 教員の話が興味深い。

キーワード「理解」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- 計算事例が少なく理解が浅い。
- 理解した内容をどのように実践するのかつかめないこと。
- 前半は、本当に理解不能です。
- 事前課題は講義内容を理解していないとできないので、講義後の事後課題とするべき。
- イノベーションが理論的によく理解できませんでした。個別テーマのよせ集めみたいな感じ
です。
- M 6、M 7 は、理解に苦しみました。
- 学生のレベルで理解に大きな違いがあることに配慮して欲しい。
- M 6、7 早すぎて理解するのに苦しんだ。
- 教科書が英語なので、理解が浅くディスカッションが浅い。
- 進行が教員のペースで進み、理解しづらい点があった。
- あまり授業の内容を教員が理解していないのではないか。
- 計算の実習が多い方が理解しやすい。
- 一体何を我々に伝えようとしたのでしょうか。よく理解できません。
- 事後課題を出して理解を深める工夫をすべきであった。

キーワード「理解」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 学生の理解度を確認しながら授業の方向性を修正していた。

- 理解度に応じて、授業の進め方を変えて、わかりやすかった。
- 適切な文献を多数読むことができ、且つ必ずサマリを作成することが求められるので理解が深まりよかったです。
- 質疑によって内容は理解できたこと。
- ケースにより、内容の応用理解ができた。
- ひと通り、〇〇全般を理解できる。
- 内容は大枠で理解できた。
- 体系的に理解。
- 授業の内容は理解できたこと。
- 私にとっては、基本が理解できたのでよかったと思う。
- 〇〇〇リサーチについて体系的に理解することができた。
- 〇〇システムについて理解できた。
- 内容が理解しやすいような配慮がなされていたと思う。
- 具体的手法についても理解できた。
- 内容もわかりやすく、課題も授業の理解をふかめるのに、効果的でした。
- 内容は理解しやすかった。
- 単純化した形で考え方、分析方法を（〇〇上の）理解できた。
- 前期の〇〇の授業が理解できる。
- 〇〇学の概観が理解できたこと。
- エコノミストがどのような指標を使って分析しているのかが理解できた。
- 〇〇判断の材料・手法の理解が深まった。
- 〇〇データの分析の方法が理解できた。
- 〇〇法、〇〇法の骨組みが理解できた。
- 教材を効果的に使用したことにより理解が深まった。
- 北海道を拠点とするビジネス展開の課題について理解を深めることができた。
- 北海道の特性を良く理解できた。
- 学生の理解度に応じて、授業の進め方をコントロールしてくれた。
- ロジックが理解しやすかった。
- ワークを取り入れながらで、理解しやすい。
- あまり、日本では考えないパターンがあり、理解が広まった。
- 毎回わかりやすく説明してくださったが課題に追われてあまり理解できなかったのが残念。
- 〇〇の仕組が理解できた。
- CS についての基本を理解できた。
- さわりくらいは理解できた気がする。

- 法律を1度も勉強していなくてもとても理解しやすく有意義な授業だと感じました。
- 民族の違いを理解できた。
- 業績評価の難しさが理解できた点。
- 本を読むとある程度理解できる。
- 経営者の仕事が理解できた。
- 業績を上げるための考え方（アメーバ経営とか）理解できた。
- 企業の価値が理解できた。
- ○○○と企業の○戦略の結びつきが理解できた。

キーワード「分かる（わかる）」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- テキストの文章がわかりにくい。
- 授業であまり理論に触れていなかったが理論がわからないと自分としては納得できない所がある。
- 時間の配分が予定通りにいかないために、最後の方に教えるべき内容が、十分に時間がとれなく、わからない箇所があった。
- ガイダンスがなければ授業意図がわからない。
- 授業内容がわかりづらい。
- わからない事がどんどん増えるのはストレスフルです。
- 例やケースを用いて実践での利用やイメージがあるとわかりやすい。
- 教材の内容がわかりづらい。
- 二人の教師の関連性がわかりにくい。
- パワーポイントの資料が少しわかりにくかったです。
- 関連づける点がいまいちわからないことがあった。
- 後から読んでわかるようなスライドにしてもらいたいです。
- レポートの書き方が今いちよくわからない。
- ○○を学んでいない人でもわかるようなレベル設定。
- テストの出題方法（質問の意図をわかりやすく）。
- 資料に文字が多いためまとめてわかりやすくして欲しい。
- 後で読んでもわからない。
- わかりやすく説明して欲しい。

キーワード「分かる（わかる）」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- データの見方がある程度わかった気がする。
- わかりやすかった。
- 理解度に応じて、授業の進め方を変えて、わかりやすかった。
- 説明がわかりやすかった。

- 説明がわかりやすかった。
- ○○戦略の基礎理論をわかりやすく説明していただいた。
- 理論が整理されていたのでわかりやすかった。
- わかりやすい資料、授業でした。
- わかりやすかった。
- 口頭の説明が丁寧で、わかりやすかったと思います。
- 知らないことがどんどんわかる時が心地よい。
- ○○の初心者がここまでわかった。
- 説明は丁寧でわかりやすかったです。
- 内容がわかり易かった。
- わかりやすい説明でした。
- わかりやすい。
- ○○○○の基本がわかった。
- 上場についての仕組みがわかった。
- わからないことがわかるようになった点。
- 調査結果の解説がわかりやすかった。
- ○○○○の基本がわかった。
- 様々なケースで企業の成功要因がわかったこと。
- わかりやすい授業構成。
- 全体的にわかりやすい。
- 体系図がわかりやすかった。
- 内容もわかりやすく、課題も授業の理解をふかめるのに、効果的でした。
- 戦略的評価が少〜しわかった。
- 非常にわかりやすかった。
- わかりやすい授業でした。
- 素人にもわかりやすい授業でした。
- ○○○○に関する細かな概念がよくわかった。
- わかりやすかった。
- 授業はわかりやすかった。
- 教え方がわかりやすかった。
- 北わかりやすい説明。
- スライドがわかりやすく、工夫されていた。
- 話し方もわかりやすく、聞きとりやすかったです。
- 事前課題のテーマはわかりやすかった。

- 質問を更にわかりやすくしてくれた。
- パワーポイントがわかりやすい。
- 説明はわかりやすい。
- 授業内容がわかりやすく工夫されていた。
- 授業内容がわかりやすかった点。
- シラバスの組立がわかりやすい。
- 毎回わかりやすく説明してくださったが課題に追われてあまり理解できなかったのが残念。
- 具体的資本政策がわかった。
- わかりやすいパワーポイント資料。
- ラストのまとめで、全体の流れがわかった。
- 事例が具体的でわかりやすかった。
- 配布資料がわかりやすい。
- 調達の構造がわかった。
- パワーポイント資料がわかりやすい。
- 人間関係の深い部分がわかった。

キーワード「やすい」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- E ラーニングに事前に、レジュメを出して予習をしやすくして欲しい。
- パワーポイントの配色、コントラストを改善し見やすくして欲しい。
- 例やケースを用いて実践での利用やイメージがあるとわかりやすい。
- 具体的事例の活用を増やす。
- ディスカッションのまとめをもう少し判りやすくして欲しいです。
- 後半モジュールのレジュメを読みやすく。
- テストの出題方法（質問の意図をわかりやすく）。
- コマ数を増やすべき。
- 資料に文字が多いためまとめてわかりやすくして欲しい。
- 計算の実習が多い方が理解しやすい。
- わかりやすく説明して欲しい。

キーワード「やすい」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- ワードやエクセルの使い方について判りやすく教えていただきました。
- わかりやすかった。
- 理解度に応じて、授業の進め方を変えて、わかりやすかった。
- 説明がわかりやすかった。
- 説明がわかりやすかった。
- 理論が整理されていたのでわかりやすかった。

- わかりやすい資料、授業でした。
- わかりやすかった。
- 口頭の説明が丁寧で、わかりやすかったと思います。
- OHP 配色、フォントサイズ 見やすかった。
- 説明は丁寧でわかりやすかったです。
- 話が聞きやすかった。
- わかりやすい説明でした。
- わかりやすい。
- 配布資料（見やすかった）。
- 調査結果の解説がわかりやすかった。
- 内容が理解しやすいような配慮がなされていたと思う。
- 斉藤教員の資料がわかりやすい。
- わかりやすい授業構成。
- 全体的にわかりやすい。
- 体系図がわかりやすかった。
- 内容もわかりやすく、課題も授業の理解をふかめるのに、効果的でした。
- 内容は理解しやすかった。
- 非常にわかりやすかった。
- わかりやすい授業でした。
- 素人にもわかりやすい授業でした。
- わかりやすかった。
- 学生に意見を求め、授業に参加しやすい。
- 梶原教員はわかりやすかった。
- 授業はわかりやすかった。
- 教え方がわかりやすかった。
- わかりやすい説明。
- スライドがわかりやすく、工夫されていた。
- 話し方もわかりやすく、聞きとりやすかったです。
- ロジックが理解しやすかった。
- ワークを取り入れながらで、理解しやすい。
- 事前課題のテーマはわかりやすかった。
- 質問を更にわかりやすくしてくれた。
- パワーポイントがわかりやすい。
- 説明はわかりやすい。

- 授業内容がわかりやすく工夫されていた。
- 身近な話題が多く、理論を導入しやすかった。
- 身に付きやすかった。
- 授業内容がわかりやすかった点。
- シラバスの組立がわかりやすい。
- わかりやすいパワーポイント資料。
- 事例が具体的でわかりやすかった。
- 配布資料がわかりやすい。
- ハンドアウトの見やすさ
- パワーポイント資料がわかりやすい。
- パワーポイントの見やすさ。

キーワード「できる」を含む「改善点」の記述は以下のようなものである。

- 授業であまり理論に触れていなかったが理論がわからないと自分としては納得できない所がある。
- 事前課題と結果が連動できない。
- 事前課題は講義内容を理解していないとできないので、講義後の事後課題とするべき。
- イノベーションが理論的によく理解できませんでした。個別テーマのよせ集めみたいな感じです。
- もう少し早めに資料を UP していただければより効果的に予習できる？
- 一体何を我々に伝えようとしたのでしょうか。よく理解できません。
- できれば、パワーポイントを授業前に UP して欲しい。

キーワード「できる」を含む「評価点」の記述は以下のようなものである。

- 基本的なエクセルのツール（グラフ、ヒストグラム 回帰分析）をマスターできた。
- 授業の最初に前回モジュールのポイントの再確認があり、頭が整理できた。
- ○○分析を強制的にせよ学習できた。
- 職務と密接に関連しており実際に活用できる内容であった。
- 良好なコミュニケーションを行うための手法は今後、役に立つと期待できる。
- 質疑によって内容は理解できたこと。
- ケースにより、内容の応用理解ができた。
- 理論を修得できた。
- ひと通り、会計全般を理解できる。
- 内容は大枠で理解できた。
- 授業の内容は理解できたこと。
- 私にとっては、基本が理解できたのでよかったと思う。

- 前半では、深い知識を吸収できた。
- 企業の分析ができた。
- 自分の職務との関連において金融システムについて見直すことができた。
- 具体的手法についても理解できた。
- パターンで、計算できるようになった（素人が）。
- 新しい知識の習得ができた。
- 単純化した形で考え方、分析方法を（会計上の）理解できた。
- 興味を持って学習できた点。
- ○○学のスタート台に立つことができました。
- 世界的企業の最新事例を学ぶことができた点。
- グループでの発表ではなく個人の意見に対してディスカッションができたこと。
- 実際のロシアビジネスのケースに触れることができた。
- 業務プロセス分析の具体的手法を身につけることができた。
- 北海道が抱える問題点が俯瞰できた。
- 北海道を拠点とするビジネス展開の課題について理解を深めることができた。
- 北海道の特性を良く理解できた。
- エクセルも同時に学習できた点。
- 理論を修得できたこと。
- 後で振りかえる事ができるパワーポイントでした。
- 時間をかけ、納得できる説明だった。
- 学生全員が発表できた。
- ファイナンスの仕組が理解できた。
- ファイナンスの復習ができた。
- さわりくらは理解できた気がする。
- 難しい問題に立ち向う勇気ができました。
- 実際に経営を行っている人の話を聞くことができたこと。
- 現地学習もあり、よい体験ができた。
- 復習できる状況が用意されていた。
- ユーモアをまじえて、楽しく授業を受けることができた。
- 監査法人事務所の見学ができた。
- 本を読むとある程度理解できる。
- 経営者の仕事が理解できた。
- 英語の勉強ができた。
- 企業の価値が理解できた。

- 北海道経済の分析手法を学ぶことができた。

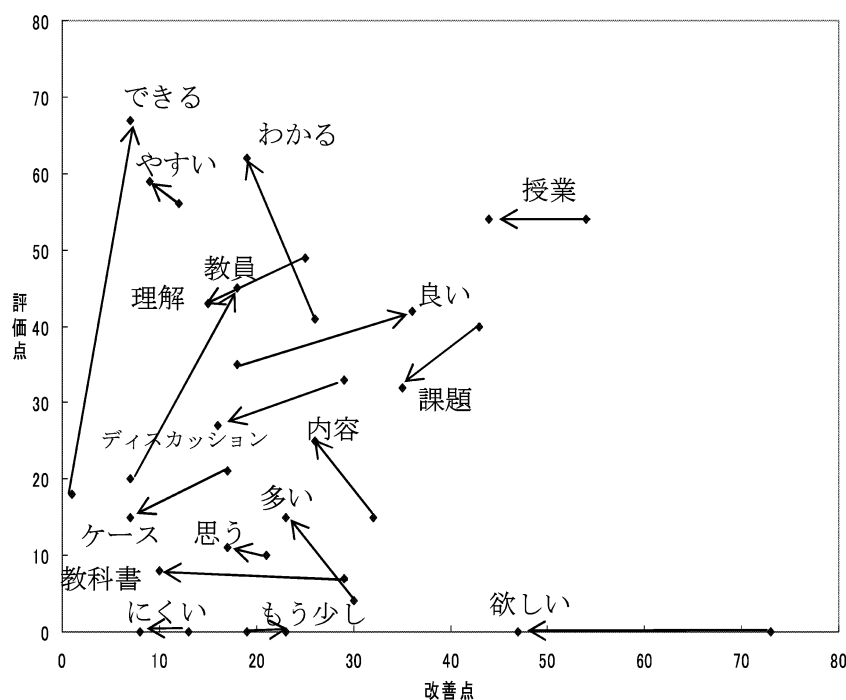


図 5-2 平成 16 年度と平成 17 年度の比較

平成 16 年度の「自由記述欄」の評価結果と比較するために、平成 16 年度に取り上げたキーワードが平成 17 年度ではどのように変化しているかを調べる。取り上げるキーワードは「できる」「わかる」「やすい」「教員」「授業」「理解」「良い」「課題」「内容」「ディスカッション」「ケース」「多い」「思う」「教科書」「にくい」「もう少し」「欲しい」である。これらのキーワードの変化を図 5-2 に示す。

「わかる」「やすい」「内容」「多い」「思う」「教科書」は左上に推移している。このことは、これらのキーワードが「評価点」で用いられる頻度が多くなっている一方で「改善点」で用いられる頻度が少なくなっていることを示しており、平成 16 年度に比べてこれらのキーワードが評価する意味で用いられていることがわかる。「できる」「教員」「良い」は右上に推移している。これらのキーワードは「評価点」で用いられる頻度が多くなると同時に「改善点」で用いられる頻度も多くなっている。これらは、「改善点」の出現頻度よりも「評価点」の出現頻度のほうが多ければ矢線の傾きが大きくなり、より評価されているといえる。「理解」「課題」「ディスカッション」「ケース」は左下に推移している。これらのキーワードは「評価点」と「改善点」での出現頻度がともに減少していることを示している。この場合、矢線の傾きは小さいほど「評価点」での出現頻度よりも「改善点」での出現頻度のほうが多い、ということになる。「欲しい」「にくい」「授業」は左方向に、「もう少し」は右方向に推移している。これらは「評価点」の出現頻度がかわらないものの「改善点」の出現頻度が増減しているもので、特に「欲しい」の「改善点」での出現頻度が大きく減少している。一方、「もう少し」は「改善点」での出現頻度が若干増加している。これは「～して欲しい」という積極的な要求が減少する一方で、「もう少し～」という少し遠慮がちな要求が増えている、ということになるであろう。

5.2.2 成績評価

(1) 履修者数と単位取得者数

平成 17 年度開講科目に履修登録した学生数と単位取得者数を表 5-8 に示す。基本科目では履修登録はしたものの、勤務の都合等で学期途中で休学した学生が履修登録者数に含まれているので、実際に受講した学生数と一致していないことに注意する必要がある。

表 5-8 各科目の履修者数と単位取得者数

	基 本 科 目						
	経営戦略	マーケティングマネジメント	組織と人的資源管理	コーポレートファイナンス	企業会計の基礎	調査研究とデータ解析の方法	情報の処理と活用
単位取得者数	3 5	3 7	3 8	3 6	3 6	3 5	3 5
履修者数	3 5	3 7	3 9	3 7	3 7	3 6	3 6
	基 礎 科 目						
	マーケティングの総論と分論	事業革新と企業戦略	企業の社会的責任経営倫理	顧客満足経営	会計情報と経営分析	経営者の経営・業績分析	国際経営
単位取得者数	2 1	3 2	1 5	3 1	2 7	2 2	1 4
履修者数	2 4	3 2	1 7	3 1	2 9	2 6	1 4
	基 礎 科 目			発 展 科 目			
	組織的意思決定とIT	企業財務と税務戦略	生産管理	ベンチャー起業論	知的財産の評価と活用戦略	ビジネス英語の実務	技術と事業革新
単位取得者数	1 5	1 0	6	1 0	1 2	1 2	1 1
履修者数	1 6	1 1	7	1 1	1 4	1 2	1 1
	発 展 科 目						
	国際取引実務	起業と法	市場調査法	金融システムと企業発展	財務会計とIR戦略	環境と経営	予算管理と業績評価
単位取得者数	1	9	1 3	1 6	8	2	1 3
履修者数	3	1 1	1 4	1 9	9	2	1 3
	発 展 科 目						
	組織運営のためのシステム構築法	パブリックマネジメント	上級ビジネス英語	北海道経済論	北東アジア研究	ライフサイエンスビジネス創造	
単位取得者数	7	6	2	1 0	7	1 1	
履修者数	7	7	2	1 0	7	1 1	
	実 践 科 目						
	ケーススタディⅠ	ビジネスプランⅠ	ケーススタディⅡ	ビジネスプランⅡ	ケーススタディⅢ	ビジネスプランⅢ	
単位取得者数	3 6	3 6	2 9	3 1	1 3	1 3	
履修者数	3 7	3 7	3 1	3 1	1 3	1 3	
	実 践 科 目						
	プロジェクト演習	インターンシップ	リサーチワークショップ				
単位取得者数	4	2	3 0				
履修者数	4	2	3 0				

(2) 取得単位数と GPA

表 5-8 を見る限りでは多くの学生が単位を取得しており、本専攻の学習に問題を抱えている学生はいないように見える。しかし個々の学生について GPA を計算すると異なった状況が見えてくる。ここで GPA は式(1)で計算されるもので、グレードポイント (GP) は表 5-9 のように定めている。

表 5-9 成績表示及び成績評価基準

評価	成績評価基準	G P	評 価 内 容	区分
秀	100点～90点	4	授業の目的・内容の理解が特に優れている	合格
優	89点～80点	3	授業の目的・内容が深く広く理解できている	
良	79点～70点	2	授業の目的・内容が十分理解できている	
可	69点～60点	1	授業の目的・内容が概ね理解できている	
不可	59点以下	0	授業の目的・内容の理解が不十分である	不合格
認	単位認定科目	—	他大学等で修得した科目を本専攻の単位として認定したことを表す	対象外

$$GPA = \frac{(GP \times \text{修得単位数}) \text{ の合計}}{\text{総履修登録単位数}} \dots\dots\dots(1)$$

式(1)にしたがって GPA を計算しグラフ化したものが図 5-3、図 5-4 である。図 5-3 は 2 年次生のもので、左図は 2005 年度の GPA であり、右図は 2004 年度と 2005 年度の 2 年間を通した GPA である。図 5-4 は、1 年次生の GPA である。

本専攻としては社会に対して修了生の質の保証をするという観点から GPA が 2.0 以下の学生を修了させないようにしなければならないが、2 名の修了生の GPA が 2.0 以下である。現行の制度ではたとえ成績が不振であっても所定の単位さえ取得すれば修了できるので、成績不振を理由に修了の認定をしない、あるいは退学処分にする、ということとはできない。現行制度のもとでは GPA が 2.0 以下の学生に対して修了時には GPA が 2.0 以上になるように厳格な履修指導を行う必要がある。

1 年次生は、図 5-4 のように GPA が 2.0 以下の学生はいない(最低の GPA は 2.07 であった)。前期では 2.0 以下の学生は 1 名であったが、通年の GPA ではこの学生は 2.0 以上になっている。

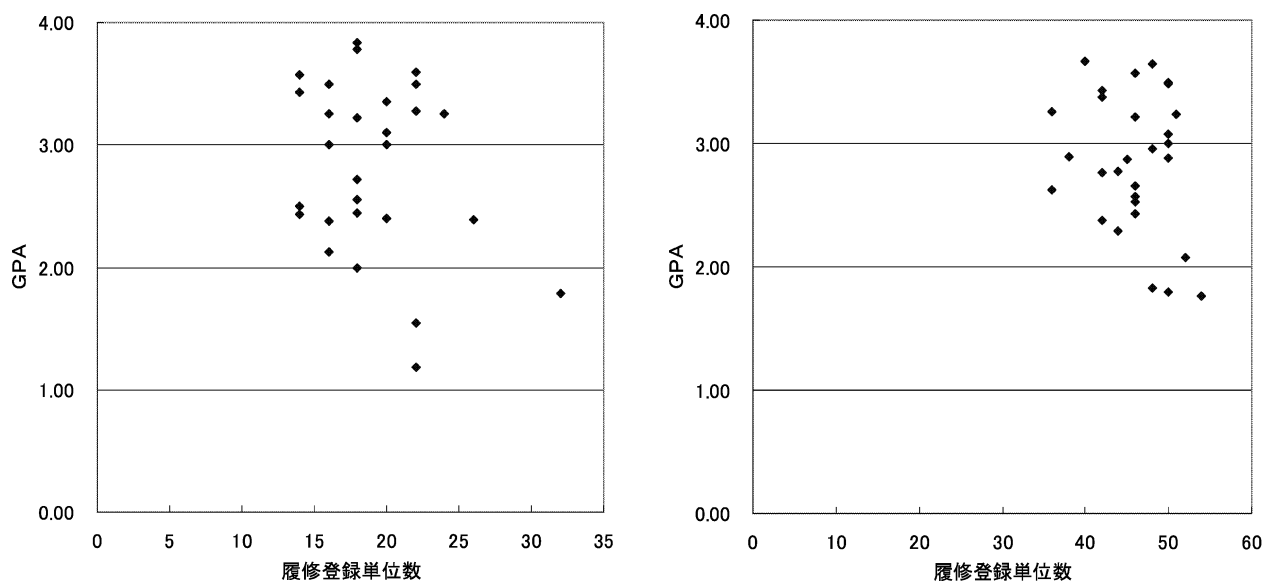


図 5-3 GPA の分布 (2004 年度生)

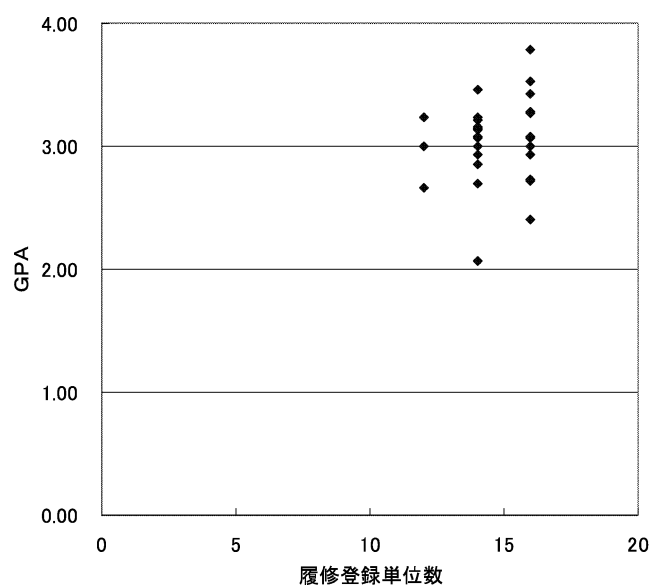


図 5-4 GPA の分布 (2005 年度生)

5.3 自己評価

自己評価は、教育活動実施記録と学生による授業評価、教員による同僚評価（実施された場合）に基づき付録1の付表3の様式に従って行っており、平成17年度に開講した43科目すべてについて自己評価書が提出されている。本報告書には、評価項目「Ⅴ 自己評価レポート」を教員氏名、担当科目名とともに公開することとしている。

「区分」基本科目 「科目名」経営戦略 「担当教員」玉井健一

経営戦略の基本的なフレームワークについては、おおむね学生に理解してもらうことができた。ただし、ケース・ディスカッションに時間をかけすぎ、講義の部分で詳しく分析方法を説明できない場合があった。今後、時間管理を徹底し、バランスのとれた授業体系に改善していきたい。

「区分」基本科目 「科目名」マーケティング・マネジメント 「担当教員」近藤公彦

マーケティングという科目が学生にとって馴染みやすい、あるいはすでに実践しているという点で、比較的理解しやすい科目であり、そのため活発かつ有益なディスカッションが行えたと評価できる。その反面、マーケティングが「正解のない世界」あるいは「自ら正解を作り出す世界」であることを理解するのに困難を感じた学生もあったようだ。この点は、折に触れて繰り返し強調する以外に有効な方法はないであろう。

昨年度との大きな変更点は、ケース・ディスカッションを次回のモジュールで行ったことで、これにより学生は理論を深く理解し、ケースを精査する時間的余裕を持ってディスカッションに当たることができた。ただし、e-learning については講義用レジュメのアップと課題の提出の2つが中心であり、e-learning 上での質疑応答をより活発化させるなど、さらに工夫と改善が必要である。

「区分」基本科目 「科目名」組織と人的資源管理 「担当教員」ヨン・ステファンソン

シラバスで記述した内容のレクチャーを実施することができたと思われる。学生が積極的に授業に参加していたので、円滑なディスカッションを行うことができた。しかし、本授業のグループ・ディスカッションの時間は非常に短いと思われる。時間配分の改善により、さらに質の高いディスカッションを行うことができると思われる。講義以外では、ディスカッションを高めるためのE-learning システムの利用は頻度が少なかった。

次の授業に向けての以下を改善して行きたい。

- ① 授業の主な内容とレクチャーのプレゼンテーションを改善する。

- ② 授業中の時間配分を改善する。
- ③ E-learning システムの利用を改善する。

「区分」基本科目 「科目名」コーポレート・ファイナンス 「担当教員」旗本智之

経営者が行う財務的意思決定では、投資の意思決定と資金調達の意思決定を峻別することが重要であるが、そのための基礎概念として、キャッシュフローと資本コストが最も重要な学習目標となる。授業としては、最終的に企業価値を計算させるレポートの作成を通じて、目標をほぼ全員がクリアした。

「区分」基本科目 「科目名」企業会計の基礎 「担当教員」松本康一郎

会計科目は、近年の会計制度ならびに会計基準の大改革に伴って、修得すべき基礎的知識が多く、時間的制約のなか、受講生によるプレゼンテーションやディスカッションが十分に行えなかった。次年度は、このことについても、出来る限り工夫をして授業を展開したい。

「区分」基本科目 「科目名」調査研究とデータ解析の技法 「担当教員」西山 茂

統計的なものの見方とは何かを理解したうえで、オーソドックスな推定と検定の手法、回帰分析を習得するまでを授業目標とした。結果として、個々の学生間には履修経験の違いによる到達度格差が認められたものの、全体としては概ね授業の目的・目標を達成した。この理由としては、統計的なものの見方、確率的な見方という基本を重視するという原則に立ったこと、及び回帰分析という応用範囲の広い技法を習得する点に最終目標を絞ったことにあると思われる。データ解析は種々の技法に分かれており、基本知識を理解した次の段階では、特定の応用範囲に即応した個別の技法を身につけることが重要である。その意味から、授業範囲をもう一度検討してみたい。

「区分」基本科目 「科目名」情報の処理と活用 「担当教員」奥田和重

今年度は専門職大学院の完成年度であることから授業内容を昨年度から変更することはできなかったため、多くの学生は授業内容に不満を持っていることがうかがえる。できる限り不満を持たさないような授業を心がけたつもりであったが、「推薦」「満足度」とともに評価が下がったのは残念である。来年度は大学設置審の制約がなくなるので、論理的思考やディベートを取り入れた授業に変更する。

「区分」 基礎科目 「科目名」 事業革新と企業戦略 「担当教員」 玉井健一

経営戦略の観点の中にイノベーションを位置づける講義を達成することができた。しかし製品開発など技術的な側面に関わる授業においては、理論先行型になってしまい具体的事例を踏まえて検討することができなかった。文系出身の学生がより適格にこれらのことがらを理解できるような講義方法を確立したい。

「区分」 基礎科目 「科目名」アントレプレナーの系譜とリーダーシップ 「担当教員」 高田 聡

今日のような社会経済の混迷にあっては、沈着かつリスクを辞さぬリーダーシップの陸続が待たれるが、時代の風潮には守旧性と付和雷同が目立ち、有為の人も閉塞感に襲われがちである。無用な閉塞感を払拭するには迂遠に見えようとも人々のかつての挑戦に学ぶことが極めて有益である。本講義の前半では、アントレプレナーの系譜を広く世界に、また初期近代のそれにまで辿り、リーダーシップの発生史的本質を講義した。昨年に同じく、受講生の等身大での理解を促すために地域・草の根でのリーダーシップの在り方に格別の留意を求めた。アントレプレナー群像にみるリーダーシップの発生史的本質を等身大で理解するという当初の目的は、十分に達成されたと考える。今後は事後課題等について一層好個なレスポンスの機会を設け、個別のアドバイスもさらに拡充させたい。小さいとはいえないクラスサイズにもかかわらず、昨年に同じく受講生の士気は総じて高く、それが高度なカリキュラム内容の消化・吸収を大いに助けたと思われる。講義目的の達成要因として本年も特筆しておきたい。

「区分」 基礎科目 「科目名」アントレプレナーの系譜とリーダーシップ 「担当教員」 前田東岐

リーダーシップに関する基礎理論の発展に関する包括的な認識と、各理論における重要な概念について、十分理解が得られたことと考える。特に変革型リーダーシップについては、基礎理論を踏まえた上で事例を用いた討論を行なったことが、受講者の理解を助けることになったと考える。事例をめぐる討論は、本講義では、必ずしも大きなウェイトを占めてはいないが、「論理的思考」「理論を踏まえた実践」という目的に対するバランスは取れていると考える。今後は、受講者数の増減により、このバランスを当初の予定から柔軟にするなどの対応が必要と思われる。

また事前・事後課題に対しては、コメント・シートを作成するなどの個別の対応が、受講生の動機付けに影響すると考えられる。今後も継続していきたい。

「区分」基礎科目 「科目名」企業の社会的責任と経営倫理

「担当教員」和田健夫、道野真弘、中村秀雄

法的責任や法的な考え方に関する基礎知識を「事前」に学ばせる工夫をする必要があると感じた。実際には最初の2人の担当部分については事前課題を設定しなかったが、やはり何らかの方法で一応形のある用意をして来るように、授業を構成すべきであったと感じる。

企業の社会的責任は、コンプライアンスから社会貢献に至る広範囲にわたる概念である。これを推進すべし、というのが現在の経済界の主流であるが、果たしてこれは義務なのか。そうだとしたらどこまでがそうなのか、その根拠は何か。又はあくまで各企業の自主的な活動なのか。「責任」といっていながら、その不作為に対するペナルティーは何なのか、といった疑問もある。

このように漠然としているために議論の噛み合わないおそれのあるテーマであったが、本講義ではコンプライアンス、事業に関連する社会貢献、事業に関連しない社会貢献に分けて解説するとともに、会社のガバナンスの問題、経営者の責任問題について法的視点から解説した。

法の視点から物事を見るということを必ずしも受講の前提としていない設定の中で、どこまで講義の目的を理解してもらえたかは、はなはだ心もとないところではあるが、企業活動のアクセルでもありブレーキでもある、法のルールが存在を強調することはできたのではないかと思う。

最後の2モジュールでは契約をしておきながら、履行すると会社に重大な損害がかかることになるので、その通り履行しなかったケースを2件取り上げて重点的にディスカッションをした。不履行をなじる意見が出た反面、経験的にそのような事態に遭遇した学生からは、実務ではそうばかりは言っておられない場合があるという報告があり、現実の問題として企業の行動（経営倫理）を考えることが出来た。また法律論としては正しいが、実際的には承服しがたく思われる、賃貸借契約における高額の「賃料値下げ」要求の是非を取り上げた案件では、どのように解決すべきであったかについて、種々の提案がなされ自分の問題として経営姿勢を考えることが出来た。

これらの問題には正答はなく、あるいは学生はどうすればよいのかの示唆を求めたかもしれないが、実際の社会における問題ではひとつの答えはないのだから、授業としては割り切れない気持ちで終わるのが、むしろ問題提起として意味があると教員は考えている。

「区分」基礎科目 「科目名」企業財務と税務戦略 「担当教員」大沼 宏

講義内容はそれなりに満足 of いくものであった。しかし、学生からの評価を踏まえた場合、改善しなければならない点のほうが多い。学生の理解度や満足度を踏まえながら、適宜講義内容や手法、課題の内容、質疑等授業運営についてももう少し配慮をすべきであった。また、学生の適性やニーズに合わせて、内容も変えていく必要があるように感じた。今後はこの経験を生かして講義が出来たらと考えている。

「区分」基礎科目 「科目名」生産管理 「担当教員」奥田和重

授業の前半は計算問題が多く、それが生産現場でどのように使われているかという具体的な事例が少なかったことが授業評価の結果に現れていると思われる。次年度では、授業全体を通じて事例やミニケースを多く用いるようにする。

「区分」基礎科目 「科目名」顧客満足経営 「担当教員」松尾 睦

学生は授業に積極的に参加し、「顧客を中心とした経営の枠組みと手法を理解する」という授業目標は達成することができたと思われる。ただし、顧客に接する業務に就いたことがない学生に対しても理解しやすい工夫をしたり、顧客満足調査の演習をより効率的に実施する体制を構築する必要があると思われる。

「区分」基礎科目 「科目名」会計情報と経営分析 「担当教員」旗本智之

授業の目的・目標を多くの学生が達成した。しかし、理解が不十分な学生もおり、彼らへの対応が必要である。次年度は E-learning システムを利用するなどして質疑応答の機会を増やすこととする。

「区分」基礎科目 「科目名」経営者のための経済分析及び統計分析 「担当教員」西山 茂

データ解析技術としては、回帰分析の発展、分散分析、時系列データ解析まで予定した授業範囲について、ほぼ目標を達成した。他方、基礎的な経済理論については、マクロ・ミクロ両面の解説を行ったが、履修者全体の着実な理解を形成するには時間的不十分さが感じられた。来年度は、データ解析技術と経済学教育を並行して進めるのではなく、所要の分析技術を修得させた次のステップとして経済分析の演習を行うという構成に変更する予定である。

「区分」基礎科目 「科目名」組織的意思決定と IT 「担当教員」出川 淳

2005 年度における授業が最初の開講であったこともあり、履修生がどの程度スムーズに本授業の内容を理解してくれるのか、と言った点に関する想定が甘かったと反省している。つまり、初めて本授業を受講される方にとっては、教員が想定したほど簡単に理解し、その技能を身につけられないということである。具体的な原因としては、既存の教材に頼ってしまった点が大きすぎたという点も挙げられる。したがって今後、本授業の質的内容を高めるためには、教材の工夫やエクササイ

ズ・ワークの工夫、説明の仕方の工夫、全体の時間配分やメリハリの改善、理解の度合いを確認する為のコミュニケーションや何らかの工夫が必要と考えている。

「区分」基礎科目 「科目名」国際経営 「担当教員」李 濟民

おおむね目標していたことは達成できたが、より良い授業をしていくためには、飽きさせない為のレクチャーとケース・ディスカッション等において時間配分の工夫と e-learning のさらなる活用の必要性を感じた。

「区分」発展科目 「科目名」ベンチャー起業論 「担当教員」瀬戸 篤

ベンチャー起業論も2年目を終えたので、次年度(H18)は改訂時期に入ったと思われる。これまでの重点は、ベンチャー企業経営者やキャピタリスト志願者に焦点を絞っていた。しかしながら、現時の履修者の平均像は組織内の事業変革ないし被雇用者を継続するものであり、かつ半分近くが理工系のバックグラウンドを有するものであった。それゆえ、平成16-17年度に重点を置いたく起業・投資から、平成18年度は〈ベンチャー企業組織と戦略〉に重点を移行する予定である。教科書そのものはすでにシラバス上で確定しているので、レクチャー上での変更にとどめ、教科書を含めた本格改訂は新カリキュラムに移行する平成19年度に全面改定する計画である。

「区分」発展科目 「科目名」技術と事業革新 「担当教員」瀬戸 篤、武田 立

授業満足度に関して11名全員が5.00と評定したことは、当初の狙い通りに講義が達成できたことを示唆していると思われる。

なお、平成17年度受講生のおよそ半分が前年後期の「ベンチャー起業論」未履修者であったために、講義の意図するところからはずれた学生が散見された。それは、本講義があくまでも〈技術イノベーション論〉に焦点を絞っているのに対して、上記学生の数名は、それを〈起業家精神〉と混同してしまったことであった。こうした事態に、事前予習段階のレポートで気付いたので、講義途上でシラバス加筆修正を行うとともに、何度も講義中に〈技術イノベーション論〉と〈起業家精神〉との違いを強調した。平成18年度講義では、このようなことはもはや生じないシラバス構成へと改善した。

また、特筆すべきは、武田講師・瀬戸ともに同日3-4講義で開講される「ライフサイエンス創造」に連続してオブザーバー出席することによって、「技術と事業革新」では取り扱わないライフサイエンスと、その先端的ケースを共に学び、ディスカッションすることが出来たことは幸いであった。今後も、これが可能となる時間割体制を希望する。

「区分」 発展科目 「科目名」 市場調査法 「担当教員」 山本 充

マーケティング・リサーチという視点から広くその方法を理解することに力点をおいていたが、それゆえ経営上の意思決定に必要な根拠情報を確実に収集する技法の修得が不十分であったと思われる。そのため、次年度においては、ビジネスプランニングという計画プロセスにおいて、不確実性を減らし、リスクを認識するために必要な根拠情報を収集することの重要性を自然に理解できる内容とする。

そのため、基本的なリサーチプロセスに基づいた授業進行を計画し、現実の商品やサービスを題材として、経験的に根拠情報収集の技法を身に付けるように改善を試みる。

「区分」 発展科目 「科目名」 組織運営のためのシステム構築法 「担当教員」 出川 淳

2005 年度における授業が最初の開講であったこともあり、履修生がどの程度スムーズに本授業の内容を理解してくれるのか、と言った点に関する想定が甘かったと反省している。つまり、初めて本授業を受講される方にとっては、教員が想定したほど簡単に、情報的な視点でものごとを見る/考えるということが理解できなかったということである。したがってより判りやすくこの点を説明するための授業の運営方法を実現していなければならない。そのためには、授業全体における時間配分の見直しや、教材、ケースの改良、履修生が理解した点、理解していない点を迅速に捉えるための工夫、ディスカッションや黒板の使い方の工夫、E-Learning システム機能の活用などを検討していく必要があると考えている。

「区分」 発展科目 「科目名」 財務会計と IR 戦略 「担当教員」 山本眞樹夫

この講義は松本教授とのオムニバス形式で行うものであり、わたしが前半の 4 Mを担当した。IR 情報とディスクロージャーの意義及び財務諸表分析に基づく総合的財務評価に関しては、受講者が実践科目を通じて基礎知識を有していることもあってか、本講義の目的・目標を達成することができたと考えているし、また受講者とともに楽しく講義を進めることができた。

キャッシュフロー計算書と連結財務諸表については、それらの意義について受講者は理解した、あるいは既に理解していたと考えるが、作成方法については教材も含めて講義内容を再検討しなければならないと考えている。

また、受講者にも指摘されたが、E-Learning システムによる教材配信に、一部、不適切な点があった。改善するよう努力したい。

最後に、休講することなく 4 M の講義を行うことができたのは、事務当局によるスケジュール調整のおかげである。感謝したい。

「区分」 発展科目 「科目名」 予算管理と業績評価 「担当教員」 梶原武久、中 善宏

業績評価システムの基本概念を学習するとともに、EVA、バランス・スコアカード等の新しい業績評価システムについても、数多くの実践例を素材としながら理解を深めることができた。企業組織に属するものにとって業績評価システムは身近な問題であって、多くの学生が高い関心をもって授業に臨んでいた。とりわけバランス・スコアカードについては関心が高く、リサーチ・ワークショップにおいて、ケース・スタディを選択した学生の数名が、バランス・スコアカードを自らのケース分析に取り入れ分析を行っていた。授業で取り上げる必要があるトピックスに比較して、授業時間が少し不足しているように感じた。

「区分」 発展科目 「科目名」 環境と経営 「担当教員」 山本 充

環境マネジメントシステム（EMS）を理解する方法は多く存在する。現実的に組織運営や企業経営での問題は、EMS が経営戦略とうまく融合していない点にある。そこで、次年度では、EMS から獲得できる環境情報と環境会計情報等をどのように経営に活かしていくかに視点をおいた構成としたい。

「区分」 発展科目 「科目名」 金融システムと企業発展 「担当教員」 齋藤一朗、松田一敬

授業の目的に関しては、概ね達成できているものと思慮されるが、なおいくつかの点で改善の余地を残している。第1は、履修者が授業構成全体を俯瞰し、金融システムのアーキテクチャを中心テーマとする前半（モジュール1～4）と、企業のファイナンス行動を中心とする後半（モジュール5～8）の関連性を理解できるように、授業冒頭のガイダンスの充実に努める。第2は、専任教員と兼任教員間の意思疎通をより密に図り、「理論」と「実践」を単に“接ぎ木（前半：理論、後半：実践事例）”した授業ではなく、真に融合した授業となるように努める。第3は、ともすれば理論的な解説に傾きがちな前半（モジュール1～4）において、理論の適用事例をできるだけ取り上げるとともに、事前・事後の課題を通して、履修者が実践の場で応用できる力を涵養する。後半（モジュール5～8）では、実践事例の解説においてはキーとなる分析概念を、実践事例を巡るディスカッションにおいては重要ポイントを授業のまとめにおいて明確に示すことで、履修者の学習効果をより高めるよう努力したい。

「区分」 発展科目 「科目名」 ライフサイエンスビジネス創造 「担当教員」 守内哲也

ライフサイエンスビジネス創造の授業は土曜日の3、4講目で、同じ土曜日の1、2講目が技術

と事業革新の講義である。この両科目は話の連続性があること、履修者が共通であること、技術と事業革新の講義担当教官と外部講師がライフサイエンスビジネス創造の授業に参加してくれたこと等から広い視野で講義と討論ができたと思う。このような科目間の連携により学生から高い満足度を得ることができたと考えられる。この授業により、バイオベンチャーの実態、経営、資金調達、株式公開等に関して教えると同時に自分にとっても勉強になった。今後さらに内容を充実させたい。

「区分」発展科目 「科目名」知的財産の評価と活用戦略 「担当教員」才原慶道

知的財産と呼ばれるものには多種多様なものがあり、企業活動には各種の知的財産法がさまざまな形でかかわってくる。この授業では、いわゆる知的財産法のうち、技術の保護・表示の保護・表現の保護という観点から、主だった法律を取り上げた。限られた時間の中で、知的財産法の全体像を示すことは困難な作業ではあったが、少なくとも主要な法律の要点については押さえることができたと思う。また、議論の時間を取ることはできなかったが、学生の興味をひきそうな話題を織り交ぜながら、企業等の現場において、実際に問題になりそうな事柄を可能な限り盛り込み、授業が平板なものにならないよう配慮した。論点が多岐にわたったことから、中には消化しきれなかった学生もいたかもしれないが、随時、質疑に応じるなど、学生の理解を助けるよう努めたつもりである。知的財産法の基礎的な知識については伝えることができたと思う。この授業が、今後、学生が知的財産法を学んでいくきっかけになったとすれば幸いである。

「区分」発展科目 「科目名」起業と法 「担当教員」寺嶋典裕

初めて講義を受け持ったためどのように授業を進めて行くか試行錯誤の連続であったが、無事終えてほっとしている。

各自で興味を抱いた株式公開を果たした企業についての分析を通じて株式公開についての理解を深められたのではと思う。受講生のディスカッションへの参加についても非常に積極的であり、教える方としても刺激を受けた。

反省点としては事後課題等提出物に対するフィードバックが十分でなかったことである。来年度以降に改善したいと思う。

「区分」発展科目 「科目名」パブリック・マネジメント 「担当教員」相内俊一

初めての講義科目であったこと、準備は進めていたが直前まで外国出張していたことなどから、講義のリズムを軌道に乗せるのに時間がかかった。理論の紹介は十分に行うことができた。ケースの分析は、対象ケースそのものを増やして分析の多様性を多くする必要を感じた。次の授業に向け

ては、スコットランドのケースを使うことなどを含めて、教材の準備をよりしっかり行うとともに、理論と分析を常に結びつける講義ノートを作成する。

「区分」**発展科目** 「科目名」**北海道経済論** 「担当教員」**下川哲央、原田 実**

学生評価や同僚評価、並びに授業運営プロセスを通じて、地域経済自立を考えるかなり高度な思考法と分析法を理解させたと考える。すなわち経済学的基本知識や現実の経済問題への関わり方の差をかなり克服するポイントの理解、高い関心の確保等を図れた。しかし、問題はないわけでない。限られたモジュール内での授業で、教授した理論の深層部分の理解が必ずしも十分でなく、そうした未熟部分を抱えたままに「科目修了」の不安をどう補正するかである。1単位科目が抱える永遠の課題かも知れない。なお、当科目は、本学の MBA 授業の中で数少ない経済学系統に属する科目であり、「北東アジア研究」とのシームレスな接続で他科目（とくに後期実践科目）との連携に貢献するためにも、開講時期・時間数的な工夫が望まれるところである。

「区分」**発展科目** 「科目名」**北東アジア研究** 「担当教員」**下川哲央、小田福男**

授業展開プロセスや学生評価等を通じて、目標はほぼ満足度が高い達成と感じる。一方で科目配置の授業構造で、標榜するミッションと現実の時間的制約とのギャップが大きく、他科目以上に工夫すべき部分も痛感する。次年度では、与えるべき知識の部分（講義・資料配布等による事前課題）、討論の練り込みで獲得を期待する知恵の部分、それらの知識の確認部分（事後課題）を改めて授業設計で明確化したい。なお、現在の授業設計による運営は平成 18 年度までであるが、後期後半の約 2 ヶ月は社会人学生の年末業務の多忙性、修了にむけた実践科目の詰めや追い込み等で後期前半の「北海道経済論」とシームレスに履修リンクすべき対象学生の幾人かが履修を望みつつも諦めており、残念であった。2 年前期への配置換えを行うことが後期の実践科目（特に CSⅢ、BPⅢ）への知識活用からも有益であると感じたし、学生の評価結果にも同様の意見があった。カリキュラム全体の中での関連性・有益性を高めるためにも、引き続き中期的な再検討が望まれる。

「区分」**発展科目** 「科目名」**国際取引実務** 「担当教員」**中村秀雄**

国際取引が、国内取引とは異なる足場の上に行われるものである、というメッセージは伝わったと思う。国際取引の特徴は色々あろうが、そのもっとも大きなものは「日本人の常識、慣行」は国内では通じてても国際的には、数多くあるシステムの一つでしかない、ということである。

国際取引「実務」を教えるにあたっては、実務の何を教えるか、をよほど考えておかなければならいと思わされた。授業ではどうしても法律面からの話をしたが、もっと現象を広く捉えて、色々

な面から論じればよかったとも感じた。

国際的な経験を全く持っていない受講生がいると、クラス全体に対して授業をしていく必要からは、非常にやりくいこともよく分かった。やはりこの授業を取る場合には、間接的でもよいし、必ずしも取引でなくてもよいが、何らかの国際経験を持っていて欲しい。

積極的面では、海外駐在経験のある学生がいたこともあり、ディスカッションを通じて、同じ事項に対して国内取引と国際取引がどう違うかを、生き活きと学ぶことが出来たことはよかったと思う。

「区分」 発展科目 「科目名」 ビジネス英語の実践 「担当教員」 浦島 久

1年目の昨年度は、どんな受講生が教室に現れるかも分からず、未知の分野への挑戦ということもあり、とても緊張した中での授業でした。しかし、今年度は2度目のプログラムということもあり、全てに余裕が持ちすぎたようです。

来年度は初心に返り受講生が満足してくれるようプログラムをさらに充実させていきたいと思います。

「区分」 発展科目 「科目名」 上級ビジネス英語 「担当教員」 小林敏彦、Shawn M. Clankie

初年度としては満足できる授業ができたと思う。受講者も3人でモチベーションも高く、こちらで用意したメニューをじゅうぶん消化してくれた。team teaching も無理なく互いの得意な分野を発揮して学生の要望に応えられたものと考えます。

「区分」 実践科目Ⅰ 「科目名」 ビジネス・プランⅠ

「担当教員」 齋藤一朗、出川 淳、山本 充、梶原武久

ビジネスプランニングの初級・入門編として位置づけられている本科目では、カフェ事業という比較的シンプルなビジネスモデルを演習の題材として取り扱うことで、「経営戦略」や「マーケティング・マネジメント」など、基本科目で学修した知識・スキルを統合することや、ビジネスプランニングにおける「練り上げ」のサイクルを体得することを目的としている。ビジネスプランニングにおける「練り上げ」のサイクルについては、ビジネスコンセプトづくりから始まり、これを基軸としたビジネスモデルの構築、市場分析、経営資源分析、財務予測と、Step by Step で演習を進めることで所期の目的を概ね達成できたと考える。

しかしながら、基本科目で学修した知識・スキルを統合することについては、レクチャーやプレゼンテーションに対するコメント、事後課題に対するフィードバック・レポート等を通して、分析

ツールや分析概念を駆使することの意義を説いてきたが、初期の目的を達成するためには、なお工夫の余地を残している。さしあたりは、参考資料として提供している「ビジネスプラン作成のためのチェック・リスト」を改訂し、チェック項目と併せて、そこで用いる分析ツール・分析概念を明示し、ビジネスプランニングにおいてツールを適切に駆使するよう学生を誘導したい。

「区分」実践科目Ⅰ 「科目名」ビジネス・プランⅡ 「担当教員」李 濟民 他

ビジネスプランⅠで習得した知識・手法を確認し、より高度なビジネスプラン作成能力を身につけてもらうために、履修者の関心を基にグループ分けを行い、グループ毎にテーマを設定させた。各モジュールでは、グループ・ディスカッション→発表→全体ディスカッションを行い、プランを練っていった。ただし、グループワークと個人作業間（役割）のバランスと評価についてより精緻化していく必要があると感じた。

「区分」実践科目Ⅰ 「科目名」ケース・スタディⅠ 「担当教員」旗本智之 他

本授業は、戦略、マーケティング、組織、会計・財務の視点から企業のケース（事例）を多角的・総合的に検討することを通じて、ケース分析のスキルを習得することを目的としているが、この目的を達成したと言える。ケースの開発、授業の設計、ケース・レポートのフィードバックに大いに資源を投入していることの成果である。今後は、より効率的に授業を運営する必要がある。

「区分」実践科目Ⅰ 「科目名」ケース・スタディⅡ 「担当教員」近藤公彦・玉井健一・旗本智之

ケース・スタディⅠにおける分析枠組みの提示に沿った考察からⅡでは分析枠組みを学生の選択にまかせることによって、分析・戦略立案能力の一層の向上を図った。当初はグループ・ディスカッションの段階で、どの枠組みを採用し、どのように分析の一貫性を持たせるかについて多少の戸惑いがあったように感じられたが、最終的に分析・戦略立案能力は大きく向上したと評価できる。

分析レポートへのフィードバックは、教員が赤字でコメントを直接書き込むことにより、学生がどこをどのように改善すべきかを知るうえで非常に有用であったと考えられる。

「区分」実践科目Ⅱ 「科目名」ビジネス・プランⅢ 「担当教員」李 濟民 他

おおむね満足度の高い評価が得られた。特に、「MBAのためのビジネスプランニング」に登場していただいた3名の経営者によるレクチャーは高評だった。また、各自のプランに対し、複数の教員によるコメント入りのフィードバックも良かった。しかし、時間の配分（特にディスカッション

とプレゼンテーションの時間をできるだけ多く確保する) とリサーチ・ワークショップとの評価基準等を明確化することなどが次の授業へ向けての課題だと思う。

「区分」 実践科目Ⅱ 「科目名」 ケース・スタディⅢ 「担当教員」 旗本智之 他

問題発見・解決能力の更なる向上を目標とする本授業では、履修者各自の関心に応じてケース企業を選択し、ケース・レポートを作成してもらう。履修者にとっては主体性の保持がよいケース・レポート作成の必要条件であり、授業担当者は適切な助言を通じて主体性の促進者となる必要がある。本専攻が設置以降初めての授業であったが、目標はほぼ達成できたと言える。しかし、ケース企業の選定と現状分析の段階に時間がかかり、主体的解決策の方向設計が遅れた結果、授業でのディスカッションが不十分な履修者もいた。今後、この段階を早く終えるように指導していく必要がある。

「区分」 実践科目Ⅱ 「科目名」 プロジェクト演習 「担当教員」 出川 淳 他

2005 年度における授業が最初の開講であったこともあり、授業開始直前まで授業の実施形態が未決定であったり、他の実践科目Ⅱとの成績評価などにおける整合性確保の取り決めが行われていなかったりしたため、履修生をやや混乱させてしまった点を第一に反省しなければならないと、今後、このようなことがあってはならないと考えている。

「区分」 実践科目Ⅱ 「科目名」 インターンシップ 「担当教員」 下川哲央・山本 充・斎藤一朗

第一期の実業人学生 2 名が履修し、目的・目標はほぼパーフェクトな成果を挙げることができた。近年、企業の事業展開・組織上の諸課題はかなり複雑・高度化しており、2 年次前期までの科目修学達成度や実践的な課題発見能力（経験や直感を含め）が重要になる。実践型インターンシップはビジネススクール科目で重要なひとつであり、2006 年度募集、2007 年度履修・修学においては、科目の目的を理解し、果敢な履修選択が望まれる。

「区分」 リサーチ・ワークショップ 「科目名」 リサーチ・ワークショップ

「担当教員」 松本康一郎 他

この科目は、従来の修士論文に替えて、各履修者が設定したテーマに関するビジネスプランまたはケース分析を、複数の専攻専任教員と全履修者の前でプレゼンテーションを複数回行わせ、最終レポートとして提出させ評価を実施するものである。いわば、2 年間にわたって履修者たちが身につけたであろうビジネススキルをすべて発揮する場である。

2005 年度は初めての実施であったため、教員側における事前の準備・調整不足が見られた。この科目に参加する複数の専攻専任教員からの有益なコメントをフィードバックするために、次年度は、事前の十分な授業設計が求められる。

5.4 同僚評価

同僚評価は、授業参観によっておこなっており、付録1の付表4「授業参観記録シート」を作成している。平成17年度の授業参観実施科目を表5-10に示す。

表5-10 アントレプレナーシップ専攻 教員相互の授業参観実施科目

科目区分	科 目 名	担当教員	参観教員	参観教員
基本科目	組織と人的資源管理	ヨシ・ステファンソン	近藤公彦	松本康一郎
基礎科目	経営者のための経済分析及び統計分析	西山 茂	玉井健一	ヨシ・ステファンソン
発展科目	知的財産の評価と活用戦略	才原慶道	玉井健一	松尾 睦
基礎科目	組織的意思決定とIT	出川 淳	近藤公彦	篠本智之
基礎科目	生産管理	奥田和重	松尾 睦	西山 茂
発展科目	市場調査法	山本 充	西山 茂	出川 淳
発展科目	国際取引実務	中村秀雄	李 濟民	ヨシ・ステファンソン
発展科目	北海道経済論	下川・原田	篠本智之	出川 淳
発展科目	予算管理と業績評価	梶原・中	松本康一郎	奥田和重

付録1. アントレプレナーシップ専攻教育評価ガイドライン

教育開発センターアントレプレナーシップ専攻教育開発部門

1. 教育評価の目的

本学専門職大学院アントレプレナーシップ専攻は、専門職にふさわしい知識とスキルを身につけ、職業上それらの知識やスキルを実践的に応用できる教育を目的としている。この目的を達成するために、教員の教育評価では、モジュール型授業がもたらす教育効果が十分であるか否かを判定し、その結果を教員にフィードバックして、教員自身の教授能力の改善を図り、本専攻の教育の質の向上に寄与することを目的とする。

2. 教育評価の方法

教育評価には、事前評価、形成評価、総括評価があり、一般的にはそれぞれは次のようである。

事前評価：効果的な授業設計を行うために実施する学習前に学習者が持っている予備知識の評価である。

形成評価：学習単位の学習目標を修得しているか否か、もし修得していないのであれば、それを修得するのに何をしなければならないかを判定するための評価である。すなわち、学習形成過程の改善を目的とする評価で、その結果は、学習者を矯正するため、また教員が教授法を矯正し、学習指導の指針を得るためのフィードバック資料となる。

総括評価：達成された学習成果の程度を総括的に把握するための評価で、通常、科目（コース）や全過程の終了した時期に行われるものである。

教員に対する教育評価としては、形成評価は教授能力の改善のためのものであり、総括評価は教授活動の結果を総括的に評価するもので教育業績評価につながるものである。教育評価の目的が「教員自身の教育能力の改善を図り、教育の質の向上に寄与する」ものであれば、教育評価は形成評価であるべきで、評価結果を教員の教育業績評価に使ってはいけないことに留意する必要がある。

本専攻で実施する形成評価としての教育評価は以下の5種類の評価を行うものとし、その対象は各 Semester で開講されたすべての科目及び担当教員である。

A) 学生による授業評価：教育の受け手である学生による講義科目・実践科目の評価を行う。評価は Semester ごとに一貫性のある形式で実施する。学生によるこの評価結果は教育開発センターアントレプレナーシップ専攻教育開発部門（以下開発部門という）が集計・分析して当該教員にフィードバックする。

B) 教員による自己評価：教員自身が自己の教育活動に対して自己点検評価を行う。教員はモジュール毎に教育活動実施記録（付表1）を作成し、学生による授業評価と同僚による同僚評価を参考にして、Semester 終了後担当科目に関する自己点検評価を行う。評価結果は、開発部門

が取りまとめる。

- C) 同僚による同僚評価：同僚評価は教員同士による相互評価であり、同じ立場にある教育者がそれぞれに経験した多様な知見を共有することによって多面的な授業改善ができる。本専攻で行う同僚評価は授業参観を中心に、セメスターごとに評価者と被評価者を決めて行う。
- D) アントレプレナーシップ専攻修了者による評価：本専攻における教育の実質的な成果の有無を抽出するために在学学生だけでなく修了者による評価を行う。
- E) 修了者の雇用主による評価：修了者を雇用している企業が本専攻における教育の実質的な成果の有無を修了者の勤務実績を通じて抽出するために、雇用主による評価を行う。

3. 評価組織と評価の処理

教員の教育評価の責任者として教育開発センター副センター長をあて、実施は開発部門が行うものとする。開発部門は以下の活動を行う。

- ① 講義科目・実践科目に対する学生の評価を実施し、その結果を集計・分析して迅速に当該教員に知らせる。
- ② 各教員に自己点検評価を求める。これにはセメスターごとに行う教育活動実施記録、教員による自己評価、学生による授業評価に対するレスポンスが含まれる。
- ③ 各教員に対する同僚評価を行う教員を人選して同僚評価を依頼する。その結果は当該教員にフィードバックする。
- ④ 講義科目・実践科目の評価を行う修了者を人選して、修了者による評価を依頼する。その結果は関連教員および本専攻にフィードバックする。
- ⑤ 本専攻における教育の効果を抽出するために、本専攻修了者を雇用している企業を選び、雇用主による評価を依頼する。その際には、修了者のプライバシーに配慮する必要がある。評価結果は開発部門が集計・分析し関連教員および本専攻にフィードバックする。
- ⑥ 開発部門は、これらの評価を総括し、本専攻における教育の質の向上と改善につながる問題点の分析を行う。

4. 学生による授業評価

実施要領

授業評価は以下の項目に従って実施する。

- ア 授業評価は、各授業科目の受講者を対象として行う。
- イ 学生の氏名については、無記名とする
- ウ 授業評価は、前期および後期に開講しているすべての授業科目を対象とし、各学期の最終モジュールで実施する。
- エ 授業評価は、付表2のアンケート用紙によるアンケート調査によって行う。

- オ 教員は、アンケートの配布および回収を行う。その際、教員には回収ボックス等を準備する。
- カ 授業評価の集計結果は、原則として対象授業科目名、担当教員名を含めすべて公表する。
- キ 集計結果は、授業改善の目的以外に使用しない。

5. 教員による自己評価

実施要領

自己評価は以下の項目に従って実施する。

- ア 自己評価は、授業科目を担当した教員を対象に実施する。授業科目を複数の教員で担当した場合は、担当教員の協議のうえ自己評価者を決定する。
- イ 自己評価は、当該年度に開講されたすべての授業科目を対象とし、年度末に実施する。
- ウ 自己評価は、教育活動実施記録と学生による授業評価、教員による同僚評価(実施された場合)に基づいて付表3の様式に従って行う。
- エ 評価項目「Ⅴ 自己評価レポート」は、教員氏名、担当科目名とともに本学FD報告書「ヘルメスの翼に」に掲載して公表する。

6. 同僚による同僚評価

実施要領

同僚評価は以下の項目に従って実施する。

- ア 同僚評価は、実践科目を除く34科目とし、半期に4科目ないし5科目を評価対象とする。
- イ 同僚評価は、前期については6月に、後期については11月に実施する。
- ウ 評価は、授業参観によって行い、付表4の「授業参観記録シート」を作成する。
- エ 評価者は、1科目につき2名とし、各自2科目の評価を行う。2名の組合せは科目ごとに変更する。
- オ 評価者の人選は、次期開講科目の担当者を中心に行う。
- カ 評価者は、授業参観前までに当該科目のシラバス等の資料を読んでおくことが望ましい。
- キ 評価者は、授業参観後授業担当者と懇談を行い、意見交換を行う。
- ク 評価者は、評価が授業改善に資するものであって、査定をするものではないことに留意しなければならない。
- ケ 評価者は、授業参観後1週間以内に「授業参観記録シート」を作成し、開発部門に提出しなければならない。

7. 修了者による評価

実施要領

修了者による評価は以下の項目に従って実施する。

- ア 修了者による評価は、本専攻修了者を対象に実施する。
- イ 修了者による評価は、本専攻修了後1年、3年、5年経過時に実施する。
- ウ 評価は、付表5のアンケート用紙によるアンケート調査によって行う。
- エ 評価者の人選は開発部門が行う。
- オ アンケートの集計は開発部門が行い、集計結果により必要と判断するときには面談による追加調査を行う。
- カ 集計結果は、本学FD報告書「ヘルメスの翼に」に掲載して公表する。

8. 雇用主による評価

[平成18年度実施]

付表1 教育活動実施記録シート

教育活動実施記録シート（NA：どちらでもない）

実施月日	月 日	モジュール		時限～	時限	
出席者数	人	開始・終了時間		時 分～	時 分	
項 目 名				評 価		
授 業	授業の準備は十分行ったか			Y e s	N o	N A
	シラバスに沿って授業したか			Y e s	N o	N A
	授業の最初に目的・概要の説明を行ったか			Y e s	N o	N A
	系統立てて授業を行ったか			Y e s	N o	N A
	話の順序は整っていたか			Y e s	N o	N A
	特記事項：					
教育意欲	熱意を持って授業を行ったか			Y e s	N o	N A
	特記事項：					
教育態度	学生の理解度に注意を払ったか			Y e s	N o	N A
	学生の立場をよく考えて授業をしたか			Y e s	N o	N A
	質問や学生による発表の機会を与えたか			Y e s	N o	N A
	自己学習のための課題を課したか			Y e s	N o	N A
	学生からの質問があったか			Y e s	N o	N A
	具体的な質問内容：					
	特記事項：					
授業技術	話し方は明瞭で聞き取りやすかったか			Y e s	N o	N A
	話し方はノートをとりやすい速度であったか			Y e s	N o	N A
	教材は適切であったか			Y e s	N o	N A
	学生の学習意欲を高めたか			Y e s	N o	N A
	重要事項を強調したか			Y e s	N o	N A
	授業のポイントを明らかにしたか			Y e s	N o	N A
	効果的に知識や考え方を伝えたか			Y e s	N o	N A
	学生にとって適切な難易度だったか			Y e s	N o	N A
	授業は理解しやすかったか			Y e s	N o	N A
	授業内容についての知識は十分に論理的に説明できたか			Y e s	N o	N A
	特記事項：					

付表2 授業アンケート用紙（改訂版）

授業評価アンケート

このアンケートは、学生からみた授業の内容を調査して、その欠課を授業の改善に役立てる目的で実施するものです。回答結果は、成績評価に全く関係がありませんので、率直な意見を記入してください。

回答は基本的には以下のような5段階評価（5～1）で行います。数字を○で囲んでください。この授業において該当しない質問、例えば、授業で黒板を使用しなかった場合は「n/a：不使用」を○で囲んでください。

この授業の科目名を記入してください。

科 目 名

上記科目の授業に対して、以下の質問に答えてください。

I 授業、教員の教授法について		強くその 思う					どちらともい えない					全くそう 思わない				
		5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
1	授業は十分準備されたものでしたか。	5	4	3	2	1										
2	授業はシラバスに沿っていましたか。	5	4	3	2	1										
3	教員の話し方は明瞭で聞きやすかったですか	5	4	3	2	1										
4	黒板やOHP、パワーポイントの字や図は見やすかったですか。 n/a	5	4	3	2	1										
5	教員は、教材（テキスト、プリント、ケースなど）を効果的に使用していましたか。 n/a	5	4	3	2	1										
6	教員は、授業内容を理解しやすいよう配慮していましたか。	5	4	3	2	1										
7	ディスカッションは適切に運営されていましたか。	5	4	3	2	1										
8	E-learning システムは、適切に活用されていましたか。	5	4	3	2	1										
9	課題の設定と授業の関連は適切でしたか。															
10	あなたは友人や後輩に、この授業の履修を薦めますか	5	4	3	2	1										
11	あなたはこの授業に満足しましたか	5	4	3	2	1										

以下は教員が独自にたずねる質問です（質問文は別にあります）。

II オプション質問

12		5	4	3	2	1
13		5	4	3	2	1

Ⅳ この授業のよかった点と改善すべき点をそれぞれ5つまで上げてください。

よかった点

改善すべき点

() ()

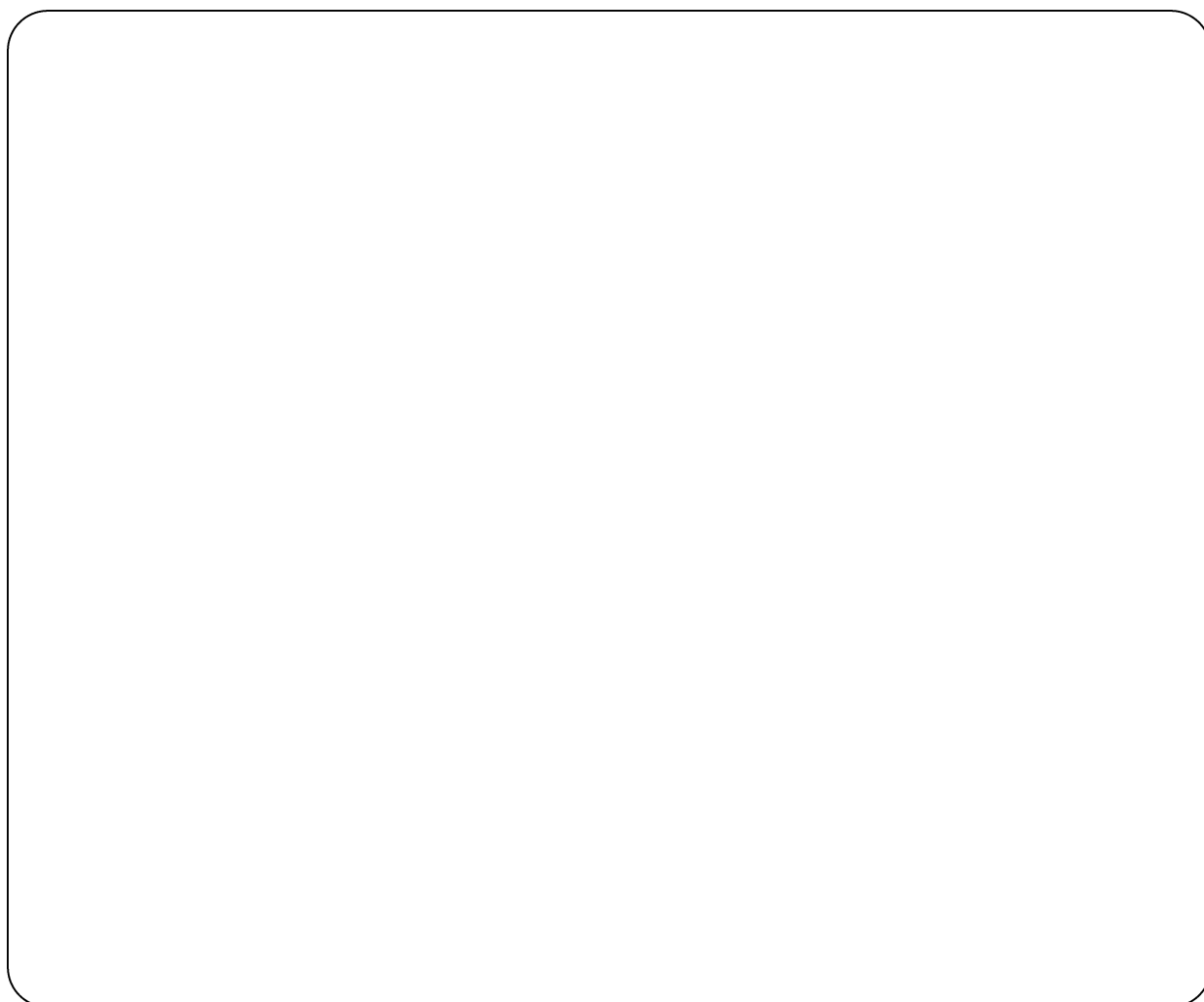
() ()

() ()

() ()

() ()

Ⅴ その他、気がついたこと、感想などをお書きください。



付表3 自己評価シート

教員氏名			担当科目名		
開講年度		開講期間（○をつける）	前期	後期	履修者数
I 授業の目的・目標					
I-1 目的・目標の達成状況					
I-2 目的・目標を達成できなかった事項と原因（あるいは達成できた事項と要因）					
II 学生による評価結果					
III 同僚評価結果（授業参観が実施された場合のみ記入する）					
IV 次の授業に向けての改善点					
V 自己評価レポート（この項目を公表します）					

付表 4 授業参観記録シート

授業参観記録シート（授業参観者： ）

注：懇談会は、「よい点」を取り上げることからはじめて下さい。

科目名			授業担当教員名		
実施月日	月	モジュール		時限～	時限
	日	ル			
出席者数	人	開始・終了時間	時	分～	時 分
授 業（シラバスに沿っているのか、準備は十分か、系統立てて説明しているか、など）					
教育態度（学生の関心を引き起こしているか、授業内容は十分か、学生のレベルを考慮しているか、質問を促しているか、など）					
授業技術（話し方は明瞭か、話し方の速度は適当か、板書・OHP・液晶プロジェクター等の使い方は適切か、など）					
この授業のよい点					
この授業の改善点					
総 評（懇談会終了後に記入）					

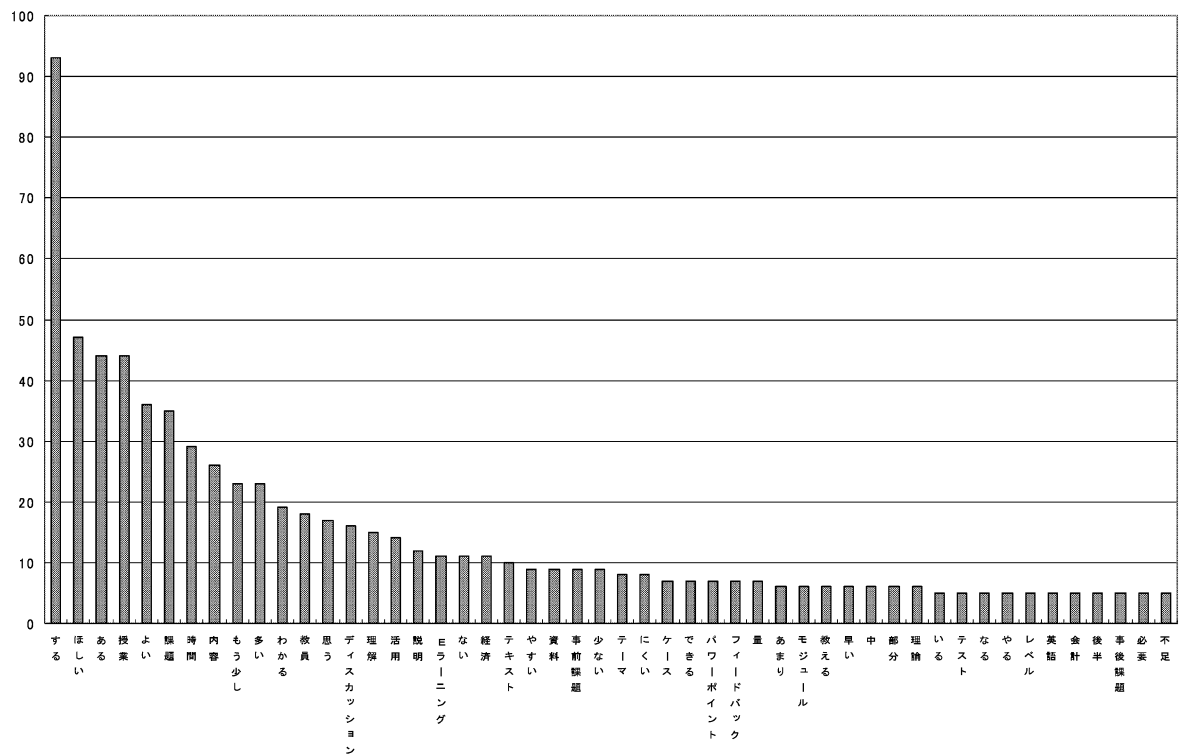
付録2. 平成16年度の相関関数

付表5 平成16年度の回答数と平均値

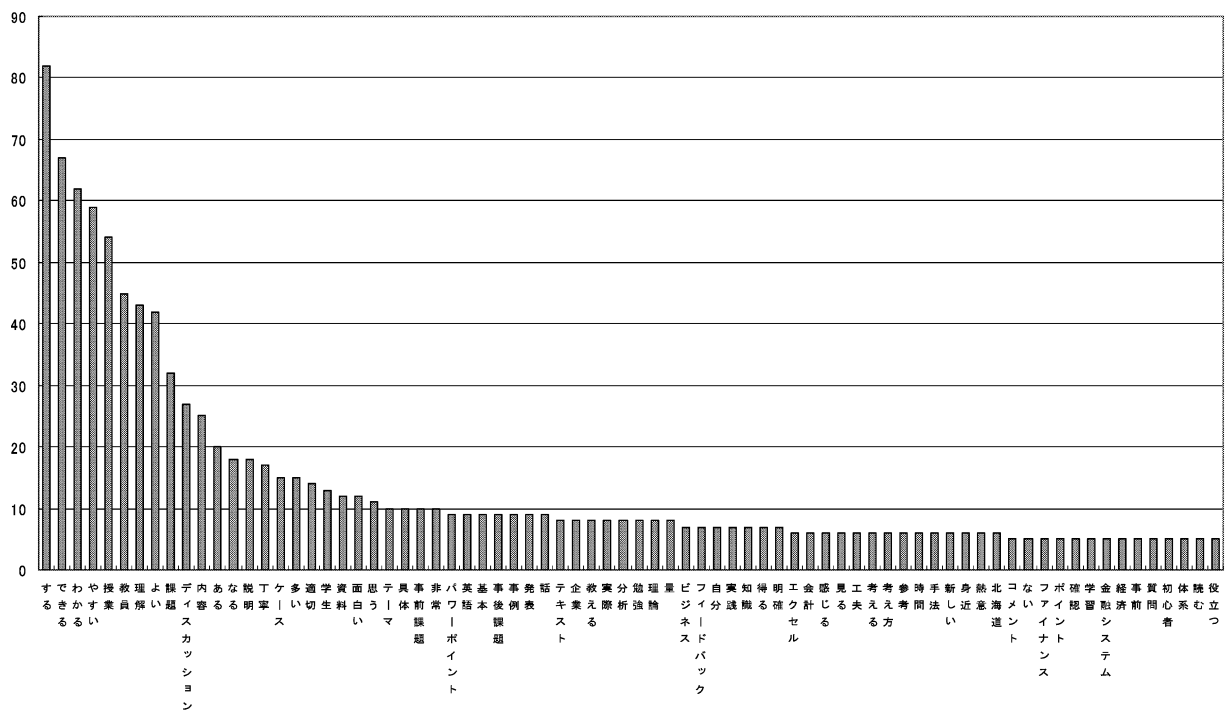
質問項目	準備	シラバス	話し方	黒板	教材	授業	ディスカッション	E-learning	課題	推薦	満足度
回答1	3	0	11	12	3	13	8	12	4	12	12
回答2	13	13	23	19	16	30	37	34	24	21	31
回答3	44	62	80	63	96	85	140	112	97	104	88
回答4	253	251	170	209	228	204	177	202	211	178	198
回答5	131	116	160	128	102	113	82	67	108	130	116
1-5 計	444	442	444	431	445	445	444	427	444	445	445
平均値	4. 12	4. 06	4. 00	3. 98	3. 92	3. 84	3. 65	3. 65	3. 89	3. 88	3. 84

付表6 平成16年度の「質問項目間の相関係数」

相関係数	準備	シラバス	話し方	黒板	教材	授業	ディスカッション	E-learning	課題	推薦	満足度
準備	1										
シラバス	0. 479	1									
話し方	0. 130	0. 076	1								
黒板	0. 070	0. 053	0. 698	1							
教材	0. 556	0. 366	0. 128	0. 046	1						
授業	0. 609	0. 308	0. 062	0. 024	0. 619	1					
ディスカッション	0. 442	0. 250	0. 071	0. 045	0. 484	0. 598	1				
E-Learning	0. 240	0. 200	0. 037	0. 039	0. 259	0. 252	0. 264	1			
課題	0. 434	0. 339	0. 104	0. 065	0. 442	0. 511	0. 425	0. 331	1		
推薦	0. 550	0. 349	0. 093	0. 045	0. 588	0. 699	0. 563	0. 280	0. 557	1	
満足度	0. 575	0. 318	0. 106	0. 053	0. 601	0. 763	0. 591	0. 260	0. 577	0. 819	1



付図1 改善点キーワード



付図2 評価点キーワード

付録3. 「自由記述」

- この授業の必要性がよくわからない。レポートの作成方法、プレゼンテーションを上達させるためですか？
- 10枚レポートの返却がおそく、教育効果に疑問がある。ライティングの指導として、より早いバックがのぞましかった。
- この科目を授業に取り入れるなら、「ロジカルシンキング」等の要素をとり入れるべき。
- 少し退くつな授業であったので、内容を再検討が必要と感じました。
- 情報リテラシーよりもプレゼン—話し方、説得力、のスキルを向上させる授業の方が良かった。
- Word、PPT共にレベルにあわせて、選択科目とすることも一考の余地があると思われます。
- ワードやパワーポイントなどはもっと効果的に学習する方法があると思う。
- プレゼン・発表の技術が向上できるよう、スピーチなどの実践練習があっても良い。
- “やりっぱなし”の授業だった気がする。
- パワーポイントかワードは講義としてではなく、集中セミナーのような形（4月始めにやったやつ）にできないのでしょうか。
- 多くの人がWord、Excel、Power Pointの扱いになれているので、ビジネススクールの授業としては現実のビジネスの世界で実践的に使える内容を中心にした科目内容にした方が良いと思います。
- この授業、〇〇先生以外の先生がやったら大ブーイングですね。先生のタレント性がいいです。
- 最終レポートはなかなか大へんでした。
- 全体的に〇〇の基本を全ての学生に理解してもらおうという意図が感じとられました。
- 自分も〇〇の基本を少し理解できたと思います。
- モジュールの後半に、重要な分析技法と判定基準が多くあったが、レクチャー時間が不足しているように感じ、少々前倒しの時間（モジュール）配分でも良いような気がします。
- とっつきにくい内容をわかりやすく説明していただきました。
- P.P.T. バックが見にくいです。配色、コントラストをうまく使うと、見やすいのですが。
- 〇〇及び〇〇は理系の人間でも高校などの授業でとばされるものであり、身近に感じられるものではないが今回授業でその障壁は取り除かれたように思っている。
- この分野について、もともと強い苦手意識がありましたが、何とか自分なりに理解し、ついて行くことができました。かなり慎重に授業を進めていただいていることもよく判り、改めて感謝いたします。
- データ解析は初めてでしたが、大変興味を持ってました。後期も〇〇先生の授業を受けたいです、ありがとうございました。

- 夏休み期間中、おさらいの授業「ポイントの整理と各分析の関連した使用方法」をお願いします。是非!!
- 先生の授業は分かりやすく、初心者でもついていけて、感謝しております。
- テキストが少しむづかしい気がします。読んでみても専門的言いまわしが中心のため頭に入ってきません。
- もっと詳しく統計の勉強がしたくなりました。
- 順番入れ換えしてはどうですか？
- 日本の発展を技術に着目して学ぶことができ、非常に価値ある講義であった。
- Discussion の時間が授業中にももっとあれば良いかなと思います。
- 当初小樽の本校での授業であったが、サテライトに移っての授業となった為、時間的負担が軽くなり教室の環境も良くなった。
- すばらしい授業であった。これまでで最も印象に残る授業であった。課題量と教官の意気込みの点で、特に印象深い授業であった。
- 今の授業形式を続けるなら、10人前後が限界だと考えます。
- 先生の研劣がわかりやすく、また楽しく学ぶことができました。
- まったく知らない業界であったが、授業を受けて、まさにベンチャー（起業）が必要な分野である事を知った。他の学生にも受けてもらいたい授業である。
- モジュールの順序がシラバスと変更となった際に連絡がなかったことがありました。
- 外部講師の方がされる授業ですのでその当たりの事務手続きを徹底されてはどうでしょうか。
- 今まで〇〇について体系的に学んだ事がなかったので大変勉強になりました。
- 最初は、こういった解答が必要なのか、不明でしたが、このように分析するという、モデルが提示され、分析の方法をする事ができました。
- 道内企業のケース。
- ポシェットには何が入っているのですか？
- ディスカッションの場で「他のチームを攻撃して下さい」というのが、印象的でした。まだ最初の半年なのでまだ皆ネコをかぶっているように思われますが…。
- 自信を持てていいですよ。だいじょうぶ。
- 現状の業務に大いに参考になり、有効な授業でした。ケース分析、ビジネスプランへの適用が楽しみです。
- 〇〇上の失敗例も対比資料として検討すると、もっと理解度が高くなったと思います。
- 受講生がはもっと多くてもいいと思う。一期生は「国際」と付くと受講生が減る傾向にあり、地元の企業でも国際的に事業展開していると思います。
- ケースとして実例、(特に地場企業)があるとなおよかったと思います。
- 少人数制で意見・質問がしやすく、授業は充実していました。

- 短期間でしたが大変お世話になりました。有難うございました。
- NLP もやりたいです。夏の補修でご検討ください。
- 誤解を招く科目名に思えます。コンピューターテクノロジーの意志決定への応用といった内容を期待していたのですが、良い方向に期待が外れました。
- 従来学んだ事が全く無い分野であり、最初は担当の戸惑いを感じた。後半の具体的コミュニケーションの手法は習得して日々の実践に生かせれば実用的な授業であると感じられた。
- ビジネススクールは、自分自身のコミュニケーションスキルを高める授業が少ないと思う。
- 他のスクールのシラバスを見ると、対人思考力を開発したり、その他人を動かすための能力を開発することに重点が移っているのではないかと思う。(経営者になる人を養成するのであるから知識以上に必要と考える)
- 様々な気づきはあったが、実践するには相当の時間と労力が必要である。なんとか、常に青の状態でいられるような自分を形成したい。
- 「○○○○」という授業のタイトルが誤解を生じやすいので「コミュニケーションスキル」などわかりやすいものにした方がいいのでは。
- 本講義でとり扱う内容は、日々の業務でも参考になるものが多く、じっくり勉強できると良いと思います。
- 科目事体かなり広範囲なものであったと思います。科目の重要性を考えると来年度は2つに分けた方が良いのではないのでしょうか。
- 講義自体はためになりましたが、テストの形態は暗記するものなののでしょうか…？
- テストは評価したい学生の能力を正しく評価出来ないので不可。その他は満足。
- M8 試験についてはレポートとの比較で一考を要するよう感じました。
- レポート（評価）は事前ではなく事後に課した方が良いと感じた。初めて、このような学習をする者にとっては、既に学習している方に比べて大きな成績上のハンディとなっている。
- ○○と○○は2科目に分けるべき。ケースのウェイトを大きくして、知識のスキル化をより重視するべき。機会があるならば、○○論・○○のもっとくわしい講義があると、素晴らしいのに感じました。
- 先生が事前によく準備してくださったことが分かりました。どうもありがとうございました。
- 「知っている」だけでなく「使いこなせる」ようになることが大切というのはその通りだと思います。その点から見ると、最終のテストは「知っている」ことが中心に問われていたと思います。
- 「使いこなせるようになる」ためのトレーニング方法（教育方法）のノウハウが蓄積され、それが来年以降のテストの内容に反映されることを期待します。
- 最後のテストは暗記方式です。40代にはつらい！ テストの方法を工夫してほしかった。
- レポートの評価基準があいまい。

- 試験は記憶力の判定ではないと思う。
- 理解度をためすには別の試験方法を採用して欲しいし、この試験が、ビジネススクールに入学した者に意味があるのかよくわからない。
- 最も不満なのは、PPT の配色：見にくかった。
- このようなテスト形式は意味があるのか。高校や大学の試験で無いのだから、暗記をさせるのではなく理論を使わせるようなテスト形式にすべきと思う。
- 大学院で丸暗記は無意味。
- 「〇〇はもともとそんな確立した理論はありません」「まあだいたいそんなところですよ」「そういう見方もできますね」。多くの人はこれがすっきりしないのですが、私にとってはむしろ非常に説得力があります。ケースや理論を無理矢理のように理屈をつけられるよりよほどすっきりします。満足度の高い授業のひとつでありました。半年間ありがとうございました。今後もですが。
- 最後に言葉を覚える事が目的の授業だという事を知りました。理論を実践的に使用する事が目的かと思っていましたが、今回のテストの内容をみて、言葉を覚える「学習」する事が主たる目的である事が理解でき残念です。
- 課題の個人へのフィードバックをしっかりしてほしい。アントレの〇〇先生のような個人別評価シートを使ってほしい。教員が2人だからできるはずですよ。
- レクチャーがやや単調でつまらないが質問の時間やディスカッションはたいへん有意義だった。
- 最終テストの準備において再度人的資源講義を再考することができた。講義中は全体的ストーリーが理解していない場合があり、M8を連結的に認識することになり、したものを感じた。ありがとうございました。
- 毎回の課題の評価が上がらず、悩みました。とても良い勉強になりました。ありがとうございました。
- 言うこととできることは異なる。知っていることと使えることはちがうというのであれば、使えるようになるための授業を行うべきである。最後の授業でいいわけしたりしないで、もっと早くからアンケートに取り組み、単なるいいわけではなく、実際の行動で応えるべきである。（この授業に限らず）
- 課題の量が少なめだったのでじっくりと授業に取り組むことができました。
- 私のように〇〇の初心者も、なんとかついてこられるという印象です。全般的な理解はできました。
- 私にとっては最も満足度の高い授業のひとつです。
- 後期に向けてのベースとなる知識を、再確認かつ身につけることができました。ありがとうございました。

- 基本科目としては非常に満足いくものでした。
- テキストの問題、課題のすべてについて解説があると、より理解が深まって良いかと思います。
- 私としては、〇〇の授業は初めてだったので、財務諸表、連結、財ム分析の基本を大まかに理解できたので満足しています。すでに〇〇をそれなりに学んだ方々にとっては易しすぎるのかもしれませんが。
- 日頃から財務諸表に触れている方にとってはやや物足りなかったと思う。
- 課題は必ず細かくチェックして頂き、理解へのプラスとなった。感謝しています。
- 先生の指導熱意が伝わる内容であった。
- 仕訳といった〇〇の基礎より、〇〇〇を教えてほしい。ケースを使った授業をもう少しとり入れて欲しい。
- 〇〇をゼロから始めた自分に関していえば、あまり理解が深まらなかった。
- もう少し初心者の授業を用意してほしい。クラス分けをするなど。
- 分析系を多くやってもらいたいです。
- 計算になじむのに、ワークブックが必要。
- ある程度、慣れるには、練習問題が多くあった方が良いと思う。
- 反対意見もあるようだが、ある程度の〇〇能力も必要だと思う。
- テキスト内容少ない。
- MBA のカリキュラムで、ツールとして使うための授業としては、内容がもっとあっても良いと思う。
- 〇〇の基礎を十分理解できました。
- 今後の分析、Bプランにベースとして役立つと思います。
- テストで中間点（考え方 OK）がないときついです。
- まったくの初学者でしたが、多少なりとも会計がわかる様になりました。ありがとうございました。
- 前期は他に〇〇や、〇〇の講義が少ないので、この時間で少し触れてほしかった。
- 先生が学生のレベルや状況をみながら適切に授業内容を考えてくださり、熱心にご指導くださいました。大変感謝しております。
- 〇〇・〇〇の科目は理系出身者用の入門者用の科目が必要かと感じた。
- 〇〇は要らんという人もいるようですが、個人的には満足度は高いものでした。ひとりでは〇〇の問題はマスターできなかったことと思います。必要な人向けだけでも科目としてのこるとよいなと思います。
- 学生のレベルが多岐に渡っていた〇〇先生が苦ふうしながら授業を行っていた様子がうかがえました。〇〇的な知識がない自分にとっては十分なものでした。
- 授業の骨がよくわからないことがときどきあった。〇〇は細いので多少はしょうがないが初心

者には細すぎることも多かった。が…。まあバランスでしょうか。

- 基礎を取得させつつ、実際のケースで〇〇分析を行わせても良かったと思う。
- 何に着眼しなくてはならないか、(分析のキーワード)の基礎を学ぶ事ができました。
- 課題と授業の流れが一貫しており理解しやすかったと思います。(自分のできはともかくとして)
- 雑誌の記事をケースとして使うよりも、各モジュールのポイントの学びのために設計された、いわゆる“ケース”を使った方が得るものは大きいと思いました。
- ケースの課題の量が多くて苦労しました。でも、その分、身についたものも大きいような気がします。
- 自分にとって新鮮で、楽しかった。ありがとうございます。また会える日を楽しみにしてます。
- 楽しかったです。
- 前半ディスカッション、後半レクチャーのスタイルは良かったです。
- 資料は可能な限り配布していただけるとありがたい。
- クラス全員が個々に印刷の作業をすることは OBS 全体にとっても大きな時間的ロスを感じる。
- 夏休み復習して理解を深めます。
- FCF 計算や企業価値計算をたくさんトレーニングしたほうが後期のためになるのかなと思いました。
- 授業のときは良くわかるが、家に帰ると…。
- ファイナンスの学習の目標到達レベルが明確でない。
- 入学者レベル～目標レベル、差をうめる作業が講義。
- 原状+ α というイメージがします。
- 技術系入学者には、数式の方がわかりやすい。
- もう少し〇〇〇〇に特化して教えていただいた方が良かったと思います。
- 実際のビジネスであまり利用シーンがないため理解しにくい。
- 簡単なケースを用いて練習問題を増やすと理解しやすいように思います。
- 8 モジュール終わった段階で企業価値を出すのは遅すぎる。4 M くらいまでに終えて、ケースをやった方がよかったのではないか。
- 他 BS と比べ、コーポレートを学んだ、実感がないと思う。
- 授業のスピード、基礎力をつけるためのレベル等、とても配慮いただきありがとうございます。〇〇〇〇に興味を持ち出しました。
- 授業中に企業価値の計算を、5～6 社実演してくれれば、理解度がふかまると思います。
- 理論は当然わからないのですが、数多く、実際の計算問題をこなす事で、体がおぼえると思います。

- 修飾語が多かった。
- 理論、計算方法は理解しました。ケース等での活用で更にファイナンスの必要性和意味を理解したいと思います。
- 前半と後半のレベルに落差がある様に感じました。できるならば、もう少し、つつこんだ〇〇に関するものが、必要と考えます。
- 全体として学んだことが少なかった。
- 実務との連動性がなく理解がむずかしかった。しかし個人スキルとして問題があるので今後ケーススタディ等で、理解を深めていきたい。
- 理論がいきなり数式に変わる時についてゆけなくなりました。
- やはり事前に基礎知識が必要だと思います。(とくに〇〇に無関係な者にとっては)
- マックスウェーバーはかなり重かった。授業は前半、後半共におもしろかった。
- 〇〇先生の講義は、大変興味深く聞くことができた。
- もう少し、時間があれば良かったと思う。
- 〇〇先生の授業も〇〇先生の授業も共にすばらしかったです。
- この科目をとらなかった二期生(M1)にも、来年の受講をすすめております。
- 今後、役に立つ講義だと思いました。e-learningの活用をお願いします。
- 講義内容は興味深く、2つの講義が、別にあっても良いと感じた。
- 前期科目で一番満足しました。
- 国内税法に即した授業の方が望ましい。
- 英語を訳すだけで、労力を使い、身につかない気がした。
- 法人税に関する初心者が受講するということを考えると1年の後期に「法人税の基礎」2年前期に「タックスプランニング」と分けた方が効果的だと思います。
- 〇〇先生は学生に遠慮し、「それは〜だ」と断言しないようにしていたようですが初心者としては答をはっきりしてほしいと感じました。
- 英語の読解力を求める講義が多すぎる。
- もっと日本の現実添って、内容の講義をすべきである。
- 講義の事前調べをきちんとしてほしい。
- 工場見学または実際の現場の人の話が聞きたかった。
- 〇〇〇〇を全く勉強・経験したことのない人にはちょっとヘビーかもしれない。
- また参考図書の紹介などがあればもっと良かったと思う。(素人に授業だけで理解するのは厳しいと思う)
- 基礎科目に入れても良いと思う。
- 実践的授業であった点が非常に良かった。
- 授業大変おつかれ様でした。

- ありがとうございました。
- 授業的には IPO できる企業をつくれる様全力でがんばっていきたいと思います。今後共どうぞよろしくお願い致します。
- 出した課題（最終レポート）に対するフィードバックが欲しい。
- 企業の具体例をもっとレクチャーの中に入れるともっと興味を引くと思う。
- 社外講師や実際のマーケッターがどのような方法を使っているか、実務での利用例の説明があると、よりイメージがしやすいと思う。
- ありがとうございました。もう少し、実践で使えるレベルまで力をつけたいと思いますが まだまだレベルが低く継続的に勉強していききたいと思います。
- ○○○○全般について体系的に学ぶことができて、とてもよかったのですが、質問調査票の分析やグルインなどもっと深くやりたかったという気もしました。
- 課題の設定（アンケート調査票作成等）が実践的でかなり良かった。
- アンケート調査の集計、分析レポートを作成したが、フィードバックがあれば良い。
- 実践的な集計・分析はある程度、分析が成功するテンターを用意してもらえたら良かった。自分達で使ったアンケート結果は、意図どおりの分析結果が得られなかった気がする。
- 最終的に資金調達のためのシステム（証券市場 銀行市場）が理解することができた。最初に全体の流れを説明してから、各モジュールの説明があった方がより深い理解ができたのではないかと思う。
- コラボレーションの使方を工夫した方がもっとわかりやすいと思う。
- ○○システムと○○○○を区別して講義を設定（科目を別にすべきでは）して欲しかったです。
- ○○システムで学ぶ事項も多く、3つのモジュールで扱うのは、やはり無理があると考えます。しっかりと○○システムを学ぶ意味でも、8モジュールは必要かと実感しています。また、○○の授業に関しては、明確に講義内容を示し、それに沿った講義をして欲しいです。突然に客がきたり、「今日は早目に終る」などといった思いつきではやって欲しくないことです。
- また、○○システムを1年後期に設定し、○○の応用面では、2年前期で2単位とすることで、基本、基礎、応用とつながりが持てると考えます。
- ○○システムは非常に授業計画が立てられ、事前資料もよく、学ぶ側にとっても見習うことが多くありました。○○先生有難うございました。
- 1年目に、この程度の内容をすべき。企業価値とは何かという、基本的なところなので、OBS全員が聞くべき内容だと思いました。
- ○○というものは、遠い世界の話ではなく、身近に考えられる点も多くあると感じました。
- 前半と後半は、それぞれもっと時間をかけてほしい分野なので1つの科目でなく2本立てにしてもよいのでは？
- ○○システムのかかえる問題点について分りやすく講義していただきどうもありがとうございます

ます。

- 面白かったです。勉強になりました。ありがとうございました。
- 非常に勉強になりました。
- 正直なところもったいないという感想である。〇〇先生、〇〇先生両者それぞれにフルに 8 モジュール授業をやって欲しかった。
- PowerPoint の資料をあらためて見直すとその物量に圧倒されます。ありがとうございます。
- ありがとうございました。
- 用語にしたがって分類的なディスカッションも多くあったが、分類概念が意志決定に関係するの可否か、よくわからないディスカッションもあった。
- いろいろな企業を題材に取り上げ、ためになりました。ありがとうございました。
- 全体を体系的に最期にまとめてほしかった。
- 概念がわかりにくい面があったので、事例を増やして何度も確認する必要があった。
- 〇〇の先生のための〇〇の授業のようであった。
- CSR とは法律に限ったことではない。
- もっと CSR を中心として授業を考えるべき。
- 担当教官がいなければ外部講師や企業の現場の方の講和等があった方が良い。
- ありがとうございました。
- 調査を実際に行えたのは非常に役に立った。業務に直接役に立つ授業であった。
- わかりやすかったです。
- 分かりやすく、あきさせない授業でした。
- 課題のボリュームも多すぎず、少なすぎず適切でした。
- 身になる度合いが高いクラスでした。
- テキスト（参考文献）の例示がほしかった。
- 実務をやっている中では、日常的にやっていることを、むずかしく説明してもらったという印象がある。
- 事例の使い方をくふうしてはいかがでしょうか。
- 既数と詳細数字がミックスされた問題が多く、わかりにくかった。
- 2 人の先生は講義内容に課題がある。
- 情熱ある先生とそうでない先生の相違は OBS のブランドを傷つける。
- テストへ向けて自分なりに授業を振り返りながら、M1 から M4 が財務諸表にかかる原価計算、M5 が損益分岐点分析と自分なりに理解することができ、かつ担当教官が非常にわかりやすく進めてくれたことがよくわかりました。
- しかしながら M6、M7 は全く理解されおらず、とても残念です。M8 のフォロー、大変助かりました。

- 教科書は有料でもいいから配布してほしい。インク代が馬鹿にならない。
- 教科の名称は変えた方がよいと思います。もっと内容を適格に表現したものに。
- M8の一講目が〇〇と、M7分は理解できませんでした。
- 一部の授業で教官の話しが聞き取りづらかった。
- 〇〇の常識（2S、LM等）は何か自分で復習出来る資料があるとよかった。授業のPPTだけでは事後課題をやるときに一步ふみ込めない。
- 〇〇分析と〇〇法の後ろの方が消化不良になった。課題は非常に重かったがかなり良い引き出しが出来たと思う。
- 〇〇学は始めてだったので、授業の内容は理解できないところも多いのですが、興味を持ってました。今後とも興味を持ちつづけていれば、授業の内容をハダで感じるができるかもしれません。
- 〇〇の知識があまりなかったためか、〇〇分析、〇〇分析の両方がなんとなく終わったように感じます。
- もともと、〇〇は好きですので、講義そのものは勉強になりました。
- 今後〇〇学基礎、〇〇分析に関する、科目の開講を希望します。
- 良い課題を出してくださったのに、取組む時間が無く期日にはほとんど提出できなかったのが残念です。授業の問題ではなく自分の問題なのですが。
- Rに気をとられがちでしたが、後半、時系列データ分析はとてもおもしろかった。
- 〇〇分析というものが、非常に数学的であるという事が認識できました。新聞のみ方が弱干変わった気がします。
- 提出課題にページ数の設定などをした方が、どこまでやれば良いという目安ができて良いのではないのでしょうか。
- 自分の力では難しすぎて消化不良となっていました。後、Rには苦勞しました。
- 〇〇学ろ〇〇が離れていてアンバランスな組合せでした。
- 私にとっては、おもしろかった。体系的な一般の〇〇学ではなかったが、これでいいのではないかと思う。〇〇解析のなり立ちがわかったので、あとは何とかなるだろう。
- 〇〇の基礎知識を学ぶ授業、〇〇データを分析する授業と分かれて講座があれば良いと思う。
- かなり授業内容としては、ハイレベルの感じがしました。
- 自分の準備が不十分だったことが残念。
- ラスト授業の資料は穴埋形式でしたが、授業の要点がどこにあるのかが分かり予習がしやすかったです。
- 穴うめ式のレジュメが良かった。もっと厳しく事前課題を出しても良いと思う。(本文の要約など)
- まだ理解不足ですがMBAが備わるスキルとして十分に満足しました。

- とても勉強になりました。強く、満足しています。授業の運営方法も非常に上手でした。他の教員にも参考にしてほしいです。
- 先生の話はおもしろく、勉強になるが、テキストが読めないのがつらい。
- 理論の勉強がもっとしたくなりました。
- 既存のフレームで学習することは一味違う授業の進め方が新鮮で面白いと思った。
- 1 番濃くて学びの多い講義でした。
- 素晴らしい授業だったと思います。
- 夏休み期間中に本を読んでおけばよかった。
- 起承転結による論文構成など自分自身直すべきところは多いと感じた。
- この講義は基本的な内容でしたので次の段階の科目として「〇〇〇〇」をディスカッションなどを活用して行ってほしい。
- 〇〇法における専門性については深い内容の講義であった。
- 提案としてはビジネスと知財の連動性や、経営における知財の有効性等を講義してほしい。
- かなり広い範囲を7 モジュールで解説するのは大変だったと思います。
- 地域的な立体観を得るために2 年後期ではなくもっと前に実施すべきだったと思う。特にビジネスプラン選択者には有効である。
- 2 年生の前期に8 コマで実施してほしい。なぜならば、後期のビジネスプランの幅が広がるため。(グローバルなビジネスが検討できる)
- 自分達が住んでいる〇〇経済や日本と関わり合いの深い中国を含めた〇〇の経済についてふれる事のできるいい機会を得ました。
- 授業内容に関しては具体性が高く非常に興味深かった。この授業を1 単位で教えることには時間が少なすぎると思う。また、2 年の後期に配当科目とするのではなく、1 年後期、2 年前期などと早めに配当していただきたいと強く思いました。
- 皆もっと授業に参加してくれれば盛りあがったんですがねえ。
- とても勉強になりました。
- システム設計のチャートの書き方、考え方を理解するのに時間がかかった。
- 参考なる図書(簡単なもの)が、当初あればよかったと思う。
- 授業に関してではありませんが、マークシートが分りづらい。
- 本科目は発展科目ではなく必修科目にすべき。なぜなら、最新の〇〇〇〇の知識は MBA の必須項目ではないかと思う。
- 前半の副学長の授業で〇〇〇〇取り上げたが、その際の事前課題で問題そのものが間違っていた。後でその間違いは改められたが E-Learning には全く特記として記載されず、はなはだ不誠実さを感じた。
- 面白い授業でした。有難うございました。

- ○○教授の作成したレジメは以前よりは良くなったがやはりまだ字が細かく見にくい。字のポイントを28以上で行うことをこころがけて欲しい。(学生の年齢構成を考えて)ビジネススクール内では28ポイント以上で作成することは常識です！
- ○○先生の講義について非常に大切なところを講義していることはわかります。しかし、難しいのとボリュームがありすぎて理解できませんでした。少しボリュームをおとしてディスカッションの時間などがあるとさらに良いような気がします。
- 表の評価はあくまで○○先生に対するものです。○○大学に行かれてしまうと、この授業はどうなるのでしょうか？
- ○○が2コマではさびしい。もっとつつこんでやってほしかった。
- これからも英語を学びたくなった。
- 英語を再勉強する機会を得てとてもよかったです。
- 毎回小樽方式をやってほしかったです。とても楽しいし、勉強になりました。3人でやったらどうなのでしょう？ これからも、続けていって下さい。
- 非常に素晴らしい授業でした。2週間ごとの授業がとても楽しみにしておりました。ありがとうございました。
- 2週間に1回の間かくでは、英語力の向上が望めないのでは？ 短期集中講義方式が良いのでは？
- 参加者のレベルが違う中で、うまく授業が運営されていたと思う。
- 二年後期のビジネスプランⅢと関連付けるなら二年前期、もしくは一年後期の開講が望ましいと思います。二年後期では○○的な要素を盛り込むのが難しくなる。
- 事前課題、事後課題が締切日の1週間以内に設定されるなど準備時間が短かったことに不満を感じました。
- 1単位で教えるにはボリュームが大きい授業で2単位にして8モジュールの講義にするべきだと思います。
- ただ単に、教科書に沿って、学習を進めるのではなく、教授の独特な見解やオリジナリティのある考えを聞く事ができたのが、この授業の魅力の一つでした。
- ○○論は北海道の大学で勉強する為にも1年の後期あるいは2年の前期での履修すべき科目であると思われる。

小樽商科大学教育開発センター

1. 設置の経緯

平成12年6月に教育課程改善委員会のもとにFD専門部会が設置され、それ以降本学においても組織的なFD活動が積極的に行われてきた。その結果、教員にFD活動が認識され教授法の改善や授業参観による相互FD活動などの成果が見られるようになってきた。しかしながら、大学入学後に学習の目的を失った学生は、大学において何をどう学べばよいのか苦しんでおり、このような学生に対する学習支援が急務になっている。そのためには学生の人格形成（品格ある人格）を助ける教育プログラムを開発する必要がある。一方、専門職大学院（ビジネススクール）の設置に伴って従来の研究者養成を目的とした大学院教育とは異なる教育課程・教授法等を検討する必要がある。専門職大学院では多様な学習歴を持つ学生（主に社会人学生）が入学してくることが予想され、そのような学生が修了したときの質を保証するためにも、授業の質を保証する必要がある。授業の質を保証するためには、計画的な予習と課題の設定、双方向の授業形態、落ちこぼれを作らないシステム、多彩でわかりやすい教材の開発などが必要である。本学の教育の質を保証し、さらに世界水準の教育を提供するためのFD活動組織を設置する必要がある。そのために、それまでの教育課程改善委員会を発展的に解消し、その機能を継承する組織として平成16年4月に教育開発センター（以下、「センター」という。）を設置し、規定（資料参照）を制定した。

2. 目的

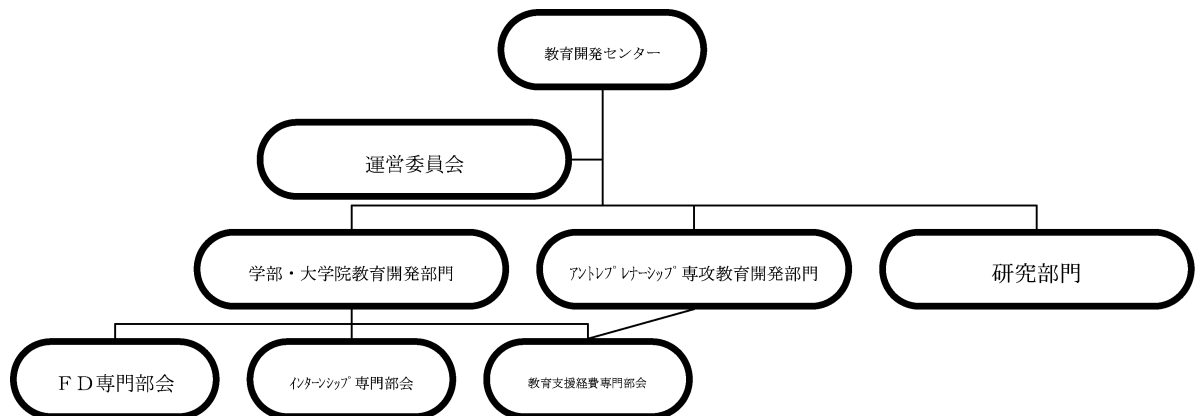
センターは、小樽商科大学の学部、大学院現代商学専攻及び大学院アントレプレナーシップ専攻における教育方法の研究・開発、教材研究・開発、授業評価法の開発等ファカルティ・ディベロップメント及び教育課程の編成等に関する検討を行い、本学の教育を活性化することを目的としている。

3. 組織

センターの組織構成は付図1のようである。センターを運営するために小樽商科大学運営委員会（以下「運営委員会」という。）を設置し、センターの管理運営に関する基本方針や予算に関することを審議する。この運営委員会のもとに「学部・大学院教育開発部門」と「アントレプレナーシップ専攻教育開発部門」を設置し、平成17年4月には、「研究部門」を新たに設置した。「学部・大学院教育開発部門」は、学部及び大学院商学研究科現代商学専攻における教育課程の基本方針、教育内容・方法の改善、教員養成のあり方、FDに関する事項等の業務を行う。一方、「アントレプレナーシップ専攻教育開発部門」は、専門職大学院であるアントレプレナーシップ専攻に関する体系的教育課程の編成及び実施体制、授業改善・教授法研究・教授法の改善、事例研究・実地調査の実施、

授業評価と授業改善システム、FD 研修等の業務を行う。さらに、「研究部門」は、e-Learning システムの研究・開発、e-Learning システムの運用・改善、教育改善データベース、カリキュラム開発、教育評価法の開発、FD 関連資料の調査・収集に関する業務を行う。

付図 1 教育開発センター組織図



小樽商科大学教育開発センター

資料

小樽商科大学教育開発センター規程

(平成 16 年 4 月 1 日制定)

第 1 章 総則

(趣旨)

第 1 条 小樽商科大学学則第 6 条第 2 項に基づき、小樽商科大学教育開発センター(以下「センター」という。)の組織及び運営に関する必要な事項は、この規程の定めるところによる。

(目的)

第 2 条 センターは、小樽商科大学(以下「本学」という。)の学部、大学院現代商学専攻及び大学院アントレプレナーシップ専攻における教育方法の研究・開発、教材研究・開発、授業評価法の開発等ファカルティ・ディベロップメント(以下「FD」という。)及び教育課程の編成等に関する検討を行い、本学の教育を活性化することを目的とする。

第 2 章 センター

(組織)

第 3 条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) センター専任助手
- (4) その他の職員 若干名

(センター長)

第 4 条 センター長は、教育担当副学長をもって充てる。

2 センター長は、センターの業務を掌理する。

(副センター長)

第 5 条 副センター長は、センター長が指名する。

2 副センター長は、センター長を補佐し、センターの業務を行う。

(センターの運営)

第 6 条 センターを運営するために、小樽商科大学教育開発センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

(運営委員会)

第 7 条 運営委員会は、次の事項を審議する。

- (1) センターの管理運営の基本方針に関すること
- (2) センターの予算に関する事項
- (3) その他センターの管理運営に関する必要な事項

(運営委員会の構成)

第8条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 学部教務委員会委員長
- (4) 大学院現代商学専攻教務委員会委員長
- (5) 大学院アントレプレナーシップ専攻教務委員会委員長
- (6) 第14条に定める学部・大学院教育開発部門の長
- (7) 第18条に定めるアントレプレナーシップ教育開発部門の長

(運営委員会の委員長等)

第9条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 センター長は、運営委員会を招集し、委員長となる。
- 3 センター長に事故あるときは、副センター長がその職務を代行する。

(運営委員会の議事)

第10条 運営委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立する。

- 2 運営委員会の議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第11条 運営委員会は、必要に応じて委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

第3章 部門

(教育開発部門及び研究部門の設置)

第12条 運営委員会のもとに学部・大学院現代商学専攻教育開発部門（以下「学部・大学院教育開発部門」という。）、大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門（以下「アントレプレナーシップ教育開発部門」という。）及び研究部門を置く。

(学部・大学院教育開発部門)

第13条 学部・大学院教育開発部門は、学部及び大学院現代商学専攻に係る次の業務を行う。

- (1) 教育課程の基本方針に関する事項
- (2) 教育内容及び方法の改善に関する事項
- (3) 教員養成教育の在り方に関する事項
- (4) FDに関する事項
- (5) その他教育課程等の改善に関する事項

(学部・大学院教育開発部門の構成)

第14条 学部・大学院教育開発部門は、次に掲げるスタッフで構成する。

- (1) 部門長

- (2) センター長
- (3) 学部教務委員会委員長
- (4) 大学院現代商学専攻教務委員会委員長
- (5) 各学科から選出された教員 6 名
- (6) その他必要に応じて部門長が指名した者 若干名

(学部・大学院教育開発部門のスタッフの任期)

第 15 条 前条第 5 号に定める学部・大学院教育開発部門のスタッフの任期は 2 年とする。

2 前項のスタッフに欠員が生じた場合は、これを補充し、その任期は、前任者の残任期間とする。

(学部・大学院教育開発部門の部門長等)

第 16 条 学部・大学院教育開発部門は、第 14 条第 5 号に定めるスタッフの互選により部門長を選出する。

2 部門長は、学部・大学院教育開発部門の業務を掌理する。

3 部門長に事故あるときは、部門長があらかじめ指名するスタッフがその職務を代行する。

(アントレプレナーシップ教育開発部門)

第 17 条 アントレプレナーシップ教育開発部門は、アントレプレナーシップ専攻に係る次の業務を行う。

- (1) 体系的教育課程の編成及び実施体制に関する事項
- (2) 授業改善、教授法研究等、教育改善に関する事項
- (3) 事例研究、実地調査の実施方法等に関する事項
- (4) 授業評価の実施と授業改善システムに関する事項
- (5) FD 研修に関する事項
- (6) 教育改善データベースに関する事項
- (7) その他教育課程等の改善に関する事項

(アントレプレナーシップ教育開発部門の構成)

第 18 条 アントレプレナーシップ教育開発部門は、次に掲げるスタッフで構成する。

- (1) 部門長
- (2) 副センター長
- (3) アントレプレナーシップ専攻会議で選出された教員 若干名
- (4) その他必要に応じて部門長が指名した者 若干名

(アントレプレナーシップ教育開発部門のスタッフの任期)

第 19 条 前条第 3 号に定めるスタッフの任期は 2 年とする。

2 前項のスタッフに欠員が生じた場合は、これを補充し、その任期は、前任者の残任期間とする。

(アントレプレナーシップ教育開発部門の部門長等)

第 20 条 アントレプレナーシップ教育開発部門は、第 18 条第 3 号に定めるスタッフの互選により

部門長を選出する。

2 部門長は、アントレプレナーシップ教育開発部門の業務を掌理する。

3 部門長に事故あるときは、部門長があらかじめ指名したスタッフがその職務を代行する。

(研究部門)

第 21 条 研究部門は、次の業務を行う。

(1) e-Learning システムの研究・開発に関する事項

(2) e-Learning システムの運用・改善に関する事項

(3) 教育改善データベースに関する事項

(4) カリキュラム開発に関する事項

(5) 教育評価法の開発に関する事項

(6) FD 関連資料の調査・収集に関する事項

(7) その他教育課程等の改善に関する事項

(研究部門の構成)

第 22 条 研究部門は、次に掲げるスタッフで構成する。

(1) 部門長

(2) 部門長が指名した者 若干名

(3) センター専任助手

(研究部門のスタッフの任期)

第 23 条 前条第 2 号に定めるスタッフの任期は、2 年とする。

2 前項のスタッフに欠員が生じた場合は、これを補充し、その任期は、前任者の残任期間とする。

(研究部門の部門長)

第 24 条 研究部門の部門長は、副センター長をもって充てる。

2 部門長は、研究部門の業務を掌理する。

3 部門長に事故あるときは、部門長があらかじめ指名する第 22 条第 2 号のスタッフがその職務を代行する。

(専門部会)

第 25 条 学部・大学院教育開発部門、アントレプレナーシップ教育開発部門及び研究部門に、専門的事項を審議するために、必要に応じて専門部会を置くことができる。

第 4 章 補則

(事務)

第 26 条 センターに関する事務は、学務課が行う。

(雑則)

第 27 条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関する必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

- 1 この規程は、平成 16 年 4 月 21 日から施行する。
- 2 この規程施行後、最初に選出される第 14 条第 5 号及び第 18 条第 3 号のスタッフである者の任期は、第 15 条第 1 項及び第 19 条第 1 項の規定に関わらず、平成 18 年 3 月 31 日までとする。

附 則

この規程は、平成 17 年 4 月 1 日から施行する。

編集：小樽商科大学教育開発センター

連絡先：〒047-8501 小樽市緑3丁目5番21号

○小樽商科大学教育開発センター

電話 0134-27-5297

○小樽商科大学学務課教育課程改善係

電話 0134-27-5240

FAX 0134-27-5243

E-mail kaizen@office.otaru-uc.ac.jp

ホームページ：<http://www.otaru-uc.ac.jp/hkyomu1/fdhome/index.htm>